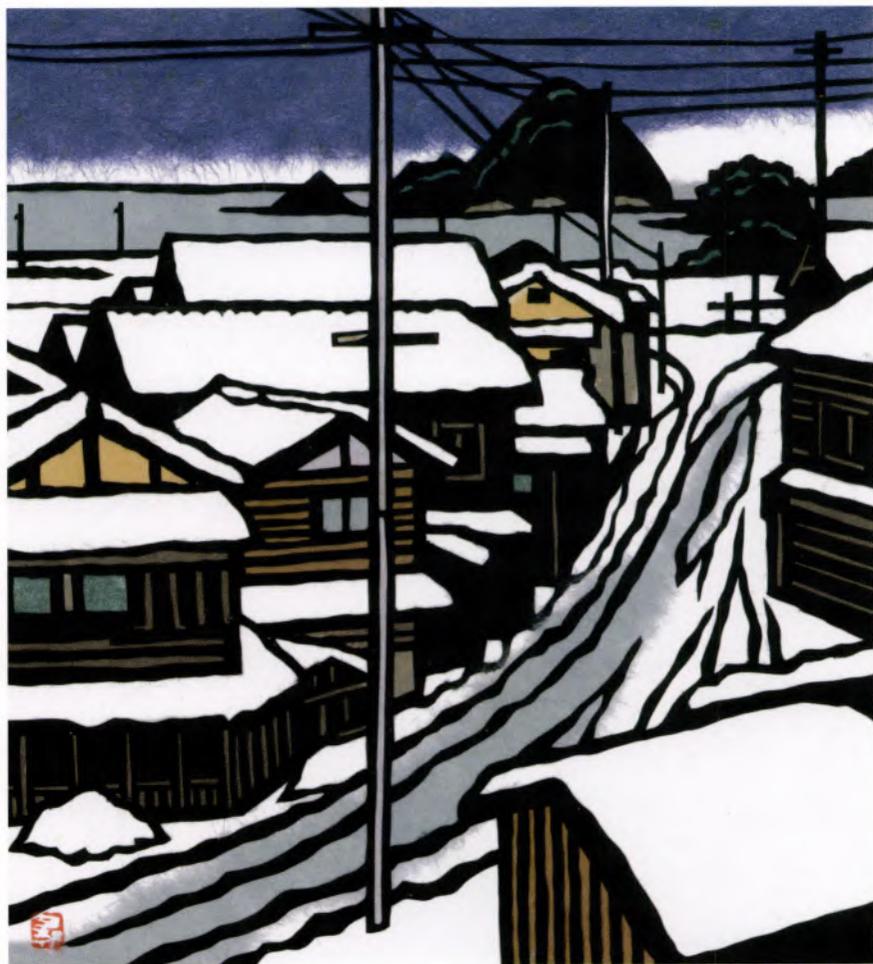


川柳塔



平成三十一年三月一日発行
創刊大正十三年 通卷二一〇一号

日川協加盟

特集 **こんにちは新同人です**

No.1101

二月号

第七回春の川柳塔まつり誌上大会募集

川柳塔社では、日頃句会などにお出掛けになれない方々を含め、結社を越えて広く川柳をお楽しみいただく機会として、第七回誌上大会を企画いたしました。参加要領は左記のとおりです。是非皆様のご参加をお待ち申し上げます。

川柳塔社

課題と選者(各題二句 共選)

課題吟 「鍵」 真島久美子(番傘川柳本社)

「三宅保州(川柳塔社)

「顔」 岡崎守(札幌川柳社)

「山本希久子(川柳塔社)

「赤松ますみ(川柳文学コロキユウ)

「小島蘭幸(川柳塔社)

投句要領 規定の用紙(コピー可)または、用紙の入手できない場合は便箋などご使用いただいても結構です。

投句料 一〇〇〇円(切手は不可)

投句締切 平成三十二年二月二十日(水)消印有効

送付先 〒543-0052

大阪市天王寺区大道一―一四―一七―二〇―

川柳塔社 誌上大会係 宛

TEL/FAX(〇六)六七七九―三四九〇

賞及び発表

各題特選に賞呈 発表は川柳塔誌五月号誌上川柳塔誌を購読されていない方には発表誌呈

1 講座 90 分、全 40 講座をお好きなものから受講できます。

心理学基礎コース

フロイト、ユングや話題のアドラー心理学、箱庭療法やカラーージュなどアート系の学び知りたかった「こころの不思議」を学べます。



箱庭療法の講座で実際に作ります。

春開講
受講生
募集!

経験豊富な講師陣から、心理学の基礎を見て、聴いて、声に出して、全身で体感しながら学んでいただけます。初心者の方がたくさん来られる講座です。

無料体験講座お申込み受付中

心理学基礎コースや、こころ学びのことがよくわかる無料体験講座を実施しています。下記URLまたはQRコードから、お気軽にお問い合わせください。

<https://www.ksec.or.jp/?p=6421>



お申し込み・お問い合わせ

公益財団法人 関西カウンセリングセンター

TEL 06-6809-1225 FAX 06-6809-1226 MAIL koza@ksec.or.jp

HP <https://www.ksec.or.jp> [関西カウンセリングセンター](https://www.ksec.or.jp) 検索

〒530-0047 大阪市北区西天満 2-6-8 堂島ビルディング5階

▼京阪本線・地下鉄御堂筋線「淀屋橋駅」①番出口より北へ5分

▼京阪中之島線「大江橋駅」⑤番出口より北東へ3分

初詣は千光寺

小島蘭幸

海が見えた、海が見える。五年振りに見る尾道の海はなつかしい。林美美子「放浪記」。瀬戸内の経済都市として栄えてきた尾道には、冒頭の林美美子さんをはじめ多くの文学者が足跡を残しています。千光寺公園の文学のこみちを散策すると、小説、詩、短歌、俳句等で活躍された文学者の石碑が数多く目に飛び込んできます。

平成13年7月7日、路郎先生のふるさと尾道の文学公園に路郎、葎乃ご夫妻の比翼の句碑が建立されました。以前にも書いたと思いますが、私は句碑建立の翌年から、路郎先生のふるさと尾道の千光寺に初詣に行っています。今年も長女と二人の孫、妻と私の五人で参拝しました。

私は「9月28日に開催される95周年記念第25回川柳塔まつりが盛会でありますように、佳句が沢山聞けますように」とお祈りしました。おみくじは妻も私も大吉でした。八歳の陽は、昨年買った御朱印

帳を持参していて、二度目の揮毫を喜んでいました。快晴の千光寺から、尾道水道、尾道大橋、路郎先生が幼少時代に過ごされた向島の美しい風景をしみじみ見ることが出来ました。

おれに似よ 俺に似るなと子を思ひ 路郎

飲んで欲しやめてもほしい酒をつぎ 葎乃

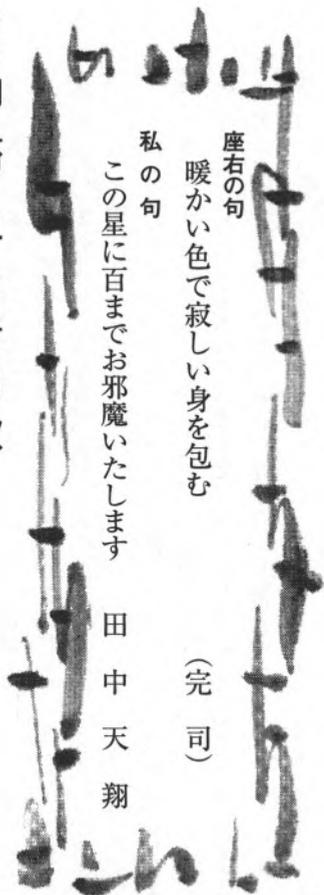
路郎、葎乃ご夫妻の比翼の句碑にお酒を供えて、川柳雑誌・川柳塔通巻一〇〇号のご報告をさせて頂きました。比翼の句碑と、二人の孫と一緒に記念写真をパチリ。

「ほく、ロープウエーダーいすき」四歳の拓の大好きなロープウエーにも乗りました。

路郎先生がお生れになった尾道の街を散策していると、あちこちに尾道ラーメンの看板、のれんが目立ちます。昼どきでしたので、どこの店も行列が出来るほどの満員の盛況でした。私達はホテルでランチをいただきました。

夜は母を囲んでの新年宴会です。今年も母から出席者11名お年玉をいただきました。

「カンパイ!!」本年が災害のない穏やかな一年でありますように。



川柳塔 二月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「但馬・香住海岸」

■巻頭言 初詣は千光寺	小島 蘭 幸	……(1)
南大阪川柳会に寄り添って	前 たもつ	……(2)
川柳塔(同人吟)	小島 蘭 幸 選	……(4)
川柳塔の川柳讃歌 ⁽¹⁶⁾	木津川 計	……(42)
橘高薫風句抄		……(43)
自選集		……(44)
句集の森		……(47)
温故知新		……(47)
水煙抄	西出 楓 楽 選	……(48)
英語 de Senryu ⁽⁸⁾	吉村 侑 久 代	……(67)
誹風柳多留一二篇研究 ⁶⁸		……(68)
愛染帖	新家 完 司 選	……(70)
檸檬抄「振る」	川端 一 歩・山岡 富 美 子 共 選	……(74)
■追悼文(松山芳生さんを悼む)	濱 山 哲 也	……(77)

南大阪川柳会に寄り添って

前 たもつ

金井文秋会長 四十数年

私が川柳を始めて四年ほどたった頃、先輩に「小出智子さんらベテランがおられるので勉強になる」と誘われ、平成九年の一月、玉造の「老人憩いの家」の会場を訪ねました。

句報は見当らないが、日記によれば、「力不足そつとささやく初句会」の句があります。二回目の句会であったか、智子さんに「選者は断るものでない」と教えられました。

金井文秋さんは知る人ぞ知る、無口で頑固、明治生まれの一徹と誰もが認めていました。文秋さんは、豆秋、小松園さんらが開かれた川柳雑誌阿倍野支部から数えて四十数年、南大阪川柳会を、九十歳で大往生するまで、引っぱって来られました。

当時の錚錚たる主なメンバーをあげます。

阿萬萬的、西田柳宏子、玉置重人、河井庸佑、八十田洞庵、田中透太、小出智子、

一路集「人情」……………江島谷勝弘選 (78)
「化ける」……………倉益一瑠選 (79)

川柳塔鑑賞……………木田比呂朗 (80)
水煙抄鑑賞……………前田楓花 (82)

われら紅い花川柳会……………月波与生 (83)
『麻生路郎読本』余滴(50)……………栗原道夫 (86)

特集「こんにちは 新同人です」……………朝日なわ柳壇 今年の十秀 (88)

せんりゅう飛行船(98)……………新家完司 (92)
インスピレーション・ナビ 印象吟……………大西泰世 (94)

一月本社句会……………弘津秋の子 (96)

句会燦燦……………樋口由紀子・高瀬霜石共選 (100)

川柳塔WEB句会「無 い」……………各地柳壇(佳句地十選/米田恭昌・森 茜) (101)

二月各地句会案内……………(102)

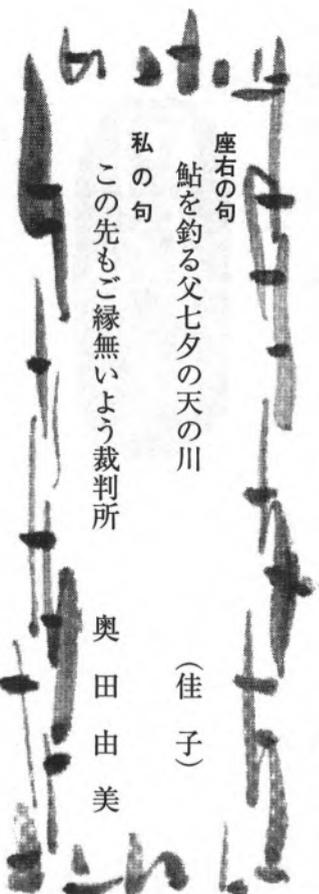
柳界展望……………(116)

■編集後記(ひとこと/大石洋子)……………朱夏・勝弘 (118)

座右の句……………(120)

鮎を釣る父七夕の天の川……………(佳子)

私の句……………奥田由美



西出楓楽、鍛原千里、津守柳伸、津村志華子……等を文秋会長だからこそまとめられたのです。

寺井東雲会長の後を継いで

平成九年三月から寺井東雲さんが、七年余り会長をされました。この方は元特攻隊で、飛行機乗りの話をいろいろ聞きました。また、宴会には旅姿で盛り上げる芸達者でした。

この間、私は枚方の牧野から玉造の地へ、平成十三年三月に引越しました。この引越しは川柳が縁だったので。妻は老後は都心と決め、探していました。しかし、会場の目の前のマンションに運命的に出会ったのです。

東雲さんが病気になり、平成十六年六月から三代目の会長の重責を担うことになりました。

私の終いの住処を見つけてくれた玉造の会場から北区の「住まい情報センター」に十八年六月に移りました。会員の協力で川柳雑誌の流れを絶やさず、夜間の句会を継ぎ、私なりに、頑張つて来ましたが、地域に根付いた句会がつかれていないことが一番の課題と思っています。

川柳塔

小島蘭幸選

岡山市 工藤千代子

雲のない空で涙がすぐ乾く

おおい雲母のない子になりました

カーテンも変えたし靴も磨いたし

来年と遊ぶ暦を選ぶ師走

足音が静かになった老いてきた

大好きな人とはうどん食べません

山陰は山陰過疎は過疎の冬

赤ちゃんの瞳まともに見られない

思い出をめぐれば雨が降り止まぬ

何もなかったけれど眼は澄んでいた

若さでは掴めぬものを持っている

ひとつ忘れふたつ忘れて古希になる

三田市 福田好文

軽トラがベント追いつく田舎道

野良仕事観光バスの視線浴び

渋滞でガイドの十八番底をつく

かに三昧甲羅で地酒酌む至福

取っておきの笑顔つつんで行く見舞い

福ちゃんと呼ばれ育つも福知らず

豊中市 藤井則彦

螺旋階段ゆっくり降りるいい余生

息遣いまで確と届けるピアニスト

いつの間に長老にされてた私

金婚の日からダブルにしたベッド

プラグミが増えてカラスも寄りつかず

薬断ちするとたちまち病抜け

鳥取市 岸本宏章

県境の山が台風弱くする

県境を越せば広がる晴れの国

妖怪の町のお化けは恐くない

蟹食べるしけの漁場を思いつつ

リセットができる子供のけんかなら

美しい大山恐い神もいる

奈良市 大久保 眞澄

単身赴任ネコに家長の座を譲る

名譽職にしておくややこしい男

これ見よがしに夫が掃除し始める

社の不正上司直伝とも言えず

何もかも見通せる窓際の席

居場所がほしい赤ちゃんも老人も

松山市 宮尾 みのり

何でもない話で続く長電話

コート着る犬童謡は通じない

限界集落自然淘汰の途中だな

回転木馬消えたあの子が見つからぬ

想い出も美化して老いのエッセンス

日々多忙投句忘れるほど多忙

松江市 松本文子

たまたま月が美しかった晩のこと

聞き流してくれた私の吐息

第九が流れる忘れものは無いか

満月に浮かぶあなたの影法師

帰る者帰り去る者去った秋

右手と左手握手して独り

岡山市 丹下 凱夫

坂の町海が見えたり猫が見えたり

路地裏に大きな貨物船がいた

ありがとう本日海は凪いでいる

街路樹の夕日 千手観音さま

蓬髪にしてから誰も寄りつかぬ

ぼっけえええ日和じゃな柿の秋

大阪市 古今堂 蕉子

一筋縄でいかぬ男とする勝負

拗ね上手ばあちゃんにそれ通じない

こだわりを捨てたら脇が甘くなり

放任が自我を育てる事もある

木戸閉めて秋にさよならしています

お供えを置いて留守番よろしくね

大阪市 谷口 義

ぶつつけ本番で今日まで生きてきた

左手でメール打てるねんと姉が言う

ほんまに嵩の高い男やったわ

帳尻を合わせて乙になっている

化粧して平気な顔になりました

如月や母はお餅が好きだった

大阪市 津村 志華子

ほんわかと心をいやす冬牡丹

関白だった遺影につこりいとおしい

六帖間遠慮気兼ねのない居場所

老人に留守番と言う役どころ

文明が進んで礼儀消えてゆく

黙々と何を論ずや辻地蔵

大阪市 高杉 力

流されているのに泳ぐふりをして
寄せ鍋が好きです平和主義者です
缶ビール握り試食の海老せんべい
ストライキ中の線路でつくし採る
乗り換えの駅は地底の奥深く
本当のワルは西成にはいない

岡山县 田中 恵

得手勝手聞える耳が憎めない
一本の筋書がある夫の背
四面楚歌ちりめん皺が攻めてくる
一寸だけ真似をしてみる料理本
ストレスを時々埋めに行く花野
星影のワルツ踊っている枯葉

宇部市 平田 実男

生き様がだんだん顔に出る怖さ
イヤリング心の揺れが隠せない
米寿です卒寿白寿は射程距離
妻も娘も亥年めでたい年が明け
柳歴ももう直ぐ後期高齢者
心まで変える仮面が恐ろしい

枚方市 丹後屋 肇

投降ピラ空を睨んだ少年期
B29のゴグルを見た辛島
プラットホーム見た大阪の焼野原

ラジオから現人神の声を聞く
闇市の濁酒春を嗅いでいた
象徴をこなして平成を閉じる

和歌山市 古久保 和子

半世紀前ならレモン抱いていた
半分っこしたのは夢の中だった
ホットレモン三時の椅子はやわらかい
少々の誤算は許容範囲です
まごころは数字にすると寒くなる
うしろ手に閉めて封印する昨日

岸和田市 雪本 珠子

包み込むような笑顔に癒される
ダイヤ婚迎えられたの夢のよう
優しさが滲みでている人と居る
八十路坂頑張らなくていい時も
ドクターも頑張らなくてよいと言う
ほんやりもたまには良いと猫が言う

富田林市 片岡 智恵子

自己弁護重ねて落ちた花の首
少し笑いすぎて赤ん坊泣かしたり
オリンピック観たくて逃げぬ想いあり
ゴーン・シヨックあわあわと時間流れる
少しずつ理想を曲げて焦らない
老いた歩幅が冬の並木に負けている

可児市 板山 まみ子

二つ三つ為残しもある大掃除
食べて寝てストレス飛ばし
プレバトの添削にみる名師匠
やりくりの残り物こそ捨てられぬ
これ以上破壊はさせぬ温暖化

犬山市 金子 美千代

庭の菊満開ですよ仏様
洗濯日和と言われ洗濯物さがつ
若すぎる頂点先は長いのに
打撲だけでよかった神仏へ感謝
この次の戌も元気で迎えたい

犬山市 関本 かつ子

エンディングノートに先ずは仲良くね
まだ消せぬメールの友も一周忌
どの顔も覚えていないAKB
割引きをずっと待っている財布
幸せと思う息子と行くライブ

愛知県 早川 遯行

使わないけど持っている免許証
日替りのビール焼酎ブランドー
プレーキとアクセルぐらい知っている
富士山が見える車窓とない座席
なんでやねん只今トイレ掃除中

鈴鹿市 小河 柳女

小脳に一本の木を植えておく
胸に流れるふる里の人の声
ひとり居るするりつるりと裏の顔
父の支えがあつてぶれずにいたわたし
花は丸い線を保つて円満だ

富山市 島 ひかる

面影を残し八十路のクラス会
一杯のワイン華やぐ多種多弁
クラス会染み皺くすり盛り上がる
クラス会主人健在私だけ
白銀の下に力を溜めて春

京都市 清水 英旺

日本が変わるだろうか新元号
小難しい本では灯下親しめず
テニスらしいことして汗をかいている
入院したら他の病気が見つかった
掘炬燵の温みまとはずむ夜話

京都市 藤井 文代

掛け捨てで終りたいです介護保険
思考力試されていた曲り角
無防備に読む三国志長すぎた
ふさぎ込む友ただ聞くだけでもアドバイス
わたしのミス笑わんという昼の月

長岡京市 山田 葉子

欲目で見る子の実力はわからない
案の定横断歩道渡らない

何げなくチェックしている計報欄

沈黙を破ると役がころげこむ

じつくりと構え眠気に誘われる

八幡市 今井 万紗子

妻からの感謝状なら頂こう

母の遺影いつも私を見詰めてる

あなたと組む二人三脚乱れぎみ

健康志向今朝もサバ缶並んでる

お互いさま持ちつ持たれついくこの世

大阪市 磯 島 福貴子

現役並み喜寿の女子会盛り上がる

湯たんぼのぬくみに亡母の愛重ね

4Kテレビ写されるのは遠慮する

大河ドラマラスト見終えて安堵の夜

顔見える地産地消の道の駅

大阪市 岩 崎 玲 子

誰かれも生まれた時はみな天使

似たような悩みもつてる同世代

便利さに慣れた暮しに疲れ気味

新婚時一間暮しに夢あった

胸キュンをいつも探して前を向く

大阪市 内田 志津子

静寂が包む学舎外は雨

愚痴らぬと決意したのは父の葬

君らしく生きよと父の太い声

金持ちではないが貧乏でもない

お宝をみつめて弾む大掃除

大阪市 宇 都 満知子

光り出す殻を破った隙間から

しほりたて春をみつけに来た新酒

息を呑む夕焼けに心を洗う

抱かれぬ卵命いただく朝ごはん

追伸に優しい心添えてある

大阪市 江島谷 勝 弘

ついに後期高齢者に仲間入り

敬老パス忘れたときの情けなさ

無二の親友は貧乏神でした

旅に出るとソフトクリーム食べている

孫の名はルナレオホノにトワユウト

大阪市 榎 本 日の出

幸せを運んでくれる廻る寿司

へそくりは溜った頃に出る用意

知らない損することが増える世だ

むつかしくなる年ですな八十五

皮下脂肪一枚ぬぎに行くサウナ

大阪市 榎 本 舞 夢

平成が変る違つた夢を追う
健康も夢追うためにあるのかも
私しか解らぬことでもどかしい
新年を集う相談受けている
兎も角も年賀お節と忙しい

大阪市 大 川 桃 花

開かずの金庫お宝が出たことがない
押せど叩けど開かないドアは撫でてみる
玉の輿乗つてぜいたくしたかった
病院に通うため行く美容院
内輪の愚痴公衆の前で言う総理

大阪市 大 治 重 信

晩秋や子供の声が木を渡り
ふりやまぬ紅葉の先に水の音
反論をせむやビールが運ばれる
紅葉を本にはさみて旅終る
神たちが地球囲んで考える

大阪市 奥 村 五 月

孫抱けば鬼のコーチも仏様
私を守ると言つて認知症
氏神へ姉の御下がり七五三
御喋りの妻が三日も黙秘権
助けてと地球が叫ぶ温暖化

大阪市 小 野 雅 美

頼られてどんどん太くなる支柱
モナリザの瞳凶器になるらしい
明日へとジャンプのできる靴を買う
いつだって笑つて許すわけじゃない
修理せず安い新品買うばかり

大阪市 笠 嶋 恵 美

もやもやが山茶花咲いて晴れてゆく
夢枕亡母は悟りを説いて消え
大往生九十七の叔母の顔
娘にも老化のきざしドキリする
整理始める夫の死から丸五年

大阪市 金 川 宣 子

時々小銭浚えるレジの前
ライブ立ち娘の付き合いに疲れ過ぎ
まだ未練覗いてみたい前の家
外食でメニューの森に迷い込む
二・三年喪中はがきが續いてる

大阪市 川 端 一 歩

初将棋勝てる相手を探してる
これからは二人で一つする仕事
知らぬふりしたのに尻尾つかまった
四季ごとに訪ねてみたい京の寺
再挑戦幸田露伴の連環記

大阪市 近藤 正

新しい時代の扉開く兆し
万博は一時カジノがのさばる
日産のリストラゴーン首が飛ぶ
実習生ブラック企業困い込む
わがものと思えば癌も憎めない

大阪市 坂 裕之

手打ちして握手したのに未だ言うの
全快に向かつて後は歩くだけ
美味いよりインスタ映えで売れる菓子
駅前のデートスポット喜寿二人
休刊日何か寂しい朝ごはん

大阪市 高杉 千歩

人生いろいろ明日を考えず
七色の虹を見ました昭和です
私より歳下話通じない
パンパンパン手を叩く人いて老人ホーム
スマホ様さまともだち増えていく

大阪市 田中 廣子

ポランテア若手活躍嬉しいな
ハイテクに囲まれた暮し高く付く
出来るなら頭の中の大掃除
新聞のコラム楽しみ次をまつ
永遠に戦争のない世が欲しい

大阪市 田中 ゆみ子

除夜の鐘の頃故郷は雪景色
向かう所敵なし夫は認知症
泣いた笑った小さな辛を忘れない
そもその始まり小さな口答え
磨いても未だに石は石のまま

大阪市 寺井 弘子

八十の父の彩あるエピソード
年金の夢見た暮らし程遠く
珍客を満足させた自家栽培
飢えた日の昭和の記憶遠くなり
ワンクッションおけば素直に出ることば

大阪市 寺本 実

奥様と呼ばれ一間の家に住む
玉手箱開けてしまった顔並ぶ
出会ったらずぐに名前が言えました
もう少し注いでくださいまだ飲める
白粥でソフトに癒す二日酔

大阪市 原田 すみ子

きりきりと二の矢を頭では放つ
蕪のおいしさ分かってきたよ 母
天気予報母親のよなことを言う
日めくりをまとめてめくる十二月
おまじない健康のため二つ三つ

大阪市 平井美智子

唇にソースをつけている内緒
穏やかな形で溶ける角砂糖
夕暮れの靴は淋しい方に向く
弛むものみな弛ませて終い風呂
天気晴朗今度の恋は大丈夫

大阪市 平賀国和

餅つき会平成の暮れ締めくくる
餅つき会昭和を思う火の匂い
水府さんの決戦の句に息を呑む
青春を共に学んだ友が逝く
いいのかなカジノに賭ける大阪府

大阪市 藤田武人

被害者が加害者になる甘い罠
ヒーローを産んだ乱世のエピローグ
労りの言葉探して探します
人間がにんげんになる丸洗い
ワクワクの羽根を浮き浮き折り畳む

大阪市 藤原千恵子

恥もなく外聞もなく老い二人
今わたし五度目の節目変化球
窓見上げ逝った友への姿追う
病もち小さな花が愛おしい
心身とも一皮むけて退院す

大阪市 升成好

脱皮してもしても翔べない虫である
へその緒がつないだ最強の絆
海は母山は父です空は神
価値観が合って夫婦で漕ぐペダル
人間の海に溺れている虚飾

大阪市 吉内タカ子

お元気で一声うれし散歩道
杖を突き一年鍛え杖を抜く
挨拶は笑顔で交わす有り難う
賀状書き友の一筆浮かべつつ
弱音だと千両怒る赤い実が

大阪市 若本安代

落葉踏む音もさびしい旅ひとり
羅漢さま冬を覚悟の顔をして
友達の美談になぜか湧く嫉妬
中庸に生きる何とも難しい
フルーツの余韻に月と遠回り

堺市 奥時雄

同じこと繰り返し聞く悲しさよ
曖昧な笑み都合良い方にとる
遺産分けまだ曖昧にしておこう
曖昧に手打ちをさせた年の功
言われても対応しようない地震

堺市 柿花和夫

蚯蚓との誓い守って無農薬
開戦日を忘れたらしい暮れの街
老い二人北枕など気にもせず
通り雨に感謝してますひとつ傘
マンションに住んで恋しい鬼瓦

堺市 加島由一

添えてある一言ひかる年賀状
猪のように時間が走り出す
花や木が美しいから競馬場
ターゲット万博に決めウォーキング
一月はおめでたいから酒を飲む

堺市 源田八千代

何でやろ核廃絶をしない国
皇室も世代交替して安堵
百歳時代独居老人へこたれず
口唇に歌を絶やさぬ亡母でした
受験生を意識してねとやんわりと

堺市 齋藤 さくら

最後まで諦めないと言う自信
電話では話し足らぬとやって来た
シャンソンで胸のつかえが治ってる
五年生風邪に注意と言う電話
勘違い聞きそこないが増えている

堺市 坂上淳司

義母さんと声掛けそうな妻の背
妻と義妹歩き方まで瓜二つ
煮凝りでおからを煮ると亡母に会う
なまんだぶと唱えて子鮎焼いた亡母
車椅子と杖が行き交う散歩道

堺市 澤井敏治

富士山のおしゃれに誰も歯が立たぬ
七草粥隠し味にはレモンの香
目から鱗落ちてやる気の八十の初春
医者はしご出来る幸せ知る朝
湿布貼ることのない日日おかげさま

堺市 遠山唯教

一生を走りつづけて黄昏れる
こつこつと磁力を磨く人が好き
寄り道の赤提灯をわすれな
ぎりぎりで自分がばかになればいい
船出する孫の背中をただ折る

堺市 内藤憲彦

幸せをかみしめて書く年賀状
万博へきつと行きたい夫婦して
中学までは親の希望の星だった
年齢をすばり言い当てパビブペボ
春を待つ家族総出のたたみ替え

池田市 栗田久子

北からの便りは雪を抱いてくる
ひたすらに昭和平成越えて今
平成の最後安かれとの願い
大根炊き身の息災をひたすらに
冬空にぱつとまこうか金平糖

茨木市 島田誠一

厳格に守りゃ走れぬ道交法
パトカーの若手に違反論される
古いなど言ってる君ももう古手
人類の半分以上年下だ
責任上もう犬飼えぬ歳になり

貝塚市 石田ひろ子

楽しみを増やして愚痴を忘れてる
それなりのプロセスがある顔の皺
初めての入院雲とお友達
カタログの御節に添える母の味
新札の両替済まし孫を待つ

河内長野市 大島ともこ

学ぶことまだまだ母の小さな背
最期まで生きざま見せた深い皺
同じ場所いつもつまずく律儀者
後の祭り我が家は砂の城だった
神様がエールをくれた恋みくじ

河内長野市 梶原弘光

ポロロンと弾く据え置ききの駅ピアノ
迷ったらバット振り抜くだけのこと
煽り運転つくづく無駄なエネルギー
健康が過ぎて気になる預金残
安心には禁酒禁煙まだ3日

河内長野市 木見谷孝代

夕暮れの淋しさ小走りで帰る
朝寝坊リズム狂ったまま過ぎる
お歳暮の札を言うため味見する
ストーブの炎が好きなアナログ派
ウォーキングシューズ膝へのごほうびだ

河内長野市 黒岩靖博

母さんの笑顔一番美しい
夕映えに虹のかけ橋妻と見る
初孫と聞いてあれこれ手につかず
冬メニュー鍋オンリーの夕の膳
邪魔者ですか私は後期高齢者

河内長野市 辻村ヒロ

今更と言いながらまだ趣味多彩
古希の坂肩の荷下ろし遊びましょ
アレレレレ憧れの人変わりすぎ
好奇心まだまだ持って古希の道
だんだんと言葉が隅にかくれんば

河内長野市 藤塚克三

副作用だけがすぐ出るこの薬

早合点単細胞が増えている

北国は雪ゆき雪で酒まみれ

酔えばまだ時代遅れを歌い出す

ポツリポツリ雨垂れみたい愚痴る妻

河内長野市 村上直樹

免許返上さあ老朗の第一歩

十年日記万博目指しスタンバイ

熟爛二合ゆるい脳にも灯が点る

人生百年いずれごろごろ茶壽皇壽

平成を惜しむネオンの御堂筋

河内長野市 森田旅人

約束を破る気力を鍛えてる

約束を破つてからの独り立ち

やぶれかぶれでも進めば道開く

私の芯の何かがまだ見えぬ

予備群にはいつたらしい物忘れ

河内長野市 山岡富美子

電子化へ試されている脳回路

災いのない年であれ鐘響く

電飾の街は見知らぬ人ばかり

冬薔薇ははの形で咲いている

二尾なのに増えぬ我が家の金魚鉢

河内長野市 山室光弘

初恋と終のすみかで共白髪

袖の下黙ったままでものを言い

大掃除の文字があせらす年の暮れ

早よ覚悟決めろとエンマが忍び寄る

ダイエツト覚悟を破るバイキング

岸和田市 岩佐ダン吉

月冴えるただそれだけの村だった

あの時の苦い言葉が染みてくる

からつきし意気地ない鬼飼っている

タイプではないが実ある人と見た

凶星つかれ私も少し楽になる

岸和田市 宮野みつ江

喪の葉書六枚目なる十二月

大掃除しなくても来るお正月

一人用お節発注して安堵

知らぬ歌手ばかり紅白歌合戦

喜寿になる次は米寿を目指します

四條畷市 吉岡修

ラッキーに巡り合わせてここにいる

雲みたい恋の形も定まらぬ

落しどこほどほどのとこ探り合う

もうとつくにガラスだったとばれている

目はダイヤ菌は真珠です孫娘

吹田市 木下敏子

平凡な道を登って来た命
朝早く笑顔が揃う十四人
にこにこラジオ体操して元気
はつぱつと気をつけながら八十路坂
予定にはない足腰の弱り方

吹田市 須磨活恵

家電のおかげ八十路のひとり暮らし
僅かでもこの年金があればこそ
加速する老いに負けまい影法師
縋りたい大樹の陰が見つからず
も一人の私が私を叱咤する

吹田市 野下之男

イノシシの年だからなお注意せよ
西郷どんの何故か気になる順位です
特養の妻の写真に手を合わせ
すごいねえ個人の寄附で城が立つ
鏡見てこれが私の顔ですか

高槻市 片山かずお

リビングの一強妻に代わられる
妻を持ち身に付きました耐える術
午前三時トイレに起きて知る寒さ
晴れの日だみんなキレイに見える日だ
生きていてこそ嬉しい日楽しい日

高槻市 島田千鶴子

電飾にお疲れ気味の冬木立
十二月見えない家事がたんとある
讚美歌をふと口ずさむ十二月
じっくりと味わっている試食品
夢洲に夢の万博やってくる

高槻市 初代正彦

どことなく小走りになる十二月
時計横目に啜る立ち食いの素うどん
平成を静かに送るルミナリエ
いらっしやいポインセチアのようなママ
拗ねること覚えた孫をそつとみる

高槻市 杉本義昭

人間は忘れることで生きられる
真つ白なサザンカ元氣くれました
百歳を生きれば千の夢を見る
シャッター街閉ったままで年を越す
人間が好きで仲間と飲むお酒

高槻市 富田美義

レンジでチン男が生きる一人道
確めもせずまた恥を掻く老婆心
茶髪等も医師の前では縮こまり
泣き笑い重ね人みな灰になる
もうイイよ終わって欲しい長い経

高槻市 富田 保子

ぎりぎりが家族のきずな取り戻す
磨いたら鍋にヒントを教えられ
本物の一つ求めて京の街
温泉に入れば鼻歌別の顔
現実を告げる涙に見る勇氣

高槻市 原 洋志

はしご酒連れの財布が気にかかる
クラス会みんな上手に化けてくる
まだ生きるつもり葉をはさんどく
ドローンに乱れた暮らし覗かれる
もっともな話洗濯機に入れる

高槻市 松岡 篤

あの頃とは酒飲むたびに懐かしみ
病院で待ち合ううちに飲み仲間
お父さんそれこの前に聞きました
久しぶり金剛登山手強過ぎ
飲み会は夜より昼がありがたい

高槻市 安田 忠子

来し方をプラスマイナスゼロとする
何事もプラス思考で日々豊か
外壁を塗り変え我が家見違える
若く見える赤い口紅塗ってみる
リンゴ一つ半分こして食べた旅

豊中市 池田 純子

ふりむかぬいのししの如来る年は
平成ももう終わりかとお重出す
エントツが無いと心配する五歳
もみの木に婆も一緒に夢飾る
宅急便ひと足先に里帰り

豊中市 上出 修

地味ですが大役果たす足の裏
内緒事聞いてお口は軽くなる
銀婚式妻との距離はまだ微妙
オブジーボ生きる希望の火を点す
七五三絵馬に託した消防士

豊中市 松尾 美智代

夫は何も言わなければあきれてる
この人の横でよかったほっとする
LEDおかげで街は眠れない
大樹には感謝大樹の下が好き
今年一年よく頑張ったストレッツ

豊中市 水野 黒兎

冬木の芽あすの希望を秘めている
どの色もけなげにピオラ冬に咲く
アホやなあとは愛のある浪速弁
割引きは魔法のことば無駄を買う
友となら言葉少しでわかり合う

富田林市 関 よしみ

年末は楽しい干支のカレンダー
初暦開けば流れ込む幸よ
諸語を胡麻和えにする里の膳
ひとり酒数の子粒がほぐして
祝箸みどり兎の名も加わって

富田林市 中崎 深雪

寝たきりでも寝たきりなりの空がある
もうアカン筋肉さんがストライキ
不自由な手足にも湧く知恵工夫
せまられて夫は家事のエキスパート
嘆息が低く流れる待合室

富田林市 中村 恵

賞の無い道にも花は咲いている
不器用と知って何事にも真摯
着ぐるみを脱いで至福の深呼吸
妥協するたびにわたしが消えていく
延命は望まぬわたくしの都合

富田林市 山野 寿之

全開の窓から溢れ出る笑顔
冗談を混ぜた話の温い酒
七回忌なお悲しみを繰り返す
くにからの野菜包んだ新聞紙
バスツアー温いコーヒーおもてなし

寝屋川市 籠島 恵子

ひたすらを目指して冬の線路ゆく
ぎんなんが届くいつもの秋である
眺めたりすかしてみたりして予定
この辺でキリトリ線を入れようか
風追ってきたのに風が消えている

寝屋川市 伊達 郁夫

憧れた異国に遺影連れて行く
コップ酒今日一日を折り畳む
ジーンズの穴は芸術品である
振り向いてくれたら付いて行くつもり
引き出しの奥にもしもを忍ばせる

寝屋川市 富山 ルイ子

困るのは何時も携帯置き忘れ
困るのは人の名前が出て来ない
困るのはテレビばかり見ていたい
困るのは掃除するのは好きでない
困るのは暑さ寒さに弱くなる

寝屋川市 平松 かすみ

目標が出来た万博待ってます
公園は無人スキップ出来るかな
仏教の家にキリスト様が来る
帰ったら裏の硝子戸開いたまま
大宇宙行ったり来たりする不思議

寝屋川市 森 茜

気おわないわたしでいたい冬ざくら
体験談ころ灯してくれました
羽朽ちた蝶をただただ見つめ居り
せつかちに残照染めるターミナル
ひとときは少女に水色のワルツよ

羽曳野市 安芸田 泰 子

咲く春を信じて花の種をまく
なるほどと素直に言えぬ老いの意地
妥協とは弱者が折れることだろう
行間に未練心が見えている
信じるという幸せを抱いている

羽曳野市 宇都宮 ちづる

若者に素通りされる菊花展
この町のパン屋二軒が店たたむ
喪のハガキ享年みんな卒寿越え
目覚めたら今日の予定を確かめる
雪が舞い丹頂鶴に出会う旅

羽曳野市 徳 山 みつこ

頃合いを見てユーモアと甘酒と
反戦を介護の椅子が高らかに
柔らかに木の匙に盛る母の愛
恥じらいを見せお転婆もお年頃
反省の数だけ人になつていく

羽曳野市 中 川 ひろ介

越冬つばめ修羅の巷をひとつ飛び
電車遅延失意の自死に手を合わす
四島も拉致も無事では納まらず
全没も馬鹿にされても行く句会
菅田八幡古墳群ある天皇陵

羽曳野市 藤 原 大 子

頭の中総ざらいして作句する
腑に落ちた途端に腹の虫が鳴る
本気だな優しい顔で口説いてる
お日さまがほっこり希望くれる朝
足湯するどの顔も皆ほっこりと

羽曳野市 三 好 専 平

柿をもぐ人なき室戸遍路道
カラオケや酒と女としぐれ道
このままでゆけば減びるしかないヒト科
怒らない人が長生きするらしい
ヒトよりもモノが踊っているニホン

羽曳野市 吉 村 久仁雄

起承転結ゆるがぬ老父の語り口
燃え尽かないよう成就是させぬ愛
生き下手な亡父の頑固を継いだらし
ギャップだらけを楽しむことにして夫婦
風まかせゆらり生き下手生き上手

東大阪市 北村 賢子

じいちゃんにそっくり可愛い孫娘
相方が居るから泣ける笑い合う

一回り下の友居て出る元氣

じゃあまたねサヨナラじゃなくハイタッチ

萎える心奮い立たせて明日をよむ

東大阪市 佐々木 満作

器用貧乏何も残せぬまま傘寿

談判に一步も引けぬ膝と膝

まだ老いぬ百を指して活入れる

若手には負けぬとアクティブに生きる

平成の掉尾を飾る鐘が鳴る

枚方市 二宮 山久

玄関にメダカが泳ぐ秋日和

わがままも個性的だとほめておく

芸術の秋へ感性わいて来る

七転び八起きで今を生きている

七十五歳益益趣味に忙しい

枚方市 二宮 紫鳳

巢立ち行く子らへ確かな母の愛

乾杯に絆深まる趣味仲間

年金の暮しに弾みつける旅

竹林に紅葉映えてツーショット
平成の余韻アレコレ除夜の鐘

枚方市 藤村 亜成

地球を枕に空で洗濯する頭
当り前のことが恵まれてると思える日

きりのない落葉無心に掃く箒

若者らしい恥じらいはまだ残してる

過去咲かそう未来に蓄持てるよう

枚方市 山口 弘委智

喜怒哀楽そつと包んで句に仕上げ

妻機嫌朝のしあわせ刻んでる

人生に順路矢印さすがなし

互いに非兄弟喧嘩裁けない

舞台袖そろそろ出番深呼吸

藤井寺市 太田 扶美代

十二色全部使って生きてきた

淋しくて爪先立ちをやってみた

体重計たしかに秋がきたようだ

天高し人恋しさの中にいる

地獄絵も極楽の絵も見ておこう

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

完璧な絵を画く人といて疲れ

とりあえず眉の美形を褒めてあげ

もも色の花が咲くまで墨をする

段にされる石と仏になる石と
天国は全身麻酔で見たような

藤井寺市 鈴木 いさお

松原市 市川 雄太

オベ終る「お迎え」はまだ先らしい
試歩の朝一步一步に満ちるもの

沖繩の海が小波で抗議する
ラーメンがおいしい寒い寒さやつて来た
一人一人が輝く未来作りた

もう無理が利かぬ五体へ無理強いる

口には出さぬが僕には過ぎた妻

沖繩は軍事の島でありません
このままじゃ終わらないぞと初日の出

前向いて進むほか無し前を向く

朝十時常連がいる立ち飲み屋
ほろ酔いの僕が一番面白い
吸うとこがないのに高いタバコ税
気が向いて始めた掃除きりが
ない
大腸検査後期高齢二泊なり

藤井寺市 高田 美代子

松原市 森松 まつお

快速に乗る程急ぐ用でなし

平成最後鳴かず翔はずで暮れてゆく

元号が変る三代生きそうな

愛の字を後生大事に抱いている

ほっとするポインセチアとシクラメン

藤井寺市 吉田 喜代子

箕面市 大浦 初音

菊の香に囲まれ清し庭仕事

小春日和空の青さと道祖神

亥年生れ性格真逆で健在

露天風呂背中最後と洗い合う

歩き過ぎこむら返りに教えられ

藤井寺市 若松 雅枝

箕面市 酒井 紀華

不用品譲れば直ぐに惜しくなる

虫絶えて亡き子を偲ぶ星の夜

吾を措き神去りましし子を悼む

虫干しの心算晴着で三ヶ日

土産持ち三連休の孫が来た

人生は五七五のドラマなり
辞世の句ここまで生きた証しです
私はわたくしらしく兔小屋
祖父に似て口からもれるお念仏
ころころと笑って生きる新元号

箕面市 出口 セツ子

電気水当り前ではないと知る

次々の試練も神の愛だろう

骨太になれと与えている試練

クリスマス盛り上がらない老いの家

逝く日まで明日へ気力の湧く初日

箕面市 中山 春代

ゆっくりでいいよ本屋で待っている

極月の炬燵にもぐり周五郎

幸せな人が集まるお餅つき

凍て空に星のウインクあれば友

掌に昭和のこだまお正月

箕面市 広島 巴子

農業祭並び頂く地の恵み

関が原飛驒近江牛食べ比べ

認知症予防講座でグーチョキパー

湯豆腐でほっこり夫婦京の旅

ポインセチア玄関に置きサンタ待つ

八尾市 内海 幸生

四面楚歌力を貸して猪よ

難解句羨ましいけど作れない

パソコンに今夜のおかずなど聞くな

住所録朱線が引けぬ友の訃へ

底抜けの大声の友みな善人

八尾市 寺川 はじむ

人生の楽園と言う片田舎

満天へ雲が擲擲する星ツアー

出合い頭車じゃなくて美女と合う

あいまいと言うジャパンが生んだ処世術

強がらず弱音を吐けと言われても

八尾市 宮崎 シマ子

甘えての我がままならば許しましょう

五時起床雀のお喋りよく聞こえ

雑煮餅昨年は二つ今年はひとつ

漬ける蕪二つ切るのが大仕事

よく遊ぶ子供の声は黄色だな

八尾市 村上 ミツ子

新米がうまくてちよつと食べ過ぎだ

なつかしい役者に出会う時代劇

ドッコイシヨスワルタツネルオキルノモ

星占い気にはしないがいつもみる

寒暖差風邪を土産にやってくる

八尾市 山根 妙子

散り紅葉希望の芽吹く下支え

護摩木には家内安全大書する

万博に二度目の希望持ちすぎる

スタートは同じ方向だったのに

百勝の少年満面笑みになる

大阪府 米澤 俣子

精いっぱい生きて命は使いきる

軒下で第九を歌うつるし柿

ブティックの値札はどれも裏向きに

見本にはなれても手本にはなれぬ

ありがとう言う回数が増えて古い

神戸市 上田 和宏

大根おろし旬の秋刀魚が倍美味い

女郎蜘蛛無人の家の守り神

逝くときは覚悟などせずすつと行く

十二月らしくない日が続きます

ほればれとする答弁を聞きたいね

神戸市 奥澤 洋次郎

生き下手がせめてと思う死に上手

八十歳ながめるだけの恋をして

それぞれを思いやりつつ座が弾む

川柳も演歌の世界に似て来たる

一人者同士で夢を織る居場所

神戸市 富永 恭子

水面下ちよつと努力をしています

二つ三つ断る理由積んで待つ

日めくりにまるして私らしい今日

倒れても曲がっても菊いい香り

弱音吐くたびに体幹ゆらぎだす

神戸市 能勢 利子

昔馴染みに会うと元気になる老母

大正昭和平成生まれ揃う膳

新元号まで杖はつかぬと言う白寿

八歳と話すとき悩み消えてゆく

バアバには笑顔を見せる反抗期

神戸市 細川 花門

月明り頬をつたつて落ちました

振り向けば紅葉浄土に門一つ

爛二合までは薬と決めている

冬至粥吾が愛妻も古稀となり

念力を秘めて眠っている冬木

神戸市 山口 光久

穏やかな人にみんなが寄ってくる

腰痛を宥め賺して趣味の会

ヨタヨタと歩いています老夫婦

居るだけで言葉はいらぬ老夫婦

青筋を立てる程ではあるまいに

神戸市 山崎 武彦

帯キリリひとりで生きると決めた朝

五七五崩すとなぜか味が出る

子後の杖優しく試す向い風

母の味添えて大根葉が光る

窓際でまだ風向きを読む野心

明石市 糀谷和郎

もうあかん言うてるわりにごく達者

古希はガキ喜寿もガキだと言う卒業

休日は欠伸しながらネット買い

秋夜長 主の帰りを待つ葉

欲しかった時間今では持て余す

芦屋市 竹山千賀子

笑顔播くたびに友の輪広くなる

去り際に残した友の温い笑み

ほんのりと生きております恙なく

いい目覚め朝の空気を全部吸う

絵馬を読む神の頭痛は誤字脱字

尼崎市 永田紀恵

てにをはを変えた余生を模索中

平和ほけ警察がするネズミ捕り

全没にだんだん慣れていく怖さ

甲子園ネコより弱いトラが住む

背に湿布貼り合うだけの夫婦です

尼崎市 藤井宏造

大笑いするとおなががすいてくる

どう見てもとぼけた顔の雪だるま

喫煙所に押し込められた愛煙家

近頃はくれなくなつた貯金箱

こう見えてわたし立派な一人者

尼崎市 藤田雪菜

台風に耐えた樹樹らの息づかい

紅葉とコントラストの冬桜

イチョウ並木復興の灯が彩られ

怪しげな言葉が胸に突き刺さる

素人の不安へ主治医耳を貸す

尼崎市 山田耕治

フライパン返し出来るようになった

枝のついた柿をいたたく仏の日

酒飲めば天鈿女命なり

人生の切符検札くる時分

両の手を突き玄関に猫がいる

川西市 山口不動

ご近所に普通のように偉い人

まめそうな御主人がいる庭の花

ゴミ出し日間違えたのは私んち

平成は災害あれど平和な世

古き師の計に手を合わす遠く居て

篠山市 北澤稠民

東京へ行く黒豆を撰る夜業

平凡な朝の扉が開く幸

良し悪し含め涙腺ゆるくなる

時々自画自賛して弾みつけ

老いを知り老いを愉しみ旬に生きる

篠山市 酒井健二

漫然と生きて舞台は様変り
AIが頭一つを抜け出した
深読みでいつも解説ありがとう
退職金酒はきれいに飲むつもり
百までも生きると決めた上海で

篠山市 酒井真由

満更でもない私のルーツ
入院百景わたくしもそのひとり
ときめきが消えてしまった玉手箱
ことさらに惜しからざりしいのちかな
城のある街で遠近眼鏡買う

三田市 足立つな子

手伝ってほしい怠慢ふえてきた
目にみえぬストレスに勝つ頑張り屋
駅前は車社会で様変わり
子や孫と近場ですごし顔揃う
喧騒のがれ錦の風にあう

三田市 上田ひとみ

お話の続きのんびり待つ窓辺
年上であるということ深いこと
決めつけていましたあなた強いって
素直に手を握るほら温かい
先を読むなんてできないしたくない

三田市 尾崎一子

脳ドック歳相応のおまけつき
ボタンのかけ違い亡母の笑みふと
孫の就活磨いた靴が光る朝
孫との暮らしほのほのとして春日
平凡な幸平成の大そうじ

三田市 北野哲男

古里は丹波篠山名が売れた
伝来の田畑暮しのリズム生む
人生余白クルーズで埋める
穏やかな心言葉も柔らかい
獣医から死んだ犬にも年賀状

三田市 久保田千代

振り返り何をそんなに走ったか
天敵がいつも私の側にいる
運命線替える言葉を重く聴く
清濁を吞んで変わらぬ海の色
結着をつけたい話霧の中

三田市 多田雅尚

ふるさとも返礼品でよく変える
クリスマスLEDの独壇場
何時迄も四番欲しがるジャイアンツ
被災者に寄り添う気持ち無い政治
ニュース見て五七五で調理する

三田市 谷口修平

本当の善意はいつもさりげない
もう握り返してくれぬ手を握る
指紋減り茶碗と箸が滑り出す
外国の力頼っている介護
封を切るドキドキ感の無いメール

三田市 野口真桜子

死神に駄駄こね義母は今日も生き
あれからずっと折れそな枝にしがみつ
浴びた言葉いずれしつかり倍返す
掌に誰ももらない独りの身
乾杯のビールが温くなる式辞

三田市 堀正和

大空へV字を描き渡る鳥
喜寿なのに妻のアンテナ錆びてない
呆け防止たまに電車へ乗っている
インテリの顔で覗くは古本屋
来年も頑張るつもり年会費

三田市 村田博

四季のある国に生まれて美味しい酒
脳天気アバウトに生きまだ達者
元氣印装っている素浪人
たとある記念硬貨が使えない
斜に構え自慢話を聞いている

高砂市 松尾柳右子

寒風に矜立て直し闊歩する
お役目を果し不動の冬木立
雲流れ元氣澁刺スキー帽
暖房を頼る八十路の健康法
重ね着に悲鳴をあげる肩のこり

宝塚市 丸山孔一

蹴ってみて動かぬ石と納得す
愛犬も俺も後期高齢者
AIは一体何が出来らんや
妻の留守意外とやれる自分褒め
行列をしてまで買う気ありません

西宮市 秋元てる

美しく老いよと無理を言うでない
早起きが美德と言われた頃恋し
待っていたとばかりに大きく咲く笑顔
わだかまり解けた握手も熱い掌よ
そうとそうと寝かして置いた句の育ち

西宮市 緒方美津子

ポケットに不思議いっぱいボク五歳
つい走る釣瓶落しの夕まぐれ
人間を甘くみている街鳥
マドンナもよいしょこらしよのクラス会
夫の好きな棒鱈を煮ています

西宮市 亀岡哲子

昭和一桁百歳目指すホイサツサ
退屈を知らぬ友あり掃除好き
車椅子で万博巡りしてやろう
ご近所もまたひっそりと逝きはった
悲しみもそれぞれ喪中はがき着く

西宮市 西口いわえ

鏡よ鏡化けられたのはその昔
噂とは裏腹温いひとだった
デパートで買うもののない哀である
忘年会いつもの芸で笑わされ
熱爛よ友よ好き日がありがとう

西宮市 福島弘子

亡母の手袋もう八度目の冬になる
日当りがよくても病室なじめない
ふるさとへ陽炎なじむ長い道
角曲る孫のバイバイ去り難い
冬はいいマスクに帽子すっぴんで

西宮市 福田正彦

平和だなあゆつたり歩く人笑顔
夫と車ハイブリッドに変えたいな
モナリザの微笑み胸に突き刺さる
恋心すれちがうたび頬を染む
生きがいに川柳道が参加する

西脇市 七反田順子

ふくろうの巣箱置いてるリンゴ園
ロボットにすべておまかせしますとさ
青空に元氣いっばい息を吐く
ふんばった昭和平成さようなら
奥の院色とりどりに合祀祭

南あわじ市 萩原狸月

ふるさとと母美化されて詩になり
一年の計健康の保持に尽き
死に票の意見は汲まぬ永田町
五輪から万博命持つやろか
万博がゼネコン救う五輪ロス

奈良市 阿部紀子

父の代皆次々と永眠を
私たち世代ちらほら昇天を
一目会いお詫びしたい人もいて
国々のトップ会談我が身だけ
アメリカの第一主義が世界へと

奈良市 宇賀史郎

AI化黙っていいかヒト科
少子化に多土済済の中高生
追い込んだ外来魚網破れそう
過労死の言葉知らずにした徹夜
何感知動き始めた風見鶏

奈良市 高橋 敬子

寒くても冬らしい日はほっとなり
柳友は減り背は少しずつ丸くなる
新任の正論棚に置いたまま
終り良しの朝ドラ時計がわりつけ
通信障害デジタル網のあやうさよ

奈良市 辻内 げんえい

衣替え断捨離するによい機会
家のこと妻に任せた重いツケ
子に問えば何でもネット見よと言う
損得が無くて友情ながつづき
子を叱り孫を褒めれば嫁笑顔

奈良市 山本 昌代

美を競う秋の夕日と舞う落葉
久しぶりにカレーを炊いて孫を待つ
玄関がとでも窮屈孫来た日
血圧にバナナとコーヒいいそうだ
冬支度朝昼夕に落葉掃く

奈良市 米田 恭昌

改憲論軍靴の響き近くなる
軍帽の遺影は過去を語らない
昨日今日明日へ紡ぐ一行詩
夢紡ぐ色とりどりの園児の絵
IT時代ますます暮しくい老い

生駒市 飛永 ふりこ

亥の年へ猛進します力瘤
葉牡丹の笑みに私が畏まる
黒田節父の凜凜しい立ち姿
いかせん脳の縮みに向い合う
生かされて悲喜こもごもが栄養素

香芝市 大内 朝子

万博地に決まったけれど生きてるか
あかぎれがぱっくり爆ぜて偲ぶ母
皺くちやの笑顔いろいろありました
幸不幸心ひとつの思いよう
もう一度咲かせてみたい恋の華

香芝市 山下 純子

むこ殿の破れジーンズ目に障る
ヘソクリを貯めてるらしい妻強気
旅友と地球儀まわし夢語る
湯たんぽを二つ並べるこの平和
記憶から消えかけた人夢で会い

橿原市 居谷 真理子

丹田に月を潜めている男
憂鬱を引き裂いたのは百舌の声
コンビニを不夜城として町老いる
本包むための大切な風呂敷
やわらかく向田邦子閉じて寝る

桜井市 安土 理恵

いっばしの酒のみ顔で座に入る
ほっといて自己責任でのもんです
試しのみせずには居れぬ「黒さそり」
酒がくすぐる固まりかけた死生観
さしつさされつ酒はやっぱりこれがいい

奈良県 安福 和夫

俯いて微笑むタリヤ亡母の顔
ブライバシー凌霄花が手助けを
球場の蔦もダメ虎嘆いてる
一行詩どこで咲いても許される
川柳にシーズンオフはありません

奈良県 谷川 憲

持病との長い付き合い友のよう
町老いて介護の車あちこちへ
赤ちゃんの泣き声町に活気呼ぶ
お日様と土の声聞き種を蒔く
少年は海の向こうに夢を見る

奈良県 中原 比呂志

おー寒む小寒む年金振り込みまーだかな
突っ込んだ首が抜けない三次会
億の金当てたい列に居る小銭
スキヤンダル覆い被せて積もる雪
安かろう悪かろうでも満つ心

奈良県 長谷川 崇明

過ちもマアマアマアの金バツチ
安全の神話破ったその手抜き
配るもの笑顔ひとつと言う軽さ
野仏にあえば合せる手の不思議
五七五B軽い日重たい日

奈良県 渡辺 富子

渡り鳥の本気厳しい冬間近
賞罰なし馬鹿正直に生きて古希
損得など度外視母の愛一途
苦勞話美談に変えていく時間
泡立つもの沈めて雨を聞くゆとり

和歌山市 磯部 義雄

平成は大波小波我が家にも
今年から孫から貰うお年玉
譲られた若い娘の席温かい
新元号予想当たるか家族会
ネクタイを外せば父は人に成る

和歌山市 上田 紀子

本当の顔を忘れた年の暮れ
何もかも腹に収めて胃腸薬
お荷物にならないように万歩計
北風と聞き捨てならぬ噂聞く
性善説の奥で眠っている野心

和歌山市 喜田准一

大吉でどこから見てもいい女
男ですここで引けない訳があり
爽やかに話し合ってる茶の旨さ
人口が減って人材消えて行く
言い訳はあとの祭りと知りつつも

和歌山市 坂部紀久子

カレンダー残り一枚恙無く
インスタントでも一流の香る部屋
昔の私知ってる人と仲良しで
皺のもとだから不服は止めました
睡眠剤百人一首暗唱す

和歌山市 武本碧

二世帯の笑顔でスूपあったかい
アルバムにおいて話詰めておく
同郷と知って方言しゃしゃり出る
くちばしの黄色いままで主張する
洗い晒い話し心は青い空

和歌山市 土屋起世子

太陽を浴びて布団が軽くなる
お茶菓子で持て成し愚痴を聞いている
鍋奉行なくて寂しいひとり鍋
BSのシネマで夢をもう一度
親友の訃報を聞いて不眠症

和歌山市 福井菜摘

こぼれ種土は静かに抱きしめる
温かい返事をくれる花の種
幸せと思えば風も凧いでくる
八十路にも化粧忘れぬ心意気
もうとまだ使いこなして老い知らず

和歌山市 堀富美子

気負わずに歩く傘寿の気楽さよ
額面通りとって火傷してしまう
新築の孫から届く招待状
帳尻を合わせたように師走来る
敬老会私の位置を確かめる

和歌山市 松原寿子

生い立ちの章それぞれの鍵がある
木の葉舟なりの芽生えに賭けた夢
君にもらった自由生かして翔んでいる
杉木立斜に射す陽が経に溶け
献杯のひとつ口胸に沁みてくる

岩出市 藤原ほのか

何時までも愛してくれると想いたい
縮むこと決めているから慌てない
縮んでも伸びたい気持ち持っている
十二月エイエイオーと越えている
来る年を想い今から身構える

海南市 小谷小雪

健康のため持参するお弁当

はったい粉食べ平成の持久力

一瞬のどきり手摺りがありがたい

命日は和顔を作り菊の花

塾通いの手伝いをして実らせる

海南市 堂上泰女

立派過ぎる豪奢な家に婆一人

日本人のニートどうにかならないか

純白のシクラメンから初春の風

第九を聞く来年のエネルギー

ピンコロリお風呂で逝った無二の友

紀の川市 楠原富香

新年号に昭和生まれがぶら下がる

荒海を越えて和んでいる我が家

寂しさの芯に先祖の墓がある

逆らった父の列車に乗っている

火の過去を秘めて粛粛生きている

紀の川市 山東日出男

お日様に挨拶ヒマワリの律儀

祝日が増えて多忙になる大人

何故だろう洗車するたび雨が降る

留守番のネコとじゃれ合う掃除ロボ

病床に伏しても子規のアンピシヤス

橋本市 石田隆彦

気転きく愛妻そばに居て安堵

臍の緒でつないだ絆永遠に濃く

宛名書きされて葉書の旅仕度

生きている限りどたばたしていたい

作業衣の汗滲ませるボランティア

鳥取市 池澤大鯨

三世代同居していて極楽に

楽園にもときにトラブルアクセント

家内安全無病息災これでもいい

不老不死死ぬ自由さえないなんて

初優勝天国にいる気分です

鳥取市 奥田由美

兄が逝き実家の敷居外された

握る手に温もり残し兄が逝く

一口のアイス頬ばり逝った兄

祥月命日の母が呼んだか兄が逝く

タフガイの兄を負かした肝不全

鳥取市 加藤茶人

逢えるかも知れぬ思いの遠回り

万博と言う目標が出来た古希

不摂生な医者と思える咳込んで

あれすればこれを忘れた老いの坂

遠回し千支と小皺で探る年

鳥取市 岸 本 孝 子

元号に思いを馳せる年の暮れ
大器晩成待った息子も六十路過ぎ
老いたなあ年寄くさい咳をする
耐え忍ぶ女がやがていなくなる
年金が宝石店を遠くした

鳥取市 倉 益 一 瑤

好奇心だんだん耳がでかくなる
廃線の錆びたレールにある記憶
やさしさに心開いてからの風
心機一転大きな技を切りはなす
ふる里の山にいろはを教えられ

鳥取市 田 中 天 翔

人恋しい白い山茶花ひらく朝
真つ白の山茶花冬を連れて来る
廃屋の山茶花少し寂しそう
五七五行く手を阻む語彙の無さ
抜けておごらず没で腐らず五七五

鳥取市 棚 田 大

人の世も未来阻まれくらくらだ
なぜか俺阻む力を求められ
過疎の村猪道を阻みだす
自分色出すも皆んなに無視される
自分色また自分流肝に入れ

鳥取市 谷 口 回 春 子

もういいと言った途端に欲が出た
妻を覗くと見えてしまった角二本
行ったり来たり探し物かと妻が聞く
身に沁みる二時間ママの子守唄
女子会も今じゃ帰りは午前様

鳥取市 永 原 昌 鼓

平凡に暮らせと娘嫁に出す
平成も終り昭和はなお遠く
自分色見せて紅葉散って行く
ポランティア地球喜ぶゴミ拾い
久しぶりめつきり老けた顔に会う

鳥取市 中 村 金 祥

リコールへ信義を尽くし立直る
熱下がり健康寿命考える
ポイントを稼ぐためにと無駄づかい
執着へ大きい箱が手離せぬ
万博へ生きる目的先に伸び

鳥取市 夏 目 一 粹

銀杏の葉ひろって子らにおすそ分け
去る人を追って淋しさ紛らわす
泣いてたら隣の猫が寄ってきた
シャボン玉針一本で潰される
放つ日が来るよ愛しい孫娘

鳥取市 平尾 菜美

夢夢と掲げたままの手が怠い
負けて勝つそうよ私も吠えられた
立ち返る原点視野が広くなり
大助かりだ手本に出来る友がいて
辛抱のぎりぎり独楽はよく回る

鳥取市 福西 茶子

性別はとつくと捨てた飲み仲間
日傘さす柄ではないが杖に持つ
一足す一答えがいつも変るキミ
受信拒否したいが仕方解らない
不夜城を見たことのない場所に住む

鳥取市 前田 楓花

友達はグルメ好きだしお金持ち
なつかしい昭和 思い出の平成
包丁を研いで大根試し切り
病院も刑務所も番号で呼ぶ
好きにする私のことはほっといて

鳥取市 山下 凱柳

赤い糸がっちり繋ぎダイヤ婚
ここ一番勝負を賭ける自分色
何か良いことありそうな朝の虹
断捨離するには惜しいまだ未練
窓越しに冬日を浴びる午睡時

鳥取市 吉田 孔美子

グングン生きて母の百に似せよう
生き方を真似ようしまい方もきれい
一泊も三泊も旅カバン一緒
疾しさを密閉お役人の仕事
偉そうに一番後に顔を出す

鳥取市 吉田 弘子

さあ起床乾布摩擦を五六分
今日の無事ほとけへ合掌五六分
一日十笑難しい日もある
検診票全部をクリア異常なし
平凡な暮らしへ感謝日記書く

倉吉市 猪川 由美子

国会論戦茶番劇だわ虚しいね
人さんとの係わり合いは難儀する
情報過多に脳も心も疲弊する
遺さない不用は捨てて簡素化だ
被災修理家は直るが身は疲れ

倉吉市 山中 康子

ゆっくりと動くあたりは乱ばかり
負けて勝つ教えた亡姉に礼を言う
挑戦へ腹ごしらえと肝っ玉
買物に振りまわされてああしんど
冬晴れの空仰ぐたび希望わく

隠し場所そろそろ変えておかないと
いじめがいあるタフな奴 私です
米子市 後 藤 宏 之

本物の恋でないから風で飛ぶ
火遊びもしたいと思うまでが華
ねずみとり指導ではなくノルマだろ

米子市 後 藤 美恵子

鍋囲み猫舌いつも損をする
痛い目に遭って学んだ世の仕組み
もう止そう仏に愚痴を言うことは
内閣の全員野球エラー出る
時事吟がシャープに世相切つてみせ

米子市 竹 村 紀の治

無事暮れて報恩感謝祭つづく
ジョギングの憎いところにある喫茶
雑音も神経痛も生きる糧
怖いもの見たさ半分脳ドック
ほどほどに飲めと郷里のにごり酒

米子市 中 原 章 子

全力を尽くして明日の風を待つ
年の暮れ第九流れる風物詩
アスリート必ず感謝口にする
次世代へ自然残せと地球いう
らくをして地球痛める温暖化

日記には机上整理の文字並ぶ
酒が来た数の子が来た年用意
大切だ自分を捨てず壊さない
まだ誰も言ってくれない忘年会
寄り道はしたが真つ直ぐ駆けて来た

米子市 吉 田 陽 子

いいのだろうか悲しみが薄れだす
四方八方から切り込んで来る絆
飢えていたキラキラとして旬だった
労つていただけののはもつと後
正月は迎える春は掴まえる

鳥取県 石 谷 美恵子

戻り道今日はとってもいい疲れ
抱きしめておやりヤンチャな子ほど待つ
弱音吐かぬ亡父サンプルに生きて来た
ドライブフラワー昔の彩に戻りたい
新米の仏飯は先ず亡夫へ盛る

鳥取県 齊 尾 くにこ

特急に乗ってしまったらしい秋
もう来ないそんな気のあるまた今度
笑われていますか笑っていますか
おしゃべりがしあわせ色のメイクする
北風はやさしくされたときに泣く

米子市 成 田 雨 奇

鳥取県 竹 信 照 彦

諸機能は後退 歳だけ前進
十連休出来ても困る年金者
大嘗祭すれば勤労感謝の日
感謝する心空しくなる国会
泥はねのけて春迎えたい心

鳥取県 松 川 行 男

よし決めた心の波が凧いできた
通帳が寒いと思う少し着せ
宝くじ押んで見るか思いいきり
葉牡丹を眺めて帰る十二月
御祝いを誰にも負けず餅を食う

鳥取県 山 下 節 子

自分色出せないままに幕が下り
土塀だけ残るぶげんしゃ過疎の村
この意見恥を承知で言ってみる
銘柄は色々あるが米は米
戦時中一升瓶で米搗いた

松江市 石 橋 芳 山

かたくなに今を守って醤油さし
突然に海峡越しにハグをする
音水ついて真っ白な妄想
ヘモグロビンの代りにもらうマヨネーズ
狂えそような気がするマイク持っている

松江市 藤 井 寿 代

ハイボール一気飲みいろいろありまして
カウンターの刺さったままのキミの腕
枝豆は遠い日の仲良しこよし
錯覚も絶好調の午前二時
おいで下さい昨日と同じ丸い椅子

松江市 松 本 知 恵 子

復活の眼真つ直ぐ向いている
八百万の神が帰って冬の空
ガラガラポン時には当てる一等賞
父植えた柚子の柚子湯で疲れとぶ
救う神ありラッキーな秋になる

出雲市 伊 藤 玲 峰

神様の米寿の論しもらい来る
欲一つ捨てて軽やか一歩ずつ
根の力食べて木立も春を待つ
老いの楽しみ曾孫の唄に遊ばれる
焼魚の骨取る嫁に生かされて

雲南市 菅 田 かつ 子

今朝もまたとことこつがいで来る小鳥
陽のあたる部屋で一人のレモンティー
めずらしく顔を見せれば理由があり
暖かい便座でふっと一句でき
最愛の人の看護で今日も過ぎ

雲南市 松本 昌

確実に地球は丸い春を待つ
酒飲めぬ体質誰のせいだろう
宅配で送る幸せ噛み締める
老人性涙腺炎と披露宴
満点の星がきれいな車中泊

高根県 伊藤 寿美

十七回忌亡夫あなたの顔は古稀のまま
仏間から留守居の亡夫の声がする
累代もわたし限りか俱会一処
わたくしもムンクのように叫びたい
スーパードラマ赤鉢巻の男前

岡山県 高岡 茂子

空欄のないスケジュール表おいかける
セールズ電話来客中と言って切る
和服ひろげ女にひたる帯合せ
割烹着の母思いだす柿膾
行き先をさがす野菜が待機中

岡山市 永見 心咲

反りなんて合わぬが親子よく似てる
半眼に映るあなたは人情家
この先を問えば流れも迅くなる
眸には温いスーブと漫談と
遺句あまた悲しいばかり今はまだ

岡山市 前田 恵美子

弁当が要らぬ気楽さ朝寝坊
朝九時半デイサービスのパレードだ
ドライアイこのまま目から乾涸びる
ビル街も露地の奥には子等の声
「おせち買う」娘の声にそっぽ向く

笠岡市 藤井 智史

限らない平和に続く青い空
スタイルフリーを通しての孤独
快速の止まる田舎の駅に住む
コメントが無いと寂しくなるブログ
ポンコツもオンボロも皆仲間です

岡山県 山懸 のぶ子

軍手老い隣の庭の花を抜く
内緒事友と相談して躍る
退院の兄は卒寿の気炎吐く
内も外も菊とりどりに咲き誇る
世界中に君が代響く女子ファイギュア

広島市 岸本 清

気は心ふるさと納税被災地へ
卒婚と言えば聞こえのいい離婚
昼寝した妻との時差を持って余す
本日は歯科に始まり内科外科
神木を抱いて命を温める

竹原市 石原淑子

砂浜が消える怖さよ温暖化
宇宙葬第一号はとびたつた
凧とハグして握手して別れ
にきびポツポツ十五の悩みつづく
小春日に思わず懺悔してしまふ

竹原市 岩本笑子

一本の線でけじめをつけている
背負い切れないものがあり十二月
走れない足をしみじみなでてやる
張り切つて賀状百枚ほど書いた
葉袋に私の名前しつかりと

三原市 鴨田昭紀

だだっ広い家で独りのかくれんぼ
生かされて日々に更新する命
太平洋を知らずに暮らす金魚鉢
写経してこころ鎮める硯箱
後悔をせぬよう立ち位置を決める

岩国市 上村夢香

スマホより国語辞典の海が好き
過疎の村巡回バスにただ一人
待つというこのひとときが愛おしい
夢の中あなたの色に溶けていく
わたくしのルーツを巡る寺参り

下松市 有海静枝

節くれてネイルアートは似合わない
マニキュアが剥がれたままの折りの手
尖つては毒吐きさみしい背中になる
リセットの画面しばらく雨が降る
群れて啼く鴉おまえも淋しいか

防府市 坂本加代

人生を皺に刻んで生きてゆく
この辺で消えたい命とほとほと
偶像が消えてしんみり夜が明ける
親しさは臭いで分かる猫と居る
原発の一つや二つパネル群

東かがわ市 川崎ひかり

もう切るに切れない縁となつた犬
多色刷り夢が広がるカレンダー
人類の進化月へと住む未来
初体験甘くなれなれつるし柿
いろいろを胸に畳んで丸く住む

松山市 栗田忠士

補聴器を外しひとりを取り戻す
大根の白が私を無垢にする
深爪の憂いを抱いて冬に入る
七十余年待つて帰らぬ北の島
ストローと言えば麦わらだったのに

松山市 柳田 かおる

シンバルの喝に踏ん切りつけられる
生きてゐる証わたしに明日が来る
マンネリへちよっぴり距離をおいてみる
飾つてゐるうちは本物などでない
空き時間やっぱり柳誌見てしまふ

大洲市 中居 善信

生き甲斐の一つに指を折っている
足跡は五七五の中にある
ど演歌の生きざまだった泣き笑い
吊るし柿八十年も見た景色
赤も黄も使わず描いている余生

西予市 黒田 茂代

起こそうか切ろうか風で倒れた木
焦つても冷えた足では眠れない
陽を吸つた布団でほっこりと眠る
いつの間に済んでた町の秋祭り
平穩に済まぬ平成最終年

西予市 西田 美恵子

桜も君も見ていて飽きる事は無い
逢える日の雪がこんなに暖かい
特売の卵と誰も知ってない
私で良いならいつでも側に居てあげる
輝いた記憶は持たぬ昼の月

土佐清水市 辻内 次根

いい日だった湯船の中で眠くなる
幸せと思う少し酔っている
来る人にそろそろ点けておく灯り
不定期の実刑米を研いでいる
返信のないまま暮れる冬の空

高知県 小澤 幸泉

八十年神の心は読み切れず
それぞれに老いの一日暮れてゆく
安本法何故にNOとは言えぬのか
さあ行こう先はまだまだ遠すぎる
妻だけは私の味方思い込む

熊本市 杉野 羅天

晩秋の田圃今年も冬の顔
阿蘇涅槃今日は優しい顔で秋
生き様に男の価値が値踏みされ
不祝儀が続く平成の終幕
温泉を一人占めして冬近し

沖縄県 森山 文切

魚雷には鱗がなくていいのでしょいか
その道は工事中ですおぼっちゃま
酒を手を自由に叫ぶお父さん
警察に捕まっている枯れススキ
力つてお金ですかと訊く生徒

北九州市 小松紀子

今日明日小さな幸せ胸に抱く
のほほんとお一人さまのまわるすし

トイレにぎやか歴代の犬と猫

作句する時間たつぶり今宵不眠

友垣に恵まれボランティア十五年

唐津市 坂本蜂朗

痛む足腰に鞭打つ妻の愛

人よりも少し長生きする苦痛

父さんに内緒と言った母の愛

理不尽を許せず同期から遅れ

上機嫌へ一歩下がって身構える

唐津市 山口高明

千年の苔むす朱唇磨崖仏

襟立てて寒空見あぐ多喜二の忌

答弁へしどろもどろの不勉強

ペン胼胝の才女手抜きの家事育児

来年は僕の干支だと意気込まれ

札幌市 小沢淳

雑草と分類されてから強し

悩みある僕に進化は止まらない

あいまいな世論調査を盾にする

落ちこぼれだったと父の立志伝

亀までも生きたら国は困るだろ

札幌市 三浦強一

テレビ席ウィーンの新春のコンサート

生きてたかワハハと米寿クラス会

遺影用気に入りません逝きません

生涯現役などと迷惑見えてない

川柳塔届き至福の灯を点す

弘前市 浅田隆樹

雨の日の酒はあれこれ否定的

携帯が無ければドラマ始まらぬ

先週は論吉いらした財布です

イケメンを眺める女を眺めてる

わたくしもくじに当たたらぬ一庶民

弘前市 稲見則彦

舟唄を聴きながら飲む赤ワイン

吹雪く夜も窓に一輪バラの花

家計簿は赤字続きのままである

リモコンの電池が切れてお手上げで

地方紙の訛なつかし五七五

弘前市 今愁女

震災地客呼び戻し必至なり

眼鏡屋で並ぶメガネにふと薫風師

今日いち日何をしたかと我に問う

老いてなお遊び歩ける仕合わせを

修復をしたけどピサは斜塔なり

弘前市 高橋 洋子

貧しくも母子で笑った幼き日
人生の余白に今日も句を捻る
足して二で割れる幸せ共白髪
傘寿へとハードル下げて対峙する
天寿と言える年齢まで生きて悔いはなし

塩竈市 木田 比呂朗

コンビニの隠し口座はまだ元氣
年金に敬意を表すサブリです
国産の土鍋にこだわる湯豆腐
まだ若い何時もその手で攻められる
加齢臭気にせず登る八十路坂

男鹿市 伊藤 のぶよし

哀しさを後ろ姿でみせる齡
下り坂たより頼られ箸二せん
とんとご無沙汰ね汗かくほどのユメ
健康寿命なつとうの糸はなせない
追伸をよめず苦行を積まされる

横浜市 菊地 政勝

諦めの悪い男が背伸びする
不機嫌な帰宅やんわり包まれる
子の世話になるかホームか思案する
見るだけの客へ優しいオートドア
効能をくわしく言える常備薬

千葉市 海老池 洋

ひこばえと命の話したくなる
体によいとゴマ油アマニ油オリーブ油
病名をつければきりのない老軀
ホームの窓へ元氣を出せとでる朝日
病窓の夕日に重ねみるいのち

さいたま市 星野 育子

まだ懲りず原発輸出する日本
幸せのハードル低く身も軽い
誘われて七の引き算やつてみる
お笑いの芸人ばかりもう厭きた
ああ師走寝過ごしらしき終電車

上尾市 中村 伸子

熟成のチーズにモーツァルトとや
反対をしない人こそ要注意
句に滲む恋する人の行く末は
十七文字に導きくれし師に感謝
そう言えば「遺族の家」というしるし

朝霞市 前田 洋子

夜のしじま母と乗ってく救急車
九十五の母へ返せぬままの恩
七十路も母にはたよりない娘
ベッドから寒くないかとははが聞く
太陽を生んでは還すさとの海

東京都 川本真理子

赤い実がなつて厳しい冬がくる
まだ夏を引きずっている人もいて
せつかな歩き方亡父かと思つ
神官の衣装を誉めて老母の冬
かげろうのような老人前をいく

八王子市 川名洋子

虫の声聞かずいつしか冬になる
今日もある私の中の乱気流
夜勤明けの人と会うウォーキング
小春日にゲートボールの声微か
ポケベルがスマホの群れで鳴っている

(前月分) 篠山市 北澤稠民

平凡に朝の扉が開く幸
明日もまた水平線の日を見よう
電車内ガラ携見る目好奇心
終点は明日と言う日の始発駅
来る年は一念発起暴れ馬

(前月分) 西宮市 西口いわゑ

愛しくも片方だけのイヤリング
秋探し千年の恋読み直す
半端だと言われた頃は弾んでた
栗ごはん楽しい会話くれました
落葉ひらひらありがとうグッドバイ

(前月分) 尼崎市 市坪武臣

戦争を忘れぬために夏が来る
暑かろう案山子に贈る麦わら帽
誕生日転ばぬ先の杖に謝意
投票後出口調査で嘘を言う
大車輪で働く蟻の冬支度

(前月分) 枚方市 藤村亜成

当り前のこと不思議に思う好奇心
神の摂理に不思議なことは何もない
人間の身体も宇宙も謎だらけ
大切な話をする風が吹く
明日に向け撃てる弾を用意する

(前月分) 米子市 成田雨奇

無花果は買うもんじゃない貰うもの
物言うに気を付けるのは娘だけ
年取つてヒトが怖くはなくなつた
石がまだ道具のうちはやかつたが
大地から五センチばかり浮いている

(前月分) 倉吉市 牧野芳光

渡り鳥異国の声で話す
熊さんに遭い一本の棒になる
ワイン一本講釈が長すぎる
猫三匹人間よりも個性ある
お祈りをしながら種を播いている

(前月分) 神戸市 山口 美穂

水煙抄

(つづき)

(前月分) 八尾市 山川 寧

口だけは元気止まらぬ電話口
夢の亡犬わたし気遣う言葉くれ
言い難そうに医師は加齢を仄めかす
加齢には争えないと知ってるが
到来の酢橘秋刀魚に添える膳

(前月分) 米子市 後藤 美恵子

諫言は耳に痛いがありがたい
閑人の溜息ばかり聞く机
老いた足苦楽に染まる落ち葉踏む
狭庭に怠惰を暴く草紅葉
落葉に燃えつきたのか問うてみる

(前月分) 松原市 市川 雄太

秋風がひんやり貯金もひんやり
焼きおにぎりおいしく食べる秋の昼
軍隊を作りたいのかこの政府
沖繩の力本土以上に結束し
沖繩の魂ほしい大阪府

ひとこと募集

一行15字 25行まで 採否は編集部に一任の事

第59回 伍健まつり川柳大会

日時 2月9日(土) 10時

投句締切 午前11時30分

場所 愛媛県民文化会館・真珠の間
(松山市道後町2丁目5-1)

第一部 事前投句 締切りました

第二部 当日投句 (各題2句・未発表
作品に限る)

「リボン」 薬師神 ひろみ 選

「困る」 安田 翔光 選

「もっと」 真島 久美子 選

「青」 小島 蘭 幸 選

参加費 2000円 (事前投句者は除く)

主催 愛媛県川柳文化連盟

問合せ先 川柳まつやま吟社事務局

TEL 089-952-6774

秋晴れや水面鏡の七尾湾
湯を抱き七尾湾と一体になる
ぴちゃぴちゃぴちゃ無心に湯を打つもみじの手
テニス日和雲はアートの汗だ

(前月分) 京都市 櫻崎 篤子

平成も卒業をしたおぼあちゃん
すき間風母の背中を通り抜け
終活もせずお迎えを待っている
虫と呼ぶ一夏きりの命抱く

川柳塔の

川柳讃歌

(16)

上方芸能評論家 木津川 計

拜啓と敬具で終る固い方

七反田 順子

広辞苑を編集した新村出やアイヌ語研究の創始者・金田一京助らを育てた明治の言語学者・上田万年の許へ「筆は一本、箸は二本、衆寡敵せず」の箴言で知られる明治の評論家作家・斎藤緑雨から手紙が届いた。開いてみると、「拜啓 草々」とだけ書かれていた。万年はうなずいて、「わかった、金を貸してくれというんだ。」「拜啓」の対語は「敬具」だが、「草々」に「匆匆」「急ぎ」の意をこめ窮状を訴えたのだろう。察した万年が偉い。

ランチしてきますカッパ麵置いてます

福西 茶子

偉いのは万年だけではない。茶子さんもえらい。ご亭主にはカッパ麵を与え、ご本人は気の合った友人とランチに行くのである。「九十歳。何がめでたい」で大当りの佐藤愛子は、ご亭主が浮気をした挙句、どこかの女

の許へ走ったとき「無理もないと思いましたね」と振り返った。茶子さんもそんな目にあつたら「無理もない」と思うか、「わたしが悪かつた、許してえ」と泣いて謝るか、愛子さんは腰が据つていたけど、茶子さんはさて如何に。

顔はピカソ体はルノワール仕立て

大久保 眞澄

「三つの歌」の名司会・宮田輝は声がわけてもよかつた。ラジオからテレビの時代に移つて世人は裏切られた。なにしろ川柳子が「三つの歌 声と顔とは宮田さん」と歎いたほどだつたから。上方落語に現われる「人三化七」のおなごしもピカソの顔にルノワールの豊満だから天の配剤に容赦のないことを知る。確かに、瘦せた女性より豊満が魅力なのだ。だから教壇に立つていた頃、僕は女子学生に語り続けた。「女性はむくむく肥るべし」と。

医の進歩みんな老衰まで生きる

福田 好文

島津製作所の会社員でノーベル化学賞を受賞した田中耕一さんは「一滴の血で病名を判定する研究を続けている」と語つた。実現すれば人間は誤診から救われると僕は思った。山中伸弥さんがIPS細胞の作成に成功してノーベル医学賞を受賞したとき、僕はあらゆる病気から人類が解放される端緒が切り開か

れたと思つた。やがて人間は病気で死なず、好文さんが言うように「老衰」で絶える。長寿社会とは老衰死社会の謂だつたのである。

予選などない人の世というレース

水野 黒兔

失業者と浮浪者がふとしたことで出合い、約束して別れる。「五年後、もう一度会おう」と。それから五年、失業者は大会社の社長令嬢と結婚して副社長に、浮浪者はうだつの上らないままを恥じて「食堂のチェーン店を経営している」と偽る。が、副社長は偽りであることを見抜くも口にせず、彼の成功を讃える。再び五年後の再会を誓つて別れた二人だが…。松竹新喜劇の名作「人生双六」である。藤山寛美がレースに破れる男で泣かせた。

夕焼けのような最期が望みだが

小松 紀子

岩下志麻がかつて主演女優賞に輝いた映画「はなれ警女おりん」に見所があつた。盲目ながら美貌のおりんが、ある日出会つてから手引きしてくれる大男と川で水浴している。夕陽を背におりんが立ち上る。両の乳房が映つた夕映えにおりんの顔が輝く。大男が叫ぶ。「おまん、夕焼けに染まって仏さまのようじゃ」。憚りながら紀子さんの終末である。茜差す終の病室で仏様の微笑を浮べて…。

橘高薰風句抄

〔橘高薰風川柳句集〕平成十三年発刊

チューリップ胡蝶の奈落かも知れず

阿難尊者に遠し恩師の忌

妹に紙の兜がよく似合う

板尾岳人兄へ

頂上に汗ひく顔の謝霊運

似てるなど河童は蟪蛄に見入る

仏手柑ひとつ新年の文机に

露草よ額田王が袖を振る

子の名ほど迷わず孫の名を決める

赤鬼も煩惱を持つ臍を持ち

任侠の男のロマン喉仏

ポツペンはブーツの女にも似合う

逝く春へ白だけ残る五色豆

修業とや砥の前で小半日

夢醒めて紙の音する千羽鶴

病み上がりにも心もとなき鰯の目

曼荼羅に原子のごとく仏たち

七月よ煙草の輪にも力あり

裏切りに思い当たるは茄子のかるさ

氷柱花電話ボックスには女

きりぎりすちよんと男は立ち上る

臍放り出して社長隙がなし

母一人子一人秋の灯を分ち

志衰えて書く立志伝

月下美人王昭君が逝きまする

聖書一冊を草分けの力とし

父の苦悩に裸の煙草が散らばっている

背徳や三面鏡の無数の顔

美しい丘日本にキリストは出ぬ

敗戦忌バスケットから犬の顔

新婚のスプーンに指紋つきはじめ

一芸に秀でし顔へ初明り

初日記夢を針小棒大に

自選集

小島蘭幸

母は笑つて痛を鎮めているようだ
母が笑っている妹が笑っている
チャレンジのひとつにスマホ買いました
まっすぐな眼だまっすぐな愛だ
展望台にひとり十年先を読む

新家完司

「パスタ」カタカナ「うどん」ひらがな「蕎麦」漢字
一年に一夜限りの蟹三昧
ふたりだけなのに茶碗が多すぎる
生き抜いただけでラッキーないちにち
ひろびろと荒野のままであれ男

高瀬霜石

春夏秋冬 冬がいちばん身近です
主人公も想定外の4コマ目
真面目ですときどき鬼と呼ばれます
メニユー見るとれにしようかなあでもり
断捨離・ダンシヤリお経のように唱えてる

竹治 ちかし

通信障害 弱さを見せた大都会
老いたかも知れぬ寝るのが好きになる
女房のリズムで自転する我が家
満州という名の帰れない故郷
おんぼらが解り染まってきた出雲

津守柳伸

色づいたもみじが競うお滝みち
清濁を飲む青空にかげりなく
購買力そそるチラシとにらめっこ
下積に耐え木枯しと奮起する
一病に一喜一憂する師走

都倉求芽

散る葉にも一理があつて日を選ぶ
穏やかに今日も暮れます午後の五時
目標を少しずらして知るまこと
新元号に誘われいのちまたのはす
新年へあるようでないプラン

西出楓楽

傘寿には傘寿のいくさ薄化粧
ブレバトを見て溜飲を下げている
言い訳が下手善人に違いない
チコちゃんに叱られそうで口つくむ
輪の中で独りを強く意識する

仁部 四郎

長男に一番風呂を明け渡し
明け渡す社長の椅子や噫派閥
噫派閥功利主義にも功德あり
功德とは旗持って立つ通学路
通学路子らと節度を学び合う

前 たもつ

朝のあいさつ小学生とする笑顔
聴診器離さぬ医者と二十年
お裾分けふるさと恋し吊し柿
寝返りが今日の疲れをとってくれ
土の香する句に出会いほつとする

政 岡 日枝子

企んだ事をうっかり忘れてた
頭から何でも抜けてゆく齡に
企みを持たなくなると弱る足
途中から余白になっている予定
予定変更そんな日が続きます

三 宅 保 州

天気予報各チャンネルで確かめる
花文字の花は窮屈だと思ふ
時間どおりバスが来たので乗り遅れ
階段の下りで声を掛けないで
ハガキでも追伸書いてくる母よ

宮 西 弥 生

札束を追う真つ直ぐな道がある
寝転べば軒が早い母の宵
小波はひとり暮しの浅眠り
百態の風に演じる万葉の記
記憶力薄れ人間神になる

福 士 慕 情

ふる里の風に酔つてる津軽風
メルヘンと雪の怖さを知らぬ人
屋根雪に耐える老家の力痛
地吹雪を煽りにあおる雪女
冬木立春を待つてる息遣い

村 上 玄 也

元日も昨日の続きでしかない
喉つまり気にしながらも食べる餅
予期しないことが次々起きる世だ
また一つ病気をドック見つけ出し
開幕前だけは期待をさせる虎

森 山 盛 桜

力まだ出せずにアデイシヨナルタイム
一月の余力で乗り越える二月
苔むした墓の彼方の宇宙葬
本意ではございませんと餅のかび
哲学は知らないけれど雪が降る

春泥

落ちてゐるのに眩いてゐるような
余韻って凄いな いのち温める
精いっぱい分の限りは咲いたから
数々の恩かみしめてゐるうちに
春泥に溶けて大地に紛れこむ

八木千代

山本希久子

ポケットは大きめ両手あけておく
孫曾孫従え歩む年女
信じ切った笑顔に風の向き変わる
本気だったが寒さに負けたウオーキング
月光のしずくで洗う鬱ひとつ

板尾岳人

柩には胡蝶蘭を奉れ
人間め百年生きてどうする気
君見たまえ白寿になった槍・穂高
火葬場のけむり眺める歳となり
もう少し待って下さいほとけ様

川上大輪

猪突猛進右も左も見えていない
元号はどうでも良いよ平和なら
行間が深くて前に進めない
擦ってやれば少しは味が出る
映らなくなった鏡をまだ磨く

木本朱夏

自画像の耳染うすき年の暮れ
真夜中のとんとん風かちちははか
石蹴って蹴って我身の置きどころ
約束の春は春はと冬木立
遠ざかる昭和平成みかん剥く

斉藤 劼

芯はまだしつかりしてる枯れ芒
冬火花ほたぼた散っていく無常
藍染めの藍に心が洗われる
魂が錆びないように鉄磨く
寒立馬ただ黙々と悠悠と

森の集句



『傘の浜』

林 瑞 枝

人生はシヨ—だ花道きつとある
許し乞うかたちで座る繭の中
ふるさとに傘の花咲く絵が消えぬ
組板にいつか私の貌を彫る
白無垢の鏡に何を問いかける
雪の降る右脳宥めて茶房まで
ははと言う深い入江に身を寄せる
美しい寝釈迦の如きひとりの死
哲学の森から姉が出て来ない
杭が一本 岬で羽根を休めよう
月冴えててふてふと書く古書漁る
花びらの唇のナイフがよく切れる
わが乳房の何処かにいつもある港
ふところの聖書に春の雪が降る
わが死後の夕陽もきつと美しい

(一九九二年十月十日 発行)

温故知新

小出智子川柳集『路の臺』から

虫すだくこの身一つの置きどころ
中年や父に優しくなろうとす
蝸牛このときめきがわかるかい
青春のある日は父を悲しませ
さくらんぼ女は齢を忘れたし
寒月にわが身ばかりが貧しけり
草花咲けば山は女を許すかな
旅愁とや丹頂鶴の細い足
姑となる大きな傘を買いにゆく
長男の写真が少し多すぎる
お年玉無駄な言葉は添えぬもの
仏さんと相談をして決めている
扇千景のように光らないけれど
友達の眼が同性の目に変り
何を祈ったのかと聞く男
どうしようもない私が闇に走りだす
どうしても描けない母の笑い顔



西出楓楽選

広島市 松尾信彦

一石をいつも鞆に少数派
孫帰りNHKを取り戻す
待ち合いの名医あまたや右左
センスより清潔感が親近感
いつくしむ母の畑の規格外
指貫に感謝している巖糸

堺市 羽田野洋介

チャンネルをやたらに変えるひまつぶし
デザートよりもう一杯を追加する
駅前が一等地とは限らない
朝イチをすつきりさせる深呼吸
締切りが迫り慌てて指を折る
断捨離へちよつと待ったと手を休め

和歌山県 森下よりこ

忙しくしてれば気分前向きに
目も耳も不自由はない八十路
ご先祖に褒めて欲しくて畑仕事

耕してモグラの穴はみなつぶす
剪定柴燃やす焼芋の楽しみ
達者で長生きそれが私に出来ること

大阪府 小栢こずえ

枯葉舞う私の最後を見るような
生きる知恵知らん分からん忘れたわ
今になり迷いこんでる余地はない
身を庇い生きるだけでも大仕事
まだ咲きたい傘寿の古木水をやる
ブレイキが効かなくなった記憶力

寝屋川市 岡本勲

ほめられるコツ知っているのは三男坊
上司より成果を挙げて左遷され
話してもカーテンみたいに頼りない
円満はつかず離れずさからわず
耐えることだけを教えてくれた妻
長電話サンバを踊る鍋のフタ

鳥取市 田賀 八千代

幕引きが近く靴ひも締め直す

よく稼ぎよく使ったな無駄な金

阻まれても城があるから無駄できぬ

阻まれるたびに大きくなる根っこ

金持へ人も小鳥もよく集う

自分色さがし綿毛の一人旅

三田市 森 玲子

句を始め眠った辞書も目を覚ます

そろそろと動けるうちに身の整理

孫の声常備薬より元気でる

女子会もあれこれそれで盛り上がる

体力も落ちたが口はまだ元氣

体型も日に日に母に瓜二つ

倉吉市 若松 由紀子

天才も偉人もいない我が家系

老いてなお地図にない道ひた走る

何もせずごろごろしても腹がへる

自転車で土手颯爽と行く八十路

何も無い所で転ぶ古い自覚

好きですか聞くだけ野暮よ松葉蟹

米子市 生田 和之

世の中は百歳時代はく八十

夜は駄目遠出も駄目の八十路入り

四季問わずビールは飲まぬ僕の主義

八十の目も歯も自前やや惚ける

阿呆になるつもりで居れどままならず

丁寧に書けども癖字直らない

米子市 川本 美津子

自分色出してアピールしてる花

年なのか故障続きの洗濯機

デザートは日に3回の飲み薬

三面鏡は古希の私を見抜いてる

美人に映る鏡があれば買いに行く

今朝もまた深呼吸して動き出す

横浜市 巖田 かず枝

節分に病の鬼を退治する

老犬が毎晩吠えて寝ずの番

もういいの栄養よりも好きな物

夫 絹 私もめんと譲れない

酒好きに見えて大福好きな人

他人思いの西郷どんのような祖父

大阪市 柴本 ぼつは

常識を吐いて空気を重くする

不平不満言うてはならぬ達者なら

衣食住足りて悟りに遠くいる

オベ二回地獄天国行き来した

四十五歳ケロリとしてた癌告知
夫のセーターぴったりですと丸坊主

岡山市 大石 洋子

生きてゐる証とばかり大軒
寝付きよい男の見る夢楽しそう
手遊びにちよつどよいプチプチ錠剤
仲の良さあらわすように風邪もらう
食い意地で風邪を撃退するつもり

瀬戸内市 宮 宅 比佐恵

新しい年も私の色で咲く
探しものかかえて老いの初笑い
正月と盆には揃う顔と顔
流行には遠いが昭和くずせない
新年も私にできる笑顔布施

岡山市 藤 澤 照代

魂の鬼ねむらせて同居する
汚れてる軍手は汗の価値を知る
糸口を掴んだ朝のはずむ靴
散歩道あいさつだけの顔馴染み
思い出の糸たぐり書く年賀状

広島市 田 桑 恵 子

風呂故障たまの銭湯悪くない
スーパ―銭湯お喋り賑やかフロ友か
朝より雨ゆつくり読める柳誌など
湯豆腐のゆらりと揺れて酒すすむ
家事出来ぬ夫にしたのは私かも

竹原市 若 年 幸子

産声の響きへ過疎の活気付く
響きあう友いて今日も歩がはずむ
ハイテクへ古い文化の見直し
三世代外食メニュー和洋中
福の神連れてまああるい友が来る

竹原市 土 井 輝 恵

そだねーとどうして言えぬ老夫婦
盛り上がり過ぎて足出る忘年会
日の目見ず財布に混じる記念貨よ
七十五日風評だけは時効ない
ゴーンゴーン鐘の音ならず銭の音

竹原市 六 田 半 徳

穂は重く神に感謝の光る汗
雨音を聞いて予定のベース上げ
リハビリカニ歩きして元気です
酒の量減らして鍋の味うれし
雨上がり古里飾る虹が立つ

三次市 伊 藤 寿 子

ひと言を飲めば災い来ぬものを
大人にはこちらがなるしかないと知る
川柳という神さまにまた助けられ
文学の森青しとの師の言葉
カニ味噌を仲よく食べる嫁姑

松山市 郷田みや

忘れ物したかな昼の白い月

炭酸で割ってスッキリさせましょう

適当に混ぜて仕上げは黒コシヨー

方言で話すと笑う鬼瓦

ドライ納豆すこしオシヤレなパッケージ

今治市 渡邊伊津志

苦と楽と一緒に飲んでる薬

ドクダミの花の愛しさ鎌止まり

柵をさらりと捨ててから気楽

笑いから生きる美学を教えられ

一本の細かい線が生む個性

大洲市 花岡順子

年輪に歪なところもある大樹

余所行きは無い半幅の帯でいい

敗者復活悔しいけれど負けました

我がままで自分に甘いとこがある

ロボットに頼りそのうちバカになる

高知市 三谷松太郎

さ迷えるその子羊手にスマホ

閻魔さまスマホなくてもいいですか

いやな世だわしの言うことアナログか

サンタでも第九でもなし年暮れる

真夜中に浮かんだ一句朝消えた

佐賀県 真島久美子

自己暗示しながら入り込む鏡

見たことが無いと気付いた胡桃の木

また主役ですとねと雪が降り止まぬ

意思表示すると氷の椅子になる

その時はダイナミックに転びます

沖繩県 下地香代子

あきらめず母は子のため身体張る

心がけセンスみがきも怠らず

息弾む恋か病か歳なのか

産声と共に今日から家族だね

反抗期そよ風にさえ立ち向かう

黒石市 北山まみどり

雪しんしん反省文を書くように

ばたん雪まだずしりと胸の中

降り積もる雪の下には何がある

陽が照れば笑われそうなくし事

サクサクと雪を踏みしめまだ一途

弘前市 高森一吞

やはり来た津軽の雪に汗流す

二人きり炬燵でリング旅ばなし

天井が抜ける元気な孫と居る

舌だけが秘伝の味を知っている

トランプに千切れてしまう星条旗

千葉県 廣瀬良磨

乾燥が私の肌をいじめだす
しんしんとすべてを隠す雪が降る

冬だから冬眠しますお静かに

闇鍋にストレス全部放り込む

十二月冬將軍がまだこない

横浜市 川島良子

常温に戻すと喋りだす本音

ホッとするとキミの笑顔が宝物

追越し車線恋がグングン加速する

慣れた頃フツと疲れが沸点へ

叩かれた痛みが感謝へと変わる

舞鶴市 伊藤恒

口癖の何とかなるでなんとかし

幸せはあの世信じて逝ける人

苦勞など知らない顔の苦勞人

子や孫に聖母で接し裏見せぬ

お休みの電話に感謝今日終る

大阪市 樋口眞

隅にいる一人ぼっちに語りかけ

一合でほろ酔い弱くなったもの

肩と腕力仕事をして泣かせ

剪定などもう無理だよと悟らされ

閉会の挨拶中に混む出口

大阪市 松田聰

スマホばかりで遊んでいると墮落する
思いやり無いようである現代っ子

あれこれで会話成りたつ老夫婦

ママのため服着せられてるベツト

ひとひねりする句が出来ず月を見る

大阪市 森田遊子

人生の小春日和にいららしい

鬼ババの顔で包丁研いでいる

雨女ですが友達には秘密

爪がないから隠してるフリをする

一度だけ姫でいられたウエディング

大阪市 森廣子

久し振り八時間寝て元気です

晩秋の庭に一羽のモズが来る

まだ生きる手枷足枷ひきずって

買い込んだまま材料眠る冷蔵庫

咲き終えて百合はしっとり閉じて散る

泉大津市 助川和美

兄弟は遺産分けから仲違い

あんパンもカードで買いに来る時代

年毎に国が私をケチにする

生きているメールでたりるおめでとう

心ではとつくに外している指輪

貝塚市 吉道 あかね

冬籠り春の約束ばかりする
松の木も腹巻きをして冬に入る
張り替えた障子日溜り連れてくる
カレーにはソースをかける人という
年末年始主婦を忘れて船の旅

門真市 坂本星雨

今度また会おうと友の手の白さ
突然の訃報に悔いが絡みつく
雨男だったな通夜の背が濡れる
葬儀屋に別れの辛さなどはない
嵯峨豆腐大好きだった友の笑み

河内長野市 中島一彌

ガタが来るあの手この手でやって来る
世に逆らいゆったり老いの十二月
嫁ぐ娘の姿に父の目が光る
揉め事の欠片を背負って年を越す
覚悟決めキャナイヘルプと言う勇氣

堺市 古川光雄

雨の日は百貨店でウォーキング
良い酒は値段よりも飲む相手
カード多用財布に諭吉長居する
敗戦を嘆くな始めたのは日本
空襲で繋いだ母の手痛かった

堺市 大和峯二

同窓会いつものように孫自慢
死ぬような気がしないまま古希の坂
軍事費が福祉を食って民が泣く
モリカケの責任とらず税上げる
増税は福祉福祉と言いながら

吹田市 岩口のぞみ

歳聞かれ若者干支では答ええない
いのししが向こう見ずとは限らない
ポーナスだ今日だけ少し父威張る
財布見て万札くずしお年玉
平成の終わりを告げる除夜の鐘

豊中市 荒木郁子

万博に大阪人の寿命延び
家族旅行添乗員は孫娘
三食を完食主義の妻の腹
最上階日の出日の入り宝物
老犬もバリアフリーはお気に入り

豊中市 貝塚正子

春昼の散歩ゆらゆら影法師
人々が元氣頂く御神木
君と居て心穏やか春もよう
出不精がしぶしぶしてる医者通い
ポチ行こう小止みのうちにお散歩だ

豊中市 木藤 こみつ

食べて寝てまた食べて寝てお正月

正月はリセットをするためにある

肝炎にABCと型がある

ろうそくのろうより少し長い芯

カラフルな魚はいない日本海

豊中市 齋藤 奈津子

新聞に包む焼き芋香り立つ

寿命のび永久でない永久歯

塩味が効いてるはずの深海魚

すてきな人ただ見てるだけ老いの恋

よくしゃべる人で行けないバイキング

羽曳野市 磯本 洋一

古民家と茅葺き屋根は和の雅

オプジーボ万人救う頼もしさ

夫原病我が家はないか身を正す

十三夜脱穀を終え炉端酒

年金暮し携帯電話安くして

枚方市 谷 英也

閻魔さん片目つぶってお許しを

八十路過ぎ波立つ心何時までも

被災地の人みなに笑顔いつかえる

本年も笑顔の花で飾りたい

ジャンプしてピタリと着地水たまり

八尾市 前田 紀雄

コミュニティも生産性も無い主夫

ノーベル賞羽織はかまが良く似合う

聞く耳を持たぬ安倍さんと宮内庁

スケート界前途洋々結弦梨花

消費税富裕層から取りなさい

大阪府 高木 道子

お見舞にピン札一枚つけて行く

夫逝って手抜きする事覚えたり

淋しさの空気入れかえ気楽さに

人生のカリキュラムには無い認知

アンテナに自惚れ張って絶好調

大阪府 中内 孚彦

人生のうねりが消えて回顧録

人生を投げてしまえばあとはラク

本当の味方数えるのは怖い

手にスマホ文学少女どこへ行く

幸せは縁側にさす薄日かな

神戸市 近藤 勝正

にぎやかに囲炉裏囲んだ父母が居た

生き方の解を尋ねに父母の墓

息災に八十路迎えて手を合わす

感謝して最後の坂を登ってる

冬ハエ天寿全うさせてやる

神戸市 田本古鈴

初デートどちらが雨の人なのか
独りだと思えば軽し旅支度

身から出たサビを落としてあの世行く
二千回通った店がつぶれてた
覚悟して開き直って今を生き

神戸市 山根弘華

ほけたふりこれも一つの生き上手

ハードルを少し高めに上る古い
点と線これが私の現在地

迷コンビ今朝も笑いで幕が開く
本の虫秋の夜長が出番です

尼崎市 清水久美子

恩師への不徳を詫びる去年今年

重ね着と早寝で浮かす灯油代
背伸びして錦市場で買う酸菫

搗きたての餅なら食べるこだわり派
「災」の字を「幸」へ期待の新元号

伊丹市 延寿庵野鶴

反省の数ほど人は強くなる

彩ひとつ足して明日へ繋ぐ夢
仏足石拝み悟りを深くする

初期化した地図へA I車始動し
スイッチ切り無我になつて座禪堂

加西市 山端なつみ

PPKまだまだ早い百超えて
諭吉さん仲間呼んでよ春財布
腹立ちを紛らす鍋の尻磨き
ちらほらの白髪苦勞の証です
スイーツと気取れないけどうまい芋

篠山市 久保木剛

お醤油をムラサキと言う店で食べ
絵手紙のネタでしかない柿たわわ
城跡に立てば腕組みしたくなる
お出かけは老いの証のルーブタイ
記念日を忘れて妻にふて寝され

篠山市 長澤喜弘

夫婦の会話今晚おかず何にする
夫婦割引利用したいが趣味合わず
意見対立最後は妻の言う通り
何処へやら妻今日も出かけておりません
また転ぶつまずくたびに老いすすみ

篠山市 藤井美智子

恙なく過ごさせた今日を明日へ継ぐ
句作りに詰まり恩師の顔浮かぶ
口惜しさが自分の甘さ知らしめる
前を向き下もよく見て老いの足
ウォーキング健康志向へ茜空

三田市 東内 美智子

昨日より喜び増えて孫二人
一日が半分つぶれ探し物
この私呆けたらどんな見てみたい
家の鍵息子と嫁と管理人
無い物ねだり息子二人で娘欲し

宝塚市 岸田 万彩

万博が眠い浪速にカツを入れ
禁煙をしてからずつとダイエツト
断捨離をすればひときわ寒い部屋
補聴器めつまらん話拾いよる
五輪には目途ついたさて万博は

宝塚市 太田 としお

杖なしで歩けるなんてありがたい
すんだことごちゃごちゃ言うな見苦しい
逆境をチャンスに替えるど根性
トランプが風邪を引いたら肺炎に
近道にいつばいあつた落し穴

和歌山市 北原 昭枝

転た寝の火燵で拾う初春の夢
あの頃の私に出会ふ畳紙
巡る季に咲く花があり情があり
春花秋月ひとそれぞれに色がある
窓を拭く遠景にある過去未来

和歌山市 定松 宏枝

どこまでも付いて来るのは影と税
縁側で猫を相手に黄昏れる
低床のバスのステップどっこいしょ
始末して暮すしかない消費税
散財の正月過ぎて粥啜る

和歌山市 松本 雅子

アガリ性ああそうなんだ二人とも
ちゃんこ鍋つつく本日家族なり
生き方は選ぶ死に方は神まかせ
刹那に仄めくシャボン玉の恋
五七五弦を張り替え弾む音

鳥取市 上山 一平

海辺までハダシで攻める砂の山
イルミネーション潮騒も聞く砂の城
秋の風呼び込む孫の逆上り
ひと鳴きの百舌にしじまを蹴破られ
茶柱にでつかい梨と柿が来る

鳥取市 大前 安子

久し振り友には友の歳の花
母の妙同じことばにある温み
身の丈と思う夢への欲つもる
おでん鍋あの子この子の好み入れ
無駄花の夢が集まり新芽だす

鳥取市 副井 裕

会話し車内全員スマホ見る
スーパの棚奥の方から品を取る

A Iが川柳詠む日やがて来る
老い二人なぜ犯人はいつも僕
ランチ会店内すべて女性客

倉吉市 岡崎 美知江

戦などなかったような海の青
汚してはならない海と空の青
いつまでも甘えていたい母の海
情報にのれずに老いていく
言葉だけ先に走って悔いばかり

倉吉市 田中 けいこ

歳とつたずと遅れて出る痛み
なあなあですむおつきあい友がいる
みかんの皮 煮汁で掃除ピカピカに
口を開け居眠りしていたがっかり
自転車で居眠り運転気をつける

米子市 野川 宣子

猪突猛進あの勢いは今何処に
人並みにせかせか真似る十二月
お誘いは二つ返事で出掛ける
暖冬の店の白菜でんこ盛り

予定は未定びんぴんころり逝くつもり

鳥取県 門村 幸子

渋滞を避けて通れぬ名勝地
ツアーバス肩凝らさせぬ名ガイド
負けまいぞ情報過多とおもう世に
足りぬとこ補い合つて人と人
「寒いですね」おうむ返しのお芸の無さ

松江市 中筋 弘充

熟年の会で元マドンナと盛り上がる
迎えても送つてくれぬ救急車
空元氣出されるうちは大丈夫
藁草履恋しがってる土踏まず
洗つてまで使いたくない紙コップ

松江市 山根 邦代

一日が早いはやいとつぶやいて
動ける今日一日が丸マーク
声掛けてかけられている笑顔の輪
ニュースには何でなんでと胸痛む
目が冴えて言葉さがしの五七五

鳥根県 原 徳利

音速の壁を破つて飛ぶ噂
生き仏様にいちばん氣を遣う
韓流に嵌った妻の根は太い
春咲きの話の種を播く秋日
元氣出す原動力に赤ワイン

出雲市 黒目 ひでお

翔平が新人王で今年終え
貴景勝若い力で盛り上げる
テレビ見てたまたま知った内緒事
独学の川柳挑み十年日

雲南市 永見 安子

段取りが悪いかすぐに日が暮れる
同窓会同じようにシミと皺
あちこちに花を活けてのおもてなし
藤の実がはじけて山のにぎやかさ

松江市 相見 柳歩

鉄人を応援できる歌がある
斜め読み古代出雲で立ち止まる
反省で地獄脱出できるとか
ぎりぎりは遅れた方にカウントだ

岡山県 小野 美那子

眩しくて好きだと言えず黄昏れる
我慢だよ言われてわたし仏さま
残り火が化学反応おこしてる
何もかも許してふたり黄昏路

尾道市 小畑 宣之

良いことが続くこれから要注意
青春の思い出富士に槍穂高
人間は木の葉一枚作れない
断水や井戸端会議復活し

尾道市 日谷 寛

しあわせなふたりへ今日も小鳥来る
やさしい手ぬくい手今日のハイタツチ
ことなかれ主義のひと日へつむじ風
こだわりを捨てたひと日へおでん鍋

府中市 岸田 武

初霜に急かされやっとな冬仕度
ロボットのようなお辞儀をする孫だ
ずっこけて拾ったものが役に立つ
難聴が無口にさせる淋しいね

三原市 笹重 耕三

鉤括弧付けて強気になってみる
何をしたんだろう一年が速い
医者通いの一年だった 反省
悩みごと忘れることにする師走

山口市 青木 隆子

道徳心教えたいのは立法府
一日千秋先の見えない拉致家族
低血圧目覚めが悪い怠け者
すぐ分かる母の帰宅の杖の音

山口市 中前 幸子

反骨の拳だんだん瘦せてくる
月煌煌と砂丘に描く冬の詩
埴輪の森が賑やかになる星月夜
雲のメルヘン天空に描く白い街

札幌市 芥藤 宏子

いつの間に大根すだれも過去の日々
避難所で子等ははしゃいでかくれんぼ
停電の夜空に歌う星のショー

幼な子は無心の笑みで明日生きる

阿南市 小畑 定弘

チヨイワルの気分で泳ぐネオン街
喜寿からの方程式がまだ解けぬ
アナログの恋が何ともじれつたい

夕焼けは妻とボクとの美術館

西予市 井関 はるえ

凜と咲く梅に重ねる母の顔
スキップを踏めば絡まる足である
お別れの手紙は芯を尖らせて

世渡りが下手だと悟るUターン

福岡県 本田 さくら

断捨離に家族の過去が「捨てないで」
誕生日孫のカードを大切に
十二月なのに半袖颯爽と

船乗りの帰宅待つ妻長い日々

唐津市 岩崎 實

枯れるもの自然のおきて霜がくる
植林はシベリヤ帰りの兄の手で
朝風呂に隣空地に槌の音

ほほ笑みを返す亡妻南無阿弥陀

沖繩県 禱 モモト

ストレスを温泉宿の至福感
助手席のカーナビ息子指示過ぎる
他人愚痴惚け話は聞き捨てる
月光は女心を見透かして

砂に書く相合い傘を波が飲む
同期会方言パワー盛り上がる
戒めを自我に置きかえ子にさとす
悲しみをピエロのようにふるまう

沖繩県 あら さくら

呼び込みの初初しさについて母性
爆音に映像みだれ飛び飛びに
くちびるに人差し指でリップケア
こうもりの闇の公園徘徊し

前略と書く便箋が見つからぬ
貯金箱空っぽなりの平和主義
二枚舌のまま帰道になる
友と来てひとりで戻る田舎道

那覇市 宮 すみれ

被災地が増えて平成幕降ろす
平成の別れを惜しむ返り花
リハビリの昭和支えた足と腰
スーパリーのカーポートに今日もありがとう

白河市 鈴木 たけし

仙台市 月波 与生

被災地が増えて平成幕降ろす
平成の別れを惜しむ返り花
リハビリの昭和支えた足と腰
スーパリーのカーポートに今日もありがとう

白河市 鈴木 たけし

白河市 鈴木 たけし

被災地が増えて平成幕降ろす
平成の別れを惜しむ返り花
リハビリの昭和支えた足と腰
スーパリーのカーポートに今日もありがとう

スーパリーのカーポートに今日もありがとう

富士見市 中島 通則

挨拶を不審者と見るこの時世
その知恵を社会に生かせ特殊詐欺
何度でも妻の小言を「聞く力」
失う物もう無いはずがヘアロスに

東京都 高岡 弥生

末の子も自分の進路決めていた
賢くてまわりよく見る子供達
末の子もやはり来たのか反抗期
環境が人を大きく左右する

横浜市 長島 亜希子

お金ってあっても欲しいのですか
チコちゃんに叱られるねと笑いあう
インスタクターと歩けば街も別の顔
足腰も口も達者な歩こう会

静岡市 渡辺 芳子

旅気分昼間お風呂でいい湯だな
ゆたんぼをチンして朝までホッカホカ
振り廻す気温の変化にお手上げよ
年老いて昔のおけいこ生きた幸

名古屋市 富田 末男

父ちゃんのネオン好きには皆困る
巢立つ時柱の傷を確かめる
願望をより強くして壁挑む
潤える人と居るから心地良い

名古屋市 山本 三樹夫

一日の疲れを癒すちびり酒
同窓会妻生き生きと若返る
寒い日は酒とおでんに相場決め
一強で国会包む闇のなか

江南市 脇田 雅美

本を読め若い時から良く言われ
穏やかに優しく話す聞き上手
歳重ねつまらぬことで意地を張る
趣味三昧退屈せずに世を生きる

豊橋市 西郷 紀美代

青空に撒き散らしたい今日のうつ
仏壇の前に座ると出る涙
美容室シニアで埋まる白髪染め
カツ井を上にして父年金日

豊橋市 高柳 閑雲

ぼくという中に妬心という沼池
掘り出しに戻る男に爛二合
褒められて窓枠飛び出した小鳥
モザイクをかけてあるからよく喋る

京都市 櫻崎 篤子

平成も過ぎましたねと古い二人
終活もせずお迎えを待っている
現代語も英語も解らない八十五
平成も拉致は解決しなかった

人生はルーチンワークの繰り返し
現役を引いても元気趣味一途
木枯しが吹いて炬燵が顔利かす
こもり柿カラスが福を食べている

京田辺市 北野クニオ

注連飾り初穂に集う雀たち
凍てた夜は家族で囲む鍋料理
限定と書かれてあると並ぶ癖
猫の横お借りしますと日向ほこ

大阪市 横山里子

二番目はいい子ついでに育つてる
腹立てど惚けが原因忘れさせ
余生など知らずに逝った夫愛し
OB会これが最後と身に刻む

大阪市 中島栄子

見るからに寒そうな色してる空
非常用袋詰めすぎ持ち出せず
辛すぎて本当の味かき消され
第九聴き無事に過ごせて感謝する

大阪市 降幡弘美

礼品より地方納税郷土愛
料理には起承転結旨い鍋
世の中をうまく生き抜く阿呆になれ
老人を万博までは死なせない

大阪市 前川善之

残酷な天災多い年だった

池田市 上山堅坊

マイウエイ少し真っ直ぐ過ぎました

頭打つ試練に耐えてきた余生

永遠の未完へ歩む趣味の道

池田市 太田省三

三月は道路工事のラッシュどき

松茸の俳画にわざと丹波産

食欲を失うほどにウナギの値

波立たぬカカア天下に子は伸びる

泉大津市 磯野不二夫

ペランダに蒲団を干すと陽がかける

安すぎてバナナ買うのをやめてます

これまでの自分を許し前を向く

忘れ物家に帰ると思い出す

河内長野市 原熊知津子

愛してるから極上の嘘をつく

お粗末な悲劇に笑い泣く喜劇

木漏れ日を集めてつなぐ一行詩

振り払っても振りはらつても家族

河内長野市 穂口正子

イエスカノグレーゾーンを良しとせず

光らずに原石のまま下り坂

メール入れやっぱり電話誘い出す

幸せが姿を変えて待っている

杖ついても妻と夢洲行つてやる
河内長野市 渡邊 修

栄冠に天狗にならぬ二刀流

書き初めは週に二日の休肝日

喜寿過ぎて曲がわしより先進む

堺市 楠井輝子

言の葉を井戸端会議チョイスする

ひめゆりの塔悠久の悲話語り継ぐ

早よ死なな神にピンコロ頼み込む

補修してももう戻らないしわ薄毛

高槻市 三谷白黒

忘年会せずとも全て忘れてる

視聴率高い番組やらせでは

にらまれた制限速度守つて

新聞紙役立つ時代ありました

豊中市 源田啓生

老いという身にもめでたきお正月

宗教書読めど自分の身に付かず

宇宙の果て尋ね己の果て知らず

猫君よ私も食つて眠るだけ

寝屋川市 川本信子

嘘ばれず知らん顔して咳ばらい

一生に二つも命いりません

人生の節目節目にある哀怒

銀杏の木論吉を蒔いている積もり

やさし夫やさしく返す夫婦です
寝屋川市 坂本ミヨノ

試着して鏡の私失望よ

見栄脱いで肩の荷軽く役の会

願いた石に話してデート行く

箕面市 寺井柳童

自慢した餅肌今は鮫肌

ちらほらと名前があがる異動時期

熊野古道澄んだ空気を持ち帰る

平成に無事と健康感謝して

八尾市 田邊浩三

新聞で先ず開くのはテレビ欄

笑つたら身体に良いと分かっても

老いたかな本よりテレビ多くなる

自由つて不便なものだ妻旅行

八尾市 山川 寧

スーパー銭湯個展めぐりを癒やされる

キャンバスに積木が並ぶ現代絵画

飲み屋で足出てテニスで出ない

メ切日居眠りの跡夜を徹す

神戸市 奥田宗光

伸び代が期待されてる入社式

憎まれ口言わずにすんだひと呼吸

幸せ落ちる掬つても掬つても

ストレス発散そのたび羽根が生えてくる

祝杯はワインと決めて退院日

老眼鏡かけて通らぬ針の穴

物忘れちよこちよこあるがまだ元気

新時代五輪万博夢無限

神戸市 玄 番 美恵子

今年こそ腹にずしりと肝据える

八十路の悔い独り善がり直して

こだけと言える友だちみんな逝く

老いの坂気楽にいくよ手を貸して

神戸市 輿 水 弘

ノーベル賞神戸ビーフに大吟醸

サービス券財布の中で期限切れ

試着室どれにしようか値札見る

回る寿司老舗の味と勝負する

神戸市 斎 藤 隆 浩

うまくよりらしく生きよと子に願う

風向きに僕の性根を試される

ここだけの話と言えば皆が知る

万博が私の次のターゲット

神戸市 敏 森 廣 光

ドクターとの約束破る大ジヨッキ

表向きの顔もそうとうくたびれた

親の背に謝ることが多過ぎる

ハードルに向かいぶれない助走する

神戸市 米 田 利恵子

何回も途中下車して今がある

少しずつ進むだけでもありがたい

月並みのほめ言葉でも有頂天

カタカナが混じって狂う暗記力

尼崎市 近 兼 敦 子

いつからかスマホ頼りの生活に

LED次の交換生きてるか

遅刻して一番前の席にされ

孫しぐさ爺に似てくる嫌などこ

伊丹市 平 井 富 夫

丹波黒郷土生まれに持つ誇り

舌までも削られそうな菌の治療

お互いにお手頃と認め暮らす日々

午後三時お菓子と会話弾む声

篠山市 澤 良 子

飲酒減り薬量増えて年はとる

美人見て妄想浮ばぬ年悲し

木枯しが頭の中身持つてゆく

猫と居て炬燵に足をそっと入れ

篠山市 長谷川 善 輔

顔覚え名前忘れた人が増え

路地裏で赤チヨウチンが呼んでいる

当たら人生変る宝クジ

襟正す言ったあとからすぐ崩れ

三田市 大 西 重 男

三田市 九村 義徳

せせらぎと昔話をしています

シニアでも夢追う気持衰えず

ジム通いシニア世代の多いこと

ボランティアシニアの力燃え上がる

三田市 幸田 厚子

平成の最後さいごで閉める暮れ

あんただけ言つて耳打ちじゃじゃ漏れや

隠し事下手な演技は顔に出る

小遣いの値上げを妻は跳ね返す

三田市 住吉 美和子

晩秋の古都にとけ込む落葉焚き

カピバラがお湯に浸かつてほっこりと

絵手紙の見事な牙がおめでとう

手造りの器で食べる味最高

三田市 辻 開子

ドキドキで結果待つ日の長いこと

腰痛がじわじわ進む介護中

洗濯物古い二人だが竿たらず

服選び一言もらい即決だ

三田市 馬場 貴美江

自慢げに術傷みせる湯治場で

ブライドはおむつに吸われ消えていく

ゴールインマザコン卒業パパとなる

グリーンさんバイトの時給ご存知か

三田市 松本 ゆかり

駅前はどこも便利で薄っぺら

あの時の縁談受けてたら今は

ストレスも少し要ります生きるには

秘め事を温めすぎて破裂させ

奈良市 尾畑 なを江

百均で買ひすぎたって知れたもの

運転を一匹の蚊が邪魔をする

年度末道路工事が始まるか

見つめられいとしくなつて家の猫

奈良市 加藤 江里子

集まればいつも私がピエロです

無器用な父の遺伝子受け継いで

大波が越えていつもの日々戻る

白菜も大根もみなLサイズ

生駒市 児玉 規雄

免許返納今日から僕はナビゲーター

新年号国民投票で決める手も

十連休実感出来ぬ年金者

五輪から万博にまで命延び

奈良県 中堀 優

達成へまた汗をかき努力する

正月は一年分の先寝の日

シュレッターもくもく過去を食べてゆく

気持ち悪ついて来ないでお月さま

幽玄の能さめやらず帰路急ぐ
和歌山市 佐藤 まき

コンコースに由緒正しい絵馬揚がる
夢の未来叶うようにと請い願う
目も耳も騙し騙しで生きましよう

和歌山市 鍋嶋 澄子

杖たより逢いたくなくて乗る新幹線
柿たわわオレンジに空流れ行く
旅の途中赤い電車は湯けむりへ
大提灯いらっしやいませ小田原へ

和歌山市 西川 千鶴

恋なんて筆順さえも忘れたわ
平成よ行くな宿題たんと有る
国政はアンドロイドに任せたい
失笑を買ってなくした身の置き場

和歌山市 福島 一雄

カレンダーご苦労様と言っている
平成は際立ちました災害が
新年号平穩とでもして欲しい
中国は月の裏まで先回り

岩出市 村中 悦男

娘の帰省掃除機までも軽やかに
連れ添うて六十五年走馬灯
難聴を知らずに相手よくしゃべる
本当にあった噂の重い足

ダイヤモンドパーゲンといえ手は出せぬ
鳥取市 山野 すみれ

未来地図自由に塗れる絵具持ち
子がいつも親のまねごとさせてくれ
腐っても活きが良くても鯛は鯛

倉吉市 大羽 雄大

七年後夢洲行きを決めている
すれ違う友の背中にボクを見る
ガン検を受けとりあえず祝盃を
父さんの声に振り向く人違い

倉吉市 田中 紀美恵

お祝儀を投げられ受けた晴れ舞台
仕返しは許す心で帳消しに
甘い夫婦ほろりほろりと五十年
世渡りが滅法下手で万年平

倉吉市 堀 かずこ

世の中が変わる平成去ってゆく
また一つ年をとってくさびしいな
新しい年号ともに頑張るぞ
悪いことばかりある訳ないじゃなし

倉吉市 宮田 風露

石畳一面の彩もみじ散る
落葉掃きやとと終って雪迎え
お布団と仲よくなつて起き出せぬ
OG会六十路に負けぬ八十路かな

境港市 中井虎尾
師は走るわたしゃコタツでテレビ番

見えぬ機の音に合わせて鳥を見る
見えていた山をかくして時雨降る
葉を落とし春まで眠り枯れたふり

米子市 池田美穂

気持ちだけ三步先行く十二月
年末年始異常に痩せていく財布
宮様の気持ちかわかる同じ親
蟹だけはすぐに礼状届く暮れ

米子市 伊塚美枝子

カーリングもぐもぐそだね流行語
鳥獣も人恋しいか里に出る
パワハラでスポーツ界が揺れた年

女子会を静かにさせるカニが出た

米子市 黒田紀美江

親の杖譲り受けたよ年の順
試着する鏡の向こう嘘言わぬ
戻らぬ歳数とシミ写し出す

ポタポタでいいから福よやって来い

米子市 見山温子

みぞれ眺め今日も炬燵の番をする

たまの化粧出かけるのかと夫が聞く

二人居の無言おかまいなくテレビ

弾む事なくテレビが癒す老いの日

鳥取県 飯野菖子
夕焼けが二人の喧嘩聞いていた
足腰も痛くならない遊ぶ日は
太っ腹我が道生きる悠々と
人生も舌で味みて選べたら

鳥取県 下田茂登子

買物も出来ぬ過疎だが出たくない
老いの身に増して行くのは薬だけ
一人とは欲する物が見えて来ぬ
生きる望み何もないけど生きている

鳥取県 西谷悦子

踏み出した一步に福を期待する
土踏まずひたすら夢を追い歩む
景気良し悪し年金に変わりに
非正規の雑魚で成り立つ社会なり

鳥取県 橋谷静江

体力の限界までは無理をせず
若い日の夢は叶わず捨てられず
湧水の下流で暮す町に住む
おしゃべりが長くお昼は軽食で

鳥取県 橋本整

ふる里の紅葉がおいでと呼んで
愚痴を言うたびに心が背を向ける

ユーモアとジョークが老いに辛を呼ぶ

闇鍋に酒とビールでこっつんこ

(山川寧さん、櫻崎篤子さんは41頁にあります)

英語 de Senryu ⑧⑥

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim Horne

愚かにも 顔見にゆけば 雪になる

my feeling out of control

I visit you

and snow is falling

出世などもう問題にしてはみず

I don't care

about my promotion

anymore

feeling 感情・気持ち *out of control* 止まらない *visit* 訪ねる *snow* 雪 *fall* 降る
not care about ~について気にしない *promotion* 出世 *not ~anymore* もはや~ない

～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句②⑥ ガーナから川柳句集

世界で初めて「おなら」の川柳句集出版 *Adjei Agyei-Baah (Ghana)*

ガーナの *Adjei Agyei-Baah* の活躍はすでに『川柳塔』63 (2017)、78 (2018) で紹介していますが、最近彼は「おなら」をテーマにした川柳句集 *Piece of my Fart* を纏めました。誰にでもある生理現象の「おなら *fart*」を取り上げた川柳は多くありません。近代川柳や古川柳の英訳で知られる *R.H.Blyth* の著書 *SENRYU* (北星堂書店 1949) においても、550 句の英訳の中で「おなら」を主題にしたものは、(姑の屁をひつたので気がほどけ [古川柳] *The mother-in-law breaks wind./ And the feeling/ Is relaxed.*) など3句のみです。どうも生理現象をテーマにすることを日本人は好まないようです。*Adjei* の *Piece of my Fart* に日本語訳を付けて出版しようと相談し、私は日本語の題名を『放屁断片』と付けました。ガーナで初めていや、世界で初めての「おなら」川柳句集は、湿り気や粘り気がなくアフリカの乾いた土壌から生まれました。拙訳で『放屁断片』からいくつか紹介します。

elevator—/ meeting me with/ someone's fart (誰の屁か鉢合わせするエレベーター)

perfect trade—/ your fart/ and my snore (最高の取引となる屁と鼾)

cool airtight bus/ then someone/ let go... (完璧の冷房バスに誰かのプー)

summer lust—/ her fart/ wouldn't stop me (暑い夏彼女のおなら僕は突進)

staff meeting/ a quick dissolution/ from a fart (誰の屁かスタッフ会議即終了)

誹風柳多留一二篇研究 68

細井龍夫・伊吹和男

山田昭夫・石川道子

小栗清吾

清 博 美

575 齋日に御用大しやにおこなわれ

伊吹 雨譚注に、「大赦」とある。齋日は、正月十六日と七月十六日の、閻魔堂にお参りする数入りの日。大赦は、罪人を赦免すること。数入りの日の酒屋の御用聞きは、赦免された罪人のように、のびのびとして自由の身になる。

山田 賛。さい日に御用きんくもので出る 二二37

清 賛。ただし、謡曲「俊寛」に悩ましいフリーズがある。

非常の大赦行はるるにより。国々の流人赦免ある。文句取（援用）とすべきか。

礎稿引用例句、山田氏例句のほかに、

土蔵から調市大赦に行ハレ

三六40

という句もある。

576 高なわではしよりをおろすけちな客

伊吹 二説がある。まず、品川遊郭へ行くときに、四つ手など使わずに徒歩で向い、高輪で着物の端折りを下ろす品川の客。つぎは、旅戻りで品川遊郭に寄らず、高輪で旅の端折りを下ろす、品川を通り越す客。迷うところであるが、礎稿は後説を採る。

山田 礎、前説に賛。水の無い川とめ江戸の出ぐちなり 一九2

石川 同。旅もどりで品川を通り越してであれば、家まで端折るのでは。

清 徒歩で品川遊廓へ行くから「ケチ」なのでしよう。

577 だれかもふ水をくむはと勝ったやつ

伊吹 徹夜の博奕で勝った者が、「もう朝の水汲みを誰かがしてしている」と言っている。早く終りたいというより、勝った者の余裕だと思ふ。負けている者は、朝になったのにも気づかず、まだ勝負に熱くなっている。岡田朝太郎著「寛政改革と柳樽の改版」の「賭博」の項に入れられている。

かつたやつもふたたび立ちかあるといふ

天五義3

小栗 賛。負けている奴は、朝になったから勝負を終わろうといわれるのが恐ろしいので、気づいていても言わない。勝った奴は、もう終わりたいのである。

清 賛。

578 せん湯へ羽書で行ハひんがよし

伊吹 雨譚注には、「湯札のよし」とある。羽書は、「日本国語大辞典」に、

(二) ②江戸時代、銭湯などの代金を前納している人に渡しておく小さな紙片。

湯札。

とある。ジャラジャラと湯銭の音をさせて行くよりは、確かに品がいい。

せん湯へとなりのていしゆおさへて来

明三満3

清 賛。

579 さん留をへし折て下女すわる也

伊吹 サン・トメは、インドのコロマンデル地方の異称。棧留編は、もとサン・トメから渡来した縞のある綿織物である。また棧留針というものもあり、普通の木綿針よりやや長い縫針である。だから棧留編は、普通の綿織物より厚手だと推測される。だから棧留編を着た下女は、着物をへし折つてすわることになる。

棧留を着るもさかりの草履取 武三19

小栗 賛。「へし折つて」が手柄。

細井 賛。こわくしたのを。

清 賛。

580 知り切つて居るとあこやを主馬なぶり

伊吹 歌舞伎「壇浦兜軍記」などの悪七兵衛景清と謡曲「盛久」などの主馬判官盛久は、

清水寺観世音の熱心な信者であった。だから景清の思われ者である五条坂の阿古屋に、何もかも知っていますよと盛久が言つてからかつたであろう、という句である。

朝参り主馬と七兵衛もくれいし

四14

清 賛。

581 座敷らう身につかないと根津へ行

伊吹 どちら息子を入れる座敷牢を作った大工は、手間賃を貰ったものの後味がわるいため、悪銭身に付かずだと、大工たちが通うので知られている根津の岡場所へ、その手間賃を使いに行った。

座敷らう大工も根津を思ひきり 天五鶴2

山田 賛。「悪銭身につかず」の類。

清 賛。

582 かけ乞ハるんまを二日前に見る

伊吹 掛乞は、掛取と同じ。閻魔参りは、正月十六日の初閻魔と七月十六日の大斎日の、年に二度ある。この句の場合は、七月十四日に掛取に行き、その先で「借りるときの地藏顔、返すときの閻魔顔」の閻魔を二日早く見ることになる。

かけ取の来ぬが精霊へのちそう 一〇三
清 賛。

583 あねさまやたんとあがれと夜そばいい

伊吹 夜蕎麦売りが夜鷹たちに、「蕎麦をたくさん食べなさい」と勧めている。
あねさまたちさむからうと夜そばはい、

安一智4

山田 賛。腹が減つては戦は出来ぬ。

清 賛。

客二ツつぶして夜鷹三ツ喰 一二12

584 五位のしやうぞくで居るのを隠居揚

伊吹 五位の装束は、『日本国語大辞典』に、(五位の官人の着る束帯の袍(ほう)の色は緋色であるところから、転じて)江戸時代、吉原の新造などが着た緋色の衣服。

とある。張見世で緋色の着物を着ている新造を隠居が揚げた。

緋ち、みを着たのが隠居目にとまり

拾七15

五位の装束ですが、き弾いて居る 拾四30
清 賛。

愛染帖

新家 完可選

(投句278名)

コツコツに勝る手段を考える
大阪市 古今堂蕉子

(評) そう、何事も「速さ」を求められる現代、「コツコツ努力」なんて時代遅れ。良い手段が見つかつたら、是非お教え願いたい。

瓜坊のまままでいたなら人気者
舞鶴市 伊藤 恒

(評) 稿模様がマクワウリに似ているので瓜坊と呼ばれている猪の子供。幼児は可愛いが成長すると憎らしくなるのは人間と同じ。

フェラガモの靴の型には合わぬ足
豊中市 木藤こみつ

(評) フェラガモの本拠地はイタリア。東洋人の足型には財布にも優しい「メイド・イン・チャイナ」の方がピッタリではないか。

どの競技でも外国人で補強する
堺市 遠山 唯教

(評) 野球・サッカー・バレー・ラグビー・バスケット・フットボール・アイスホッケー等々。体力の差だろが……。情けない。

性懲りもないのが一番の長所
大阪市 森田 遊子

(評) 「塀の中の懲りない面々」は法律を守らない連中だが、他人に迷惑をかけない「性懲りもない」のはタフで打たれ強くて頼もしい。

4Kが色目でおいでおいでする
伊丹市 延寿庵野鶴

(評) 画素が高密度で映像が緻密な4KTV。今ので充分と思うが宣伝されると欲しくなる。NHKはメーカーと結託しているのか？

仲間入りしたいと思う猿団子
岡山県 田中 恵

(評) 吹雪く日などボス猿を中心に団子状になる猿の群れ。暖かく楽しそうにも見えるが、下っ端になれば外側で震えなければならぬ。

生き方に迷えばUSJに行く
羽曳野市 吉村久仁雄

(評) オトナも子供も楽しめるイベントやアトラクションが詰まった別世界。ひよつとしたら人生観まで変えてくれるかもしれない。

病人にならないように医者通い
貝塚市 石田ひろ子

(評) 人間ドックや定期検査など予防医学が進んでいる我が国。病院の待合室は元気な人で溢れていて、本物の病人は肩が狭い。

万博力ジノ 先ず夢洲の掃除法
堺市 内藤 憲彦

(評) 大阪万博に向けて、会場となる夢洲(ゆ

めしま)に140億円かけて基盤整備を行うとのこと。後のカジノで取り戻すつもりか。

なまはげが脚光浴びて子を泣かす
大阪市 平賀 国和

ここはどこ錦市場は外国語
加西市 山端なつみ

車から伸びる喫煙者の右手
沖繩県 森山 文切

夫にもソダネソダネと言っておく
東大阪市 北村 賢子

告白も別れも路地のもんじや焼き
高槻市 原 洋志

嫌ですとはつきり言つて黄昏れる
佐賀県 真島久美子

笑えるまでじつと我慢の鯉呼吸
弘前市 高森 一吞

エスカレーターあれば行きます富士登山
高槻市 島田千鶴子

まだ出ないスマホの次のおもちゃ箱
宝塚市 岸田 万彩

思惑と違つて出来たゆで玉子
鳥取市 山野すみれ

音程のズレから創る新世界
笠岡市 藤井 智史

上る下る知らんとこ無い京育ち
大阪市 柴本ばつは

しなやかに舞うタコ焼きのかつお節
米子市 竹村紀の治

大阪府 宇都満知子
いただいた銀杏煎れば爆ぜる秋

和歌山市 坂部紀久子
お抹茶でほっと一息木の葉散る

藤井寺市 太田扶美代
スーパード秋が安売りされている

奈良県 中堀 優
今年逝った彼や彼女の走馬灯

神戸市 細川 花門
マドンナもおばちゃん走りする師走

寝屋川市 籠島 恵子
伸びしろに今はドリンク剤がいる

仙台市 月波 与生
する事がないのではないしなだけ

下松市 有海 静枝
人違いのひと二次会も一緒

痛いとこ貼った湿布が痒くなる
メランコリー似合わないので蜜柑剥く

大阪府 高杉 力
レットテルを貼られレットテル通り生き

米子市 池田 美穂
コンピニのあとだと分かる整骨院

池田市 太田 省三
各々方ハラスメントに気をつけよ

クリスマスケーキ仏におすそ分け

開戦の年もあったよ十二月
刺身にも白から赤へ箸の順

京都市 都倉 求芽
寒暖の差がはげしくて居間を出ず

青森市 守田 啓子
冬型の気圧配置になる心

松江市 石橋 芳山
大笑いしても寒さを騙せない

黒石市 北山まみどり
あいづちが軽くて本題までいけぬ

奈良市 山本 昌代
着ぶくれてジイジバアはどんぐりに

弘前市 高瀬 霜石
飲んで寝て起きたらなんとまあ枯れ葉

無駄話無駄にする人しない人
大阪府 小野 雅美

一本で終わりはしない白髪抜き
平成生まれより我慢強いはず

じいちゃんは下で待つてるコースター
コピー機に演歌の楽譜忘れてる

松山市 郷田 みや
またですね後五分だけ待ちましょう

切替えが上手いと残高が増える
経年劣化家電も人もガタがくる

堺市 村上 玄也
白内障手術後妻が老けて見え

大阪府 平井美智子
化けて出る人のリストを書いている

期待して二時間浸かる美人の湯

堺市 奥 時雄
耳掃除よくしてるのに聞こえない

聞こえてるふりでいるからややこしい
奈良県 長谷川崇明

果物はもぎ取り木の実落ちて採り
年忘れ忘れて困ること忘れ

香芝市 山下 純子
低い鼻似ている孫がより可愛い

食卓は川柳グッズのフルコース
阿南市 小畑 定弘

音のない拍手でボクは送られる
冬金魚終の棲家にとつたりと

沖繩県 宮 すみれ
めじろたち旬のパバイヤちら見する

横浜市 川島 良子
いつもの品送り送られ年が暮れ

神戸市 上田 和宏
僕は亀冬は冬眠したくなる

豊橋市 西郷紀美代
湯タンポが眠剤よりも効果的

鳥取市 田中 天翔
もう一度鳴るまで起きぬ冬の朝

大洲市 中居 善信
年月を刻むと染みと皺になる

大阪府 大川 桃花
性格を直せないまま黄昏れる

唐津市 山口 高明
姉上の胸はパッドの紛いもの

元号の代り目一句残さねば
香南市 桑名 孝雄

句種には困ることなく駄句の山
米子市 生田 和之

閃きを取り敢えずメモ忘れない
沖繩県 禱 モモト

柳箋を多めに買って奮起する
箕面市 広島 巴子

忘れた句駄作だったと諦める
山口市 青木 隆子

ひねくれているなどつくづく思う句
大阪市 谷口 義

朝の寝床で川柳一句考える
和歌山県 森下よりこ

AIに作句任せて早寝する
神戸市 近藤 勝正

気合を入れて締め切りを守る
上尾市 中村 伸子

どうでつか没没でんな愛染帖
川西市 山口 不動

全没も絶好調も先ずビール
羽曳野市 中川ひろ介

恐怖症棺桶狭くないですか
三田市 丹羽 美恵

MRI 柩の狭さ想像し
羽曳野市 宇都宮ちづる

暮じまい風が迷子になっている
門真市 坂本 星雨

終活をしてからpay活をするか
羽曳野市 徳山みつこ

小言より褒められれば恐さ知る
橋本市 石田 隆彦

飽き性の私にはないルーティーン
三田市 上田ひとみ

口げんかした日の料理や辛い
豊中市 水野 黒兎

何日か何曜日かも要らぬ今
篠山市 澤 良子

煽り運転スポーツ界も政界も
八尾市 前田 紀雄

いつまでも女性の顔は金かかる
沖繩県 下地香代子

化粧ではごまかし効かぬ顔になる
奈良県 渡辺 富子

褒められて照れてる孫が俺に似る
奈良市 辻内げんえい

美しく咲いて散るのも老いの智慧
神戸市 山根 弘華

のしつて百均に箔付けている
倉吉市 大羽 雄大

うまく目で語れないから口で言う
岡山県 藤澤 照代

思い出に浸っておれぬまま米寿
三田市 北野 哲男

サブリなら愛嬌の素くださいいな
鳥取県 斉尾くにこ

踊ったり踊らされたり忙しい
倉吉市 牧野 芳光

ラブレ菌効果めざして蕪漬ける
富田林市 関 よしみ

円満離婚なんて有る訳ないじゃない
弘前市 福士 慕情

ハイヒール履き膝小僧曲げている
鳥取市 福西 茶子

年金と妻の健康だけでよい
寝屋川市 岡本 勲

今日の予定は湿布薬に聞いてから
和歌山県 古久保和子

転んだらおしまい杖を持ち歩く
桜井市 安土 理恵

君もまた年をとったぞニヤァと鳴け
篠山市 長谷川善輔

毛が抜ける排水溝をそつと見る
寝屋川市 川本 信子

いつまでも吸えるでしょうかこの空気
広島市 岸本 清

冷戦中夫熱出し捨ておけず
大阪市 磯島福貴子

長寿とは困ったもんだ歯科内科
高槻市 富田 美義

背が伸びた子の説教は遣りにくい
紀の川市 楠原 富香

フリースのパンツ後ろ前に穿く
土佐清水市 辻内 次根

府中市 岸田 武
元日に飲む銘柄は買つてある

八幡市 今井万紗子
人間を緩める酒の潤滑油

三原市 笹重 耕三
百歳までは一升瓶を抱いて寝る

河内長野市 村上 直樹
長生きの秘訣にそれぞれのお酒

神戸市 奥澤洋次郎
百歳への呪縛を破る酒の虫

香芝市 大内 朝子
ちびちびと守っています一合酒

三田市 堀 正和
ワンカップ眉間の皺が伸びてくる

松原市 森松まつお
風邪薬よりもよく効く熱い燗

河内長野市 梶原 弘光
お薬をやめたら調子よく飲める

沖繩県 あらさくら
本心がお猪口の底でスタンバイ

大阪市 藤田 武人
酌する手振動伝う恋の味

高槻市 松岡 篤
肩すくめ一杯だけのカウンター

札幌市 三浦 強一
休肝日より飲み会を優先に

百葉の長の葉効極めたい

弘前市 稲見 則彦
酒三合大風呂敷をもてあます

鳥取市 谷口回春子
真つ直ぐに歩いたはずの千鳥足

岡山市 丹下 凱夫
飲んで寝るだけのことならまだできる

和歌山市 武本 碧
柏汁の鮭がほんのり酔うている

藤井寺市 鈴木いさお
飲み代を削って香典へ回す

西子市 黒田 茂代
誰の指図も受けぬ眠くなつたら眠る

鳥取市 岸本 宏章
九割の外れ券売る宝くじ

西宮市 緒方美津子
泥棒は家の傾き知っている

奈良県 安福 和夫
奈良の柿赤く彩る寒暖差

倉吉市 岡崎美知江
我が家の袖子が近所づきあい保つてる

高槻市 初代 正彦
食洗器お蔭で楽になった夫

松山市 柳田かおる
猪と共有して別荘地

三田市 多田 雅尚
単純な仕事ヒト科に任せます

鳥取県 石谷美恵子
信念を曲げぬ男の背も曲がる

河内長野市 森田 旅人
茶々無茶な男に惚れるくせがある

池田市 上山 堅坊
叶つても困る楽しい夢を抱く

鳥取市 奥田 由美
旅立たれブランで終わる古希祝い

三田市 村田 博
言い訳に息せき切つて遅刻する

日高市 根岸 方子
シワひとつ重ねただけの誕生日

三田市 福田 好文
万博まで三途の川は渡るまい

大阪市 津守 柳伸
居眠りが出来てすつきりした自由

鳥取市 池澤 大鯨
老妻のつくる御数で足りている

岡山県 山縣のぶ子
おしゃべりが過ぎて慌てる墓掃除

和歌山市 磯部 義雄
靴底を減らした割に利が伸びず

奈良市 大久保眞澄
再発防止は永世流行語

豊橋市 高柳 閑雲
動物にとって都市部はパラダイス

大阪市 田中ゆみ子
子も孫もリップサービスより諭吉

宇部市 平田 実男
北国の春で別れたクラス会

共選欄

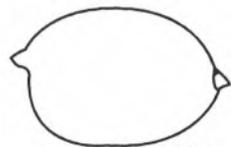
檸

檬

抄

(薰風書、カットとも)

(投句 359名)



K. K

「振る」川端 一步 選

人生にまだ白旗は振らぬ自負
人間のエゴが地球を振りまわす
戦争を知らず日の丸振る幸よ
五輪万博旗を振らねば非国民
手を振って兵士送ったお下げ髪
鈴を振り神に祈った震災忘
ためらわず風と遊んだ木の笑ふる
肝心なところにはルビを振っておく
をけら火を振り振り帰る大晦日
結婚と書いてがまんルビを振る
トップの座妻の介護で棒に振る
イエスノーサイコロ振って決めました
御手を振る陛下名残りの御立ち台
寝た振りでサンタのパバにありがとう
振り回す肩書とんとな私

東大阪市 北村 賢子
河内長野市 原熊知津子
鳥取市 倉益 一瑤
篠山市 長澤 喜弘
大阪市 高杉 千歩
豊中市 水野 黒兎
富田林市 関 よしみ
西予市 黒田 茂代
奈良県 谷川 憲
三田市 谷口 修平
尼崎市 清水久美子
三田市 堀 正和
八尾市 山根 妙子
さいたま市 星野 育子
羽曳野市 徳山みつこ

「振る」山岡 富美子 選

お見事な尻尾 お見事な出世
バイバイが上手になった小さな手
カタカナ語漢字でルビを振っておく
フルスイングしても空気も動かない
仏さまたしかに縦に首振った
振り過ぎた尻尾に溜まる自己嫌悪
S席で勿体振って舟を漕ぎ
死んだ振り元氣な振りもして生きる
振り上げてしまった腕のおさめ方
銀シャリに胡麻を振ったら三つ星に
次の世は美人に生まれ振ってやる
日の丸を振ったあの日を忘れない
かんにんな今日も明日もあかんのよ
九十歳家庭菜園欵を振る
終活へ振った男を積みあげる

弘前市 高瀬 霜石
沖繩県 森山 文切
八王子市 川名 洋子
岡山市 永見 心咲
四條畷市 吉岡 修
東かがわ市 川崎ひかり
豊中市 藤井 則彦
千葉市 海老池 洋
奈良県 中堀 優
堺市 柿花 和夫
茨木市 島田 誠一
香芝市 大内 朝子
神戸市 富永 恭子
鳥取市 土橋 螢
桜井市 安土 理恵

一発屋朝から素振り欠かさない	枚方市	丹後屋 肇
医学部の都合勝手な振り落とし	羽曳野市	藤原 大子
鈴振って苦手に遭わぬよう歩く	奈良市	大久保眞澄
振り向かぬ恥ずかしいことばかりした	大阪市	江島谷勝弘
振り向かぬ決意へ風が新しい	香芝市	大内 朝子
吉か凶振ってみなけりや分らない	宝塚市	太田としお
手を振ってまた置き去りにするベッド	和歌山市	古久保和子
見えぬ手に押され気後れ振り払う	大阪市	升成 好
見ない振り死んだ振りして身を保つ	今治市	渡邊伊津志
ガン告知平常心の振りで聞く	池田市	奥園 敏昭
ふるふるでライン友達追加する	大阪市	宇都満知子
振り上げた拳が宙に浮いている	大阪市	平井美智子
振り上げてみたげんこつの置き処	海南市	小谷 小雪
振り上げた拳グーチョキバー作る	大阪市	古今堂蕉子
振り上げた父の拳固に光るもの	大阪市	柴本ばつは
修羅のごと小澤征爾が振るタクト	藤井寺市	鈴木いさお
指揮棒の先がドラマを産んでいく	三田市	久保田千代
塩コシヨウ振って揉んでる石頭	三田市	村田 博
約束を忘れ一日棒に振る	鳥取市	前田 楓花
振り向かず研究一途ノーベル賞	弘前市	今 愁女
失言で大事な役目棒に振る	大阪市	若本 安代
約束を振る度友が減ってゆく	三田市	尾崎 一子
振り出しに戻り一からやり直す	米子市	伊塚美枝子

徳利を振れば嬉しい残り酒	米子市	竹村紀の治
子どもの名読めぬと教師ルビを振る	橋本市	石田 隆彦
山崩れ振り子のように揺れた日々	札幌市	斉藤 宏子
しっかりと混ぜてしまおう清と濁	三田市	上田ひとみ
歌い手も胸に第九の指揮を振る	尼崎市	清水久美子
振り返る所々にある汚点	横濱市	川名 良子
首横にそれとも尻尾振りますか	奈良市	大久保眞澄
白い旗もう振ることもなく老いる	大阪府	米澤 俣子
振幅も気分に合わせて古時計	大阪市	近藤 正
振り上げた拳グーチョキバー作る	大阪市	古今堂蕉子
延命に首を振るのか振らぬのか	鳥取市	山野すみれ
選り好みする分離器に背かれる	和歌山市	松原 寿子
私にも振り逃げの手があるのです	貝塚市	吉道あかね
振られたことあるが振ったことはない	大阪市	江島谷勝弘
指揮棒の先がドラマを産んでいく	三田市	久保田千代
フラダンス見事に腰を振る老婆	八尾市	内海 幸生
振り上げた拳行き場が見付からず	堺市	村上 玄也
似た人を振り返り見る昼の月	岸和田市	宮野みつ江
生温い返事に胡椒振って置く	寝屋川市	伊達 郁夫
大谷の振るバットから夢が飛ぶ	豊中市	水野 黒兔
悲しさを増幅される振り子の音	堺市	坂上 淳司
病名を知らぬ振りして逝った夫	豊中市	齋藤奈津子
三ヶ月振りに刺さってきたメール	松江市	石橋 芳山

妻や子の見てないところで尻尾振る

病名を知らぬ振りして逝った夫

権力がすぐパワハラを振り上げる

ない袖も振って平和を逃がさない

就活に振られる度に出るファイト

反戦を声振りしほり叫びたい

万博に隠れカジノが大手振る

振り向くのはやめよう影に叱られる

振り向けば遥かにかすむ昭和の灯

銀シャリに胡麻を振ったら三つ星に

しゃんとせよと私に塩を振るあなた

四万十の川面いろどる火振り漁

私にも振り逃げの手があるのです

旗のあとついて行くのにもう慣れた

今度こそ今度こそはと賽が言う

美術館出て手を振ってそれつきり

旅半ば身の振り方を考える

鈴振って無事平安を感謝する

自国主義我もわれもと旗を振る

秀句

九条が武器は要らぬと首を振る

振り仮名のように寄り添い老介護

あの世まで歩く大きく手を振って

尼崎市 藤井 宏造

豊中市 齋藤奈津子

三原市 鴨田 昭紀

羽曳野市 吉村久仁雄

神戸市 能勢 利子

奈良県 渡辺 富子

大阪市 近藤 正

貝塚市 石田ひろ子

吹田市 須磨 活恵

堺市 柿花 和夫

松江市 石橋 芳山

唐津市 山口 高明

貝塚市 吉道あかね

堺市 奥 時雄

弘前市 高瀬 霜石

長岡京市 山田 葉子

堺市 遠山 唯教

大阪市 樋口 眞

四條畷市 吉岡 修

三原市 笹重 耕三

和歌山市 武本 碧

岡山市 丹下 凱夫

冥土まで心の鈴を振りながら

一日を棒に振っても果たす義理

尻尾振ることも覚えた青リソング

生きんがため玉虫色の旗を振る

つんつんとヒップに言わせ去って行く

茶柱の思わせ振りな斜め立ち

尻尾振るみんな無視して行く師走

甘酒を飲む振幅の大きい日

何ほどの意地か尻尾も振らぬ犬

振り向けば今日がゆっくり落ちていく

見送るな振ってアウトになって来い

振り切ったつもりへしづく後を引く

よく振ってください消えてしまふまで

振った尾の先から荷崩れが起きる

振りすぎて酸っぱくなってきたワタシ

指揮棒の先から無限大の宙

タクト振る背な大きな海を見る

シェイカーの中で格闘するカオス

横に振る首は縦にも振れるはず

秀句

振り出しに戻れば何だつて出来る

四万十の川面いろどる火振り漁

ノーベル賞どれだけ試験管を振る

豊中市 源田 啓生

奈良県 中原比呂志

札幌市 小沢 淳

和歌山市 福井 菜摘

堺市 奥 時雄

大阪市 升成 好

岡山県 田中 恵

海南省 小谷 小雪

和歌山市 上田 紀子

神戸市 敏森 廣光

松江市 相見 柳歩

松山市 宮尾みのり

佐賀県 真島久美子

和歌山市 古久保和子

青森市 守田 啓子

弘前市 福士 慕情

鳥取市 中村 金祥

下松市 有海 静枝

米子市 伊塚美枝子

和歌山市 武本 碧

唐津市 山口 高明

豊橋市 高柳 閑雲



追悼

松山芳生さんを悼む

濱山 哲也

毎年正月、温泉に行つて芳生さんの大きな背中を流すことから僕の川柳の一年は始まつていました。所属吟社はもちろん行動も常に一緒で、ふた回り違うことから自他ともに親子のような関係だったからです。

今回、入院したときも電話がきて、芳生「現行犯逮捕された」

哲也「分かった、保釈金用意するからそれまで待ってろ」

と、僕たち流の会話を交わし、11月12日見舞いに行く

芳生「心臓がかなり弱つていて2カ所つまつてゐるらしい、2週間くらい様子をみてカテーテルになりそうだ」

と元氣そう、いや、とても元氣でした。

それなのに翌13日午前2時、心不全により、突然みまられました。享年80。

芳生さんは平成16年から川柳を始め、20年奥さんに先立たれたあとは川柳を心の支

えとして暮らしておられました。

現役時代は弘前営業所所長として人望も厚く業績優秀で、フジパンという大企業の中でも「津軽のやり手」として知られていたようで、退職後も社長がたびたび訪ねて来ていたことから、かつての功績が証明されております。

その人格と才覚は川柳でも変わることがなく、川柳塔社「二路賞」と「路郎賞準賞」、および「青森県川柳社年度賞」の受賞、全国誌上大会で1位を2回、また句集「夢」の出版と、秀でた川柳人として全国に名を馳せていました。

また貢献度も絶大でした。書道の大家でもあり事務職に長けておられたので、各大会の書き物や川柳展の色紙を一手に担い、各吟社の役員としてその能力を惜しみなく注いでくださいました。

さらに男氣もあり細やかで面倒見の良さ

から、1年おきに手作りのミニ句集を作つては全国に発信。知り合いが何かを受賞するたびにその記念として、身銭をきつて刻字や句集を作ってくれるなど、全身全霊を込めて我々をサポートしてくださったのですが、今となつては「孝行をしたい時には親はなし」です。

スターマインそして哀しさ降つてくる
朱肉から貧乏神が離れない
そしてまた冬の吹雪に慣れてゆく
割り箸に森の匂いと飢餓の風
開口一番笑顔添えておめでとう
約束のひとつふたつは守りたい
限界を知つた腕なら持つている
究極はたつたひとつの夢でいい
少年の眠りの中へもぐる橋
お茶嚙り許すところになってゆく
人間にまた生まれたい笑いたい
灯籠流し点になるまで語り合う

芳生さんの句姿は大きくてきれいでした。あの笑い合った日々を大切にします。ありがとうございました。

芳生とところろの中に刻字する 哲也

「人情」

江島谷 勝 弘 選

(投句 231名)



最高の人情だろうボランティア
情け深い人と言われて断われず
人情も投げ棄て埋める辺野古海
人情を個人情報妨げる
辛い時は人の情けに縋りゃいい
人情に弱い世代が詐欺の餌
区画整備人情までも分けられる
人情に支えられてる遍路さん
ゴタゴタを人情話で説き伏せる
人情と不人情は紙一重
金貯まる程に人情薄くなり
一生涯義理と人情抱きかかえ
人情を泣いて喜ぶ喜寿傘寿
人情に触れて野良猫よく太る
外地での同胞の手が温かった
薄いスマホが人情を軽くする
パソコンは人情なんて気にしない
見捨ててはならぬ弱者と少数派
弱者にも自己責任と鞭を打つ
人情に飢えたら寅さんのビデオ

鳥取県 山下 節子
神戸市 米田利恵子
池田市 奥園 敏昭
和歌山市 磯部 義雄
奈良県 中堀 優
米子市 後藤美恵子
高槻市 島田千鶴子
鳥取市 永原 昌鼓
広島市 松尾 信彦
尼崎市 清水久美子
堺市 坂上 淳司
藤山市 澤 良子
米子市 生田 和之
富田林市 中村 恵
富山市 伴 よしお
門真市 坂本 星雨
宝塚市 太田としお
鳥取県 門村 幸子
大阪市 平賀 国和
米子市 池田 美穂

人情で生きていたころウツはない
剪定は散るまで待ってやる銀杏
さりげない安否の電話独り居に
白葉はあるかと聞いてくれる友
人情に触れると脆くなるヒト科
塵ほこり情けも落とす風呂呂上り
雨宿り傘を貸そうか貸すまいか
人は皆同じ涙を流す時
うっかりを拾ってくれる人情味
割り勘が上手い人情家の財布
傷つけぬ丸くまあるく磨く爪
あちこちになぶつかり知った人の情

佳句

人情断ち切りFA権行使
両方の手袋渡す雪の街
下り坂になればだあれも寄つて来ぬ
人情を芥にならぬ様濯ぐ
薄情け泣いてたまるか蹴つとばす

人

野の花が一輪ピンにさしてある

地

門をそろりと抜いてくれた人

天

慰めは言わずにじつと横にいる

軸

自己責任論人情を減はす

江南市 脇田 雅美
宝塚市 岸田 万彩
八尾市 山根 妙子
倉吉市 宮田 風露
横浜市 川島 良子
防府市 坂本 加代
神戸市 上田 和宏
土佐清水市 辻内 次根
三原市 笹重 耕三
仙台市 月波 与生
和歌山市 松本 雅子
大阪市 若本 安代
塩竈市 木田比呂朗
佐賀県 真島久美子
倉吉市 牧野 芳光
岡山市 永見 心咲
弘前市 高森 一吞
東京都 川本真理子
西宮市 緒方美津子
大阪市 森田 遊子

「化ける」

倉 益 一 瑤 選

(投句 234名)



イルミネーション大変身の砂丘行く
万札に化けてくれたらなと思う
人間が狸に化ける永田町
警官に化けた詐欺師の名演技
現金にものを言わせて化けた奴
狐だけには負けぬ狸の意地がある
人間の頭脳がAIに化ける
化け方が下手でいつでも真ん中に
善人が化けると尻尾隠せない
七変化しても正体直ぐにばれ
人間に化けて狐がノイローゼ
千代紙で折る鎮魂という千羽鶴
化け方を忘れた轆轤首の首
化けるのはよそう私でいたいから
人間に上手く化けられないタヌキ
化けたいが五体も老いて絵にならぬ
善人に化けて肩凝り偏頭痛
軍隊に化けてはならぬ自衛隊
いもかばちゃ何に化かそか調理する
終電車女は母へ化け剥がす

鳥取市 上山 一平
倉吉市 牧野 芳光
弘前市 福士 慕情
神戸市 山口 光久
大阪市 柴本ばつは
河内長野市 大島ともこ
三田市 尾崎 一子
黒石市 北山まみどり
札幌市 小沢 淳
鳥取市 谷口回春子
河内長野市 藤塚 克三
男鹿市 伊藤のぶよし
沖繩県 森山 文切
明石市 糀谷 和郎
三原市 鴨田 昭紀
鳥取県 石谷美恵子
大阪市 平井美智子
大阪市 平賀 国和
鳥取県 山下 節子
豊中市 水野 黒兔

神棚で大化けを待つ宝くじ
パスワード忘れて人に化けたまま
ちまちまと貯めて夜毎の酒に化け
蟹一匹二〇〇万とはべらぼうな
漱石が論吉に化ける夢を見た
善人に化ける呪文が見つからぬ
化けるのは得意ウイッグ口紅で
化粧して強い私が出来上がる
素っぴんのあなたが好きと言ったのに
飛ぶときは鷹踏むときは象である
すばらしいショー見た揚羽蝶の羽化
挑戦的七変化の句を作る

佳 句

ウフフのフ株が二倍に化けている
沸点の愛が大化けする月日
淋しくなったらサンタさんに化ける
化けて化けて元にもどれなくなつた
イエスマンとある日ブルータスになる
二三枚いつも持つてる化けの皮
蛭にはなれるはずだと皮を脱ぐ
少女へと化ける短い爪である

軸

横濱市 菊地 政勝
青森県 守田 啓子
池田市 上山 堅坊
鳥取市 池澤 大鯨
大阪市 古今堂蕉子
和歌山市 武本 碧
鳥取市 福西 茶子
紀の川市 楠原 富香
三田市 福田 好文
橿原市 居谷真理子
鳥取市 岸本 宏章
笠岡市 藤井 智史
鳥取市 田中 天翔
富田林市 山野 寿之
鳥取県 竹信 照彦
藤井寺市 太田扶美代
弘前市 高瀬 霜石
岡山市 丹下 凱夫
岡山市 永見 心咲
佐賀県 真鳥久美子

今日もまた気合を入れて化けました

川柳塔鑑賞

同人吟 木田 比呂朗

—1月号から

ロスタイムあせつた方が負けらしい

山田 葉子

サッカーのロスタイムはアディショナルタイム（追加時間）に改められている。人生のロスタイムは「余生」「オマケ部分」とも言われています。であれば、焦らないことです。

目に耳に歯にも主治医ができました

宇都 満知子

精密機械のような人体、パーツのメンテナンスは、年ごとに手入れする部門が増えます。

愉快な日お酒が二本多くなる

川端 一步

楽しく心地好い日には、いつもの晩酌のお銚子も追加されます。そして家族との会話も大いに弾み、寒い冬の夜も暖かく更けて行きます。至福の時ですね。

消費税猪突猛進では困る

近藤 正

税率変更の延長も二度あって、今度は実施されそうですが、景気や世論などは無視しての結論ありきにもみえます。その使途は当初の通り、社会保障に充てて貰わなくては困ります。

鯖よんだつもりはないが五十肩

大久保 眞澄

五十肩とは「肩関節周囲炎」のこと。七十歳過ぎて肩が痛くて上がらなくなっても五十肩。呼称に違和感があります。

間違っていましたと口に出す勇氣

森松 まつお

間違いを認め「ことば」で訂正することは、なかなか出来ません。口に出すのは本当に勇氣の要ることです。

サバ缶がしてやったりと目立つ場所

富永 恭子

サバ缶は、放映直後に店頭を飾ったのも束の間、今や品切れ状態とか。本当にテレビの影響力は恐ろしい。

いつからかお菓子も食べる夫です

中村 伸子

左党だった筈のご主人も、何時からかスイーツに手が伸びます。円満な家庭の一シーンが見えます。

バイキング敬遠してるこれも古い

森田 旅人

若い頃は楽しんでいたものの、老いとともに億劫になり、足が遠のくようになりました。同感です。

川柳の話ばかりをして見舞い

岸 桂子

お見舞いの話題はつい吟社、句会のことばかり。帰宅して反省。早く退院してまた一緒に作句する日を待っています。

スナックのママはみんなの味方です

柿花 和夫

なじみのスナックには、幾組かの常連がおります。ママの独占はなかなか出来ません。ママはみんなの味方ですから。

消しゴムの肩が格闘した証

楠原 富香

推敲に推敲を重ねて、力作が出来上がる。そこには消しゴムの屑も残るが、それを格闘の証とは言い得て妙。

そんな時いつも隣に詩があつた

田中 ゆみ子

寂しいとき、悲しいとき、辛いときなど、そんな時に慰めてくれたり、勇気づけてくれたのは、そうです川柳です。

縫い代があると思つていた不覚

山口 光久

定年後の余生には十分なゆとりを持たせた計画であつたが、年金の受給も少しずつ減額、介護保険料、健康保険料の変更など思ひも掛けぬ出費が増すばかり。万全だつた計画にも、見込み違いが出てきます。

目薬を命中させるのは至難

津守 なぎさ

加齢とともに、細かい字への対応が厳しくなり、目に負担が掛かり目薬のお世話になります。首を傾げてピンポイントに点眼するのは意外に難しい所作です。

ひよつとしてドジョウは地震予期せぬか

加島 由一

動物の異常行動と自信予知能力の研究が行われているようです。ナマズのような能いがあるのではと期待してしまいます。

年金では手も足も出ぬ月旅行

内藤 憲彦

アメリカ民間会社の月旅行募集において、世界初の乗客第一号は日本の会社社長でした。近い将来誰でも簡単に月への旅行が出来る時代が必ず来ることを期待し待ちましよう。

アベノミクステイッシュ配りも消えました

村上 直樹

アベノミクスを自画自賛し続ける総理。しかし、多くの人はその効果を確認出来ていません。巷の景気は冷え込み、テイッシュ配りさえも消えてしまったことを直訴したいですね。

物置きにころころしてるジャバネット

原 洋志

通販のコマーシャルに購買意欲を掻きたてられ、つい不必要なものまで買ってしまう。物置に眠るものの中には、あの健康器具もあるのでは。

につこりとされて味方とつい思う

藤井 則彦

嬉しそうに、ほほ笑みを浮かべられればつい大方は心を許してしまいますが、笑顔にもいろいろあります。油断禁物。

年金の元は取つたがまだ達者

北野 哲男

年金の元が取れたと思う人はどれ程かそう多くはいないのでは。これからの余生を大いに楽しみましよう。

ろつそくがまさかの出番あの停電

福島 弘子

電気なしでは生活が成り立たない現代に台風、震災などで発生した停電、体験して分かる、真つ暗闇の恐怖、非常時の備えには、やはりマッチ、ロウソクといったものがまだ必要となりますね。

終活を免許返納から始め

宇賀 史郎

終活を何から始めようかと悩み、手始めに、免許証の返納を思い立ったものの生活に密着している車との決別は、非常に勇気が要ります。

さあ来いとスタッドレスの神無月

小沢 淳

雪国の冬タイヤへの交換。雪が降つてからでは、スタンドが混雑して交換は出来ません。従つて十月に早めの対応となります。『さあ来い』は、これからの長い冬への対応の「喝」です。

水煙抄鑑賞

—1月号から

前田 楓花

父さんの何処が好きなん子が訊ね

助川 和美

いい処たくさん持ったお父さんです。大切に上げてください。

安住の地は奥方の尻の下

岸田 万彩

奥様が何でもテキパキやってくれます。言われるようにしていれば我が家は平和。戻ってもいいから嫁に行けと言っ

定松 宏枝

このような事を言う父親がいるようですが、出来るなら最後まで添い遂げて幸せな人生を歩んで欲しいものです。

青春をさがしにちよつと出かけます

本田 さくら

平成ももうじき終わりです。青春時代は昭和だったのでしょうか。キラキラ輝いていた時代に、もう一度戻ってみたい。

イエスマン重宝がられ捨てられる

山本 三樹夫

自分の考えをちゃんと持っていないと用事が無くなればポイと捨てられ、回りからは信用のない人に見られます。

フルムーン一緒にいて来る葉

笹重 耕三

私の大切なのはあなた、でも、離れられないのはお葉なのです。あなたもお葉も、これからもよろしく。

平凡な昨日と同じ今日でした

吉道 あかね

平凡な日々は物足りなさがつきまといますが、何も無いからこそ平和。平穏な毎日に感謝して暮したいです。

酒の味知らない妻はかわいいそう

久保木 剛

陽気に飲んで歌って弾きたいのに、下の戸の妻にはそれも叶いません。気の毒に思ってくださいか。

新米をススメの群れも食べ比べ

戸田 真理子

コシヒカリ、キヌムスメなど新米の味も違うようです。雀の群がっている田圃は、さぞ美味しいお米なのでしょう。

傘寿過ぎ葉のいらぬありがたさ

山根 邦代

立派です。八十歳で葉の要らない人として尊敬に値しますね。日頃どんな生活でされているのか聞かせて下さい。

振り向くと前へ進めと夢が押す

小野 美那子

ダメになりそうな時、私には夢があるんだと、自分を励ますしかありません。百歳まで年金もらい生きてやる

斎藤 隆宏

「年金もらい」が効いています。人生百年時代。受け取り続ければかなりの額。とっておきの時間を持って独り住む

満腹になつても動く欲の箸

門村 幸子

美味しい物はついつい食べ過ぎてしまいますね。フルーツやスイーツは別腹と言つて、自分に甘い人もいます。

悪いくせ人の話の腰を折る

寺井 柳童

聞き上手になれず、いちいち口を挟みたくなる悪い癖。わかっちゃいるけどやめられぬ。

われら紅い花川柳会

つき なみ よ じょう
月波 与 生

「では、天位句を披露いたします」

紅い花川柳社主幹、葛川明治の声が狭い会場に響く。紅い花は、S県S市で最も古い川柳社であり、葛川の代で創立五十年を迎えたが、会員の減少、高齢化に悩まされ月一回の句会も、十数名程度の参加となっている。

「日本海荒れる 亡母さん元氣かい。えー、カアサンのカアはボウボと書きます。また、荒れる、のルとカアの間は一字空けです」

葛川の注釈の多い披露が終わると

「モズク」と、中年の男が呼名し、続いてまばらな拍手。

「えー、以上をもちまして今月の紅い花川柳社句会は終了いたします。懇親会は五時から居酒屋やまんばで……」

(また母の句が天位かよ)葛川の声が続いていっうちに席を立ったほくに、海野海雲が「与生さん、天位祝いにおごるから一杯

やつてかない?。よしこちゃんも行くよ」

と声をかけてくる。吉よしこはともかく、海雲にはひとこと言ってやりたいので誘われることにする。

居酒屋やまんばに集まったのは、ほく、海野海雲、吉よしこ、主幹の葛川明治の四人。軽い乾杯のあと葛川主幹が、

「今日海雲さんの母の句もよかつたねえ。読みながらおふくろを思い出して、グツときたねえ」というものだから吹きそうになる。

ほくが川柳を始めたきつかけは、気まぐれに地元新聞へ川柳を投句したら、すぐ葛川から連絡があったからだ。葉書に書いた住所を見たのだと思うが、新聞社の個人情報取扱いのずさんさに呆れてしまう。葛川は「君の川柳は素晴らしい。S県を代表する川柳作家になれることは私が保証するか

ら投句を続けて欲しい」というもの。S県代表は興味なかったが、川柳には興味があったので投句を続け、紅い花川柳社にも入会したが、最近感じるのは、葛川主幹はほくの句を理解できていない、ということ。その証拠に無記名の大会でほくの句を抜いた事が一度もない。

「モクスさんは母の川柳ばかり書きますね。ボウボなんて詠んでますが、モクスさんのお母さんまだお元気でピンピンしてるじゃないですか」と、吉よしこが突っ込みを入れる。

よしこは入会して一年足らずの新人であるが、サラリーマン川柳、お茶の俳句などには以前から応募していて入賞歴もある。初めて句会に参加したときの第一声が「お年寄りばかり、職場と変わらな〜い」だった。介護士さんなのである。

「よしこちゃんきついなあ。それにオレ、モクスじゃなくてモズクだよ。オレにとつて母の句はいい川柳をつくるためのオマジナイみたいなものさ。大会で母の句が抜けるのは何故だと思う?。十七音に母の二音を入れるといい川柳に見えるんだよ。選者に対する催眠術みたいなものだな。オレの母

がどうした、とかどうでもいいことなんだ」
葛川がたしなめるようにいう。

「しかし海雲さん。川柳には真实性が必要だよ。実感句という言葉もあるように、リアリテイのない作り事のような川柳は選者にはわかるものだ。抜ける、抜けないは横に置いておいて、もっと生活感のある作り事ではない本格川柳を書いてみなさい」

今日の句会で作り事の川柳を天位に抜いた葛川の、どの口が言っているのか不思議であるが、抜ける川柳がいい川柳だと思っ

ている海雲に対してはもつともな批評である。「でもセンセ、ゼンボツは惨めなものですよ。一度ゼンボツになったら、お涙頂戴の母の句でもいいから抜きたい、と思うのが人情ですよ」と海雲が自己弁護するところへ、よしこがかぶせた。

「サラリーマン川柳は、いやになるくらい妻の句が多いわね。退職金もらった瞬間妻ドローン、とか、タバコより体に悪い妻のグチとか。作者に三十代から五十代が多いサラ川に妻の句が多くて、六十代以上が多い伝統川柳に母の句が多いのはジェンターの視点から川柳を考えても興味深いわ」

よしこの言葉になるほどと感心する。い

い歳をしたおっさんが、さめざめとした母の句を書くのは、余程のマザコンか親不孝者だと思っていたが、年齢と共に作句の対象が妻から母に変換されただけなのだ。

「よしこさん。そうすると、妻の句が上位になるサラ川も、母の句が上位になる伝統ある川柳社の句会大会も、作者を男に限ると同じ世界観を書いているのかもしれないね」とぼくが話をつなげると、

「いや、わが歴史ある本格川柳と、狂句のようなサラリーマン川柳とは、まったく違う。君たちは勉強不足だ。尾藤三柳先生の『川柳神髓』を読んでもつと勉強しなさい」と、怒り気味の声で葛川が言う。伝統川柳系の指導者がサラ川を、狂句として忌み嫌うのは最早定番であるが、一体どれだけの指導者が、狂句を、サラ川を勉強して言っているのか心許ない。

川柳が庶民に親しまれてから二百六十年の中で、最も長く愛されたのは狂句の時代ではないか、とぼくは思っている。古川柳から始まり、長い狂句の時代を経て、現在の川柳の型に行き着いたのは明治後期であり、まだ百年ちょつとの歴史だ。しかも勢いは衰えたとはいえず、その間も並行して狂句も生き

続けた訳だから、川柳の本流は狂句である、といえないこともない。

「でも主幹、三柳先生もサラ川の応募が開始された当時、選者をされていたこともあったんですよ。主幹とは違う、三柳先生なりのお考えがあったのだと思います。それとモクズさん。ゼンボツは惨めかもしれませんが、やつぱりお母さんが生きていらっしやるのにボウボって書くのはよくないと思うんです」と、よしこが悪びれる様子もなくいう。

「よしこちゃんが好きなサラ川だって、実はいい奥さんなのに悪妻と書いたり、元気なのに惚けた老人として面白可笑しく書いたり、こういう作り話はたくさんあるよ。それにオレはモズク」と言い返す。

「だからわが本格川柳とサラリーマン川柳を一緒にするなといっておるでは……」

「まあまあ主幹」と、酔った葛川に酒を注ぐ。よしこが話を続ける。

「どこで線を引くかは難しいと思うんだけど、例えば健康者なのに障害者の句を書いたり、男性が女性になりすました句を書くのはやってはいけないことだと思っんです」
「川柳には書く素材がたくさんあるのだから、抜けやすいという動機だけで母の句の投

句を続けるのは、川柳をマンネリ化、硬直化させる意味でもよくないとほくも思います。同じことはサラ川にも言えて、最近のサラ川が最初の頃より面白くないのは、妻の句が増えマンネリ化に拍車がかかっているからともいえますよね」と、ほく。

「だからわが川柳とサラ川を一緒に、むにやむにや……」葛川はもはや聞いていない。

「オレが川柳を始めたとき川柳教室の先生は、川柳は人の中傷以外は何を書いてもいいと言われたぞ。それが紅い花川柳社に入会した途端、やれ中八はやめろとか、し止めがよくないとかわかれて、挙句の果ては一生懸命に考えたウミノモズクという雅号まで言葉遊びだと文句をいわれて面白くなかったよ。句会も最初は没ばかりでもう辞めようか、と思った頃に閃いたのが、今書いているような母の川柳だ。キミタチはオレが苦労して身に付けた川柳を書くなという。それはオレに川柳を辞めろと言っているようなものじゃないか」

海雲がおもちゃを取り上げられた子供のような眼でほくを見ている。

「それに、母の句がこれからの川柳にとつてマンネリで硬直化の原因ならば、選者が

取らなければいいじゃないか。選者が取らなくなれば、母の句は自然に廃れるさ。ところがどうだい。今日の句会だつてオレのボウボの句が天位じゃないか。今川柳をやっている人間は、新人だろうが主幹クラスだろが、みんな母の句が好きなんだよ。好きで好きで、もつともつと詠みたいし読みたいのさ。そういう選者がいなくならない限り、母の句川柳はなくならないし、オレはハハもボウボも書き続けるね」

選者の話になったところで、葛川主幹に何か言つてほしかったが、もう寝ていた。

「そうね、モズクさんの言うとおりで思うわ。選者が変わらなないと、佳句の基準が変わつていかないもの」

「そうだろうよしこちゃん」海雲が苦笑する。

「でもねモズクさん。そういう選者が佳句と駄作を選別するような仕組みも、段々淘汰されていくと思うの。選者によって選ぶ基準が全く違うし、そろそろ狂句の頃から続いてきた選者による競技性、遊戯性の高い遊びから、川柳は離れてもいい時期だと思ふのよ」

選に基準を設けよう、ということ、佳句の要因を数値化して句を評価することを

試みている柳社も最近はあるが、よしこの意見は選者自体が不要ということだろうか。

「川柳から競技性が無くなれば、川柳を書く人も減るんじゃないかな」と、ほく。

「減るでしょうね。だから現在のように、競技性、遊戯性のある川柳は続くと思うわ。でも本流はそこじゃない」

「本流はそこじゃない？」と、海雲。

よしこは笑いながら「あくまでわたしの予測ですよ。川柳は句会大会よりも、ネットからの発信が増え、それを取り纏める人が必要になるわ。アンソロジストの需要ね。おつといけない、終バスの時間だわ。続きは来月また。句会より楽しい懇親会だつたわ」

「葛川センセ、起きてください。帰りますよ」海雲が寝ていた葛川を起こし、ドタバタと四人は居酒屋やまんばを出る。

「ではみなさん。来月またよろしく。みんなでいい川柳を書きましょうね」

よしこの声を聞きながら三人は、彼女は何故紅い花川柳社に入ったのか考えていた。

※文中の川柳は、第一生命「サラリーマン川柳

コンクール」入選句を引用した。作者名を記す。

退職金もらった瞬間妻ドローン (元自衛官)

タバコより体に悪い妻のグチ (小心亭主)

(第8回 高田寄生木賞受賞 触光57号より)

転載)

『麻生路郎読本』余滴 (50)

「川柳職業人宣言」前後⁽¹⁰⁾

葉原道夫

このような反応が起きることを路郎は先刻承知であつたらう。はたして路郎が「川柳職業宣言」をしたのはどうしてか。それについて考えるには、「川柳雜誌」創刊にまでさかのほらなければならぬ。

路郎の「川柳職業人宣言」(昭和11年8月)が、当時の川柳界に全面的に好意をもって迎えられたものでないことは、「川柳研究」

昭和12年3月号の、「職業川柳人是非」の合評(川柳塔)平成29年10月から平成30年2月までの隔月に掲載)の次のような意見を見ても明らかである。

〈然し、つくづく思ふ。「ハイ私は川柳の商人で御座い！」と食ふためにさういふ宣言をしたものが、他の藝術の何の部門にあつたらう。〉

〈僕の氣持とすれば宣言つていふ事は、恰でチンドン屋のやうにも取れるのだ。〉

〈職業俳人とか職業詩人とかは餘り聞かないが、特に川柳だけが職業人を云云するのは、結局川柳を支持する大衆性によるのかな。何にしてもお寒いこつた。〉

「川柳雜誌」は、大正13年2月、「初心者の指導、古句研究の発表、並びに川柳社会化運動の機関誌」(『麻生路郎物語』¹³ 東野大八)として創刊した。菊判34頁のスタートだった。

「苦闘四十年」(昭和18年12月「川柳雜誌」雜誌奉還号)で、路郎は次のように振り返っている。

〈お互ひ川柳家同志(どうざい)がいかに、可なりとして褒めちぎったところで、一步社會へ出て見れば、まるで社會から川柳の存在が認められてゐないではないか。これではいけない。こゝに眼をつけた私は日車氏等の強請懇望これつとめてくれた友情をも振り切つて(筆者註一日車は半文銭とともに新興川柳誌「小康」を出すため路郎にも参加を求めた)、社會的な柳誌、社會を對象とする柳誌刊行の計畫をすすめたのであつた。(中略)

私は當時の柳誌が豆本式の範圍を出ない

こと、兎糞的刊行であること、お互ひ間で寄贈本位であること、内輪同志で摩擦ばかりしてゐること、これでは社會に認められる筈がないことなどを列挙して、私としては俳誌「ホトトギス」を目指して經營をやつてゆくつもりだ。「ホトトギス」が内容的にどんな地位に置かれてゐるか云ふことは別として、この誌の社會的存在價值は見逃すことが出来ないと思つたからである。そこで新しく出す雑誌は、柳界を代表させる意味と、寸時も早く社會に知らせる便宜上、普遍的な「川柳雜誌」といふ名を選んだのである(以下略)。

「川柳雜誌」の月刊斷行は他誌の脅威となり、「番傘」の如きは年三回乃至四回位の不定期刊行であつたが、しどろもどろになつて追隨して來た。合併號まで出して漸く三年目に月刊誌になつた。他はおして知るべしと云へやう。型についても、「川柳雜誌」の菊版型が從來の豆本式や四六横綴にどんな影響を及ぼしたかは紋太氏が度々書いて居る位であるから手前味噌でないことが知れるであらう。「きやり」の「豆本」「番傘」の四六横綴などははじめ、全国の柳誌と云ふ柳誌が、「川柳雜誌」にならつて遂

に柳誌菊版時代を出現するやうになつた。『番傘川柳百年史』によれば、大正2年、四六判横綴じで創刊された「番傘」は、大正15年に初めて月刊12冊を出し、昭和7年、四六判横綴じから菊判に変更したとある。

月刊で菊判の「川柳雑誌」を刊行した路郎は、川柳の社会化に邁進した。

創刊号で路郎は、「末弘博士の『暴政は人を皮肉ならしむ』を讀む」と題した文章を発表している。東京帝国大学法学部教授であった末弘厳太郎が大阪毎日新聞に書いた文章の川柳観に疑義を呈したものである。そして、二号では末弘厳太郎の「創刊號を讀みて」を掲載している。有識者にも現代川柳を理解してもらおうという路郎の意気込みが感じられる。

「川柳雑誌」昭和2年8月から、従来の同人制度を廃して旧同人を特別社友として、別に賛助員・客員の名を連ねている。賛助員には、漫画家の岡本一平、作家の国枝史郎、大阪朝日新聞社員で朝日会館主任の赤井清司、法学者の末弘厳太郎等の13名。末弘厳太郎が賛助員になっている点に注目。客員には、画家の伊藤彦造・小出楯

重、漫画家の吉岡鳥平等の13名。これも、有識者の名を連ねて「川柳雑誌」に箔を付け、社会に川柳を広めるためにしたものだろう。昭和6年7月に、大阪帝国大学の医学者を中心とした阪大川柳会が発足し、路郎がその指導に当たったのも、川柳を作る人の中に、社会的地位を築いている人を増やそうとするものだった。

また、創刊号から古書店の「公立社書店」の広告、二号からは「六甲苦樂園」の広告も掲載している。雑誌経営の安定を図るため、少しでも広告収入を得ようとしたものである。

「川柳雑誌」創刊100号記念として、昭和7年5月4日、川柳雑誌社は、川柳の社会化運動として前代未聞の催し「川柳の夕」を大阪市北区中之島の朝日会館で開いた。開会は、15分遅れの午後7時15分。大正15年に完成した朝日会館は戦前・戦後を通じて大阪市を代表する文化施設だった。朝日会館閉館後、朝日新聞社グループが建設したのがフェスティバルホールである。そのような一流の文化施設で、当時の句会費が概ね30銭のところ1円の入場料をとって、1000人余りの観客を集めたのであ

る。当日のプログラムは、三太郎・水府・路郎の講演、長唄、こども舞踊、喜劇「戀の罫あゝの眼だらうか眼だらうか」であり、閉会は午後10時10分であった。いわゆる川柳大会で川柳人だけを相手にするのではなく、一般市民をも対象とした催しであった。

昭和11年3月号から、「川柳雑誌」は有保証の新聞紙法の適用のもとに掲載内容の拡大を図った。簡単に言うると、「川柳雑誌」は、趣味の雑誌ではなくて公に認められた雑誌になったということである。保証金は1000円。当時の勤労者世帯実収入の約1年分に当たる金額である。

そうして、昭和11年8月号に、「川柳職業人宣言」を発表するに至ったのである。路郎は、自分だけが川柳で飯を食えるようになればいいという狭い見からしたのではない。川柳の社会化運動をするには、他の仕事を抱えていては、充分には出来なかつたからである。路郎は「専門家なき世界は発達せず」という強い信念のもとに、そのことを理解していない川柳界、そして川柳を広めようとする一般社会に向けても、「川柳職業人宣言」をしたのである。

こんにちは 新同人です

同人の歩み

大阪市 磯 島 福貴子

このたび同人に推挙いただき有りがとうございました。川柳とは、何かをわからぬまま、普段は新聞紙上等で見るユーモア川柳に惹かれ、一度作ってみたいなーと思っていた矢先、引越した所の公民館で川柳の教室が催されているのを知り、思い切つて門を叩いて六年になります。

そこで川端一步先生と出会つたのです。師のあたたかい、そして適切なご指導を得て、又、事ある毎に励ましを戴き、続ける事に。一年余過ぎた頃句会へのお誘いを受け、先ずは川柳塔すみよしへ。そこでもあたたかく迎え入れていただき、抜けた時の喜びを知り、やがて本社の句会にも足を運ぶ事となりました。

全没が多いのですが、めげずに頑張つて参りました。未だ未だ未熟な私、句作りには毎毎難渋して居ります。諸先輩のご指導を仰ぎ、同人に恥じぬ様、より上を目指して頑張りたいと思っています。どうぞよろしくお願い致します。

余談ですが、私は落語、浪曲、講談等等、一人語りの演目が大好きです。川柳との共通点は見い出せていませんが、共に楽しみたいと思っています。

僕の川柳活動

松原市 市川 雄太

僕が川柳と出会つたのは二〇〇九(平成二十一年)年十二月二十七日のはびきの市民川柳会に参加した時でした。仕事漬けの毎日だったので気軽に何か楽しんでみたいと思い、ネットでたまたま見つけたのがこの句会でした。初参加して右も左も分からない僕でしたが故・塩満敏会長(当時)を初めとする皆様方の温かさもあつて楽しく句を作る事が出来ました。この時初入選した「道行くと大きな松の木があつた」(岩佐タン吉さん選)の句は忘れられない作品となりました。

実は僕の曾祖父は短歌を作っており、今も祖父母が住む高知県の家に大切に置かれています。そんな曾祖父の血を引いているのか不思議な縁で僕も句作をしています。しかし曾祖父は阪神大震災の五日前(これを書いている日(十二月十二日)は月命日です)に亡くなったので、会話した記憶はありません。ですが創作力を受け継いだ者としてこれからも川柳活動を頑張っていきたいです。

昭和も終盤の一九八七(昭和六十二年)十一月九日に大阪で生まれて気がつけば平成の終わりまでやって来ました。二〇一一(平成二十三年)八月に川柳塔誌友、七年後の二〇一八(平成三十年)年三月七日に同人会員となりました。まだまだ創作の日々が続きます。常に感謝の日日です。

川柳を始め

大阪市 小野 雅美

一枚の川柳講座のチラシから私の川柳ライフが始まりました。それまではスキー、テニスなどスポーツが趣味でした。川柳はペン、ノート、辞書があれば、気軽に始められるのも魅力的でした。

平井美智子先生から川柳の三要素、音数の数え方など基本から作句のポイントなど丁寧にご指導、作句が出来ず、悩んでいる時は、励ましを頂いています。

また、句会に無所属のまま、川柳大会に参加し、自宅から一番近い「川柳塔すみよし」を紹介され入会、翌年から誌友となりました。句会では先輩方からアドバイスを頂いています。

川柳の奥深さを知るにつれ、語彙不足を感じています。が、今回同人のお仲間に加えて頂くことになりました。

これからもどうぞよろしくお願いいたします。

川柳に出会って

大阪市 田中 廣子

同窓会から帰る電車の中で大先輩の榎本舞夢さんに「川柳いいわよ」と勧められて軽い気持ちで「川柳塔すみよし」に入会させていただきました。

何の知識もないまま、皆様とお会い出来ますのを楽しみに毎月出席させていただき、時々抜けるのを励みに続けております。

本社句会にも出席させていただき、皆様の機知にとんだ素晴らしい句にいつも感銘しております。

帰りには色々反省会をして楽しみが増えました。

古今堂蕉子様にも色々教えて頂き感謝しております。思うように出来ない事、申し訳なく思っております。

また知らずに川端一歩様の横に座らせていただき、色々アドバイスをもらっております。また「川柳塔さかい」にも在籍させてもらい、後のお茶会を楽しみに続けております。年を重ねて下手ながら楽しみの一つとして続けて行きたいと思っております。

同人にはまだまだ未熟者では御座いますが、これを機に精進せねばと思っております。

今後ともよろしくお願い申し上げます。

こんにちは 新同人です

鷲峰山伝説

箕面市 中山 春代

薫風先生の句に

盛んなり秋鷲峰に雲もなし

があります。じゅうほう山は、川柳塔鹿野みか月のある鳥取市鹿野町の背後に横たわる、標高921mのどっしりとした姿の山です。

昔、鷲峰山と伯耆大山が背比べをしました。二つの山の天辺から天辺へ長い樋を渡してまん中から水を注ぐと、水はツーと大山の方へ。背比べに負けた大山の神は怒って、夜の間大きな金の杓子で天辺の土を掬っては投げ掬っては投げの大暴れ。その時落ちた塊で新しい山がいくつもできたそうです。

山の雪解けを待つて田を植え、文化の日には町をあげての鷲峰登山。麓に暮らす者にとつて、薫風先生にいただいた「雲もなし」のお言葉は、日本晴れ以上にありがたい誉め言葉なのです。

そんな町で育ったのに、川柳に目覚めたのは平成の半ばごろの事。遠廻りしてこの度やっと川柳塔の同人にしていたできました。ご指導のほど、よろしく願ひいたします。

水野黒兎さんに薫風先生の句を教えられ、嬉しさのあまりに故郷自慢をしてしまいました。

雪見舞鹿野ことばになつてゆく

春代

ボランティアガイドと川柳

奈良県 長谷川 崇 明

奈良観光ボランティアガイドの会の先輩に誘われ「川柳塔なら」の会に参加させて頂きました。昨年十一月「川柳塔なら」は二十周年の記念大会を開きました。同様にガイドの会も二十年が過ぎました。

そこでボランティアガイドの会の十五周年記念行事の一つとして行った、川柳大会の句をご紹介したいと思います。

当時川柳の経験者は4人でそれもほとんど初心者という状態でした。会員一六〇名に呼びかけたところ二八八句が集まりました。会員の当時経験者4名で二十句を選び、それを当時「毎日新聞やまと柳壇」の選者をされていきました。西川國治氏にお願いして天・地・人を選んで頂きました。ボランティアガイドの諸君がつくった句を紹介します。

- (天) 熱弁のガイド鹿だけ聴いており
- (地) よそ見してあんがい聴いてる小学生
- (人) 足元にお気をつけてとガイドこけ
- (佳) ガイドする夫の笑顔家でなし
- (佳) 妻ガイド夫は家で卵焼き
- (佳) 説明が短いからと喜ばれ

未経験者が一生懸命つくった句です。私の句は対象外でしたが……。これからは楽しみながらコツコツと続けたいと思つていきます。

出 会 い

尼崎市 森 菊江

川柳万歳

西宮市 福田 正彦

六年前、川柳会の帰りという旧知の方とバスに乗り合わせました。働き者のあの方がよい趣味をもたれたものと思えました。翌日、その方から「川柳の会を見に来ませんか」とのお誘いの電話がありました。

次の句会を見学、即入会となりました。午年生まれの私の六度目の回り年、記念の年となりました。

一年も過ぎた頃、「川柳塔」を頂き、早速誌友になりました。川柳から日ごろ気持ち離さないこと、心得をご指導頂きましたが、なかなか……。けれども毎月「川柳塔」は待ち遠しく、特に居谷真理子さんの「初歩教室」は勉強になります。なるほど、ああこんな表現もあるのかと。私の好きな句はたくさんあります。中でも

生きるとはつくづく自分とのいくさ 西出 楓葉

露天商の子の成長も見るまつり 永見 心咲

百年の計より今日の夕ごはん 神夏磯典子

そしてこの句に勇気づけられ精進をと考えております。

吾が秀句誰も採らない初句会 佐伯 政英

皆様 今日 川柳万歳です。

私は全く川柳に接したことなく、また文献にも接したことがありませんでした。ただ、俳句につきましましては句に表した事は無かったのですが、松尾芭蕉・小林一茶等の句に接し興味は持っていました。川柳への切っ掛けは、平成二十七年六月友人に進められ、神戸の六甲川柳会に誘われ出席したのが始まりです。

その年の九月、兵庫県川柳大会に会友と参加致し、その時一句でしたが兵庫県立美術館賞に選ばれました。諸先輩の方々から自分の事として喜んで頂き、祝福を受けました。心から川柳とはこの様な絆があるのだと、今は先程の六甲・西宮北口・たちばなの川柳会に所属させて頂いております。

今回、川柳塔まつり、本社句会等に出席致し、益々、川柳とは自分だけのものではなく、柳友が共有しお互い切磋琢磨出来るものだと思っております。ただ一方、もう少し脳の働きの良いと思っておりますが今少しです。しかし毎日毎日休みなく付き合ってくれており、充実した日々を送れること、この上ない至福であります。川柳 プラボー！です。

今後共皆様方の御健闘と、御健勝をお祈り申し上げます。

こんにちは 新同人です

言葉と旅

河内長野市 森 田 旅 人

「言葉には力がある」いつからか胸に棲みついて離れませんが。「さようなら」と言うとしんとした気持ち「グッドバイ」と口にするときスキップしたくなる。さようならは「そうあらねばならぬなら」グッドバイは「神と共に」であるなら然るべし。「言葉は芸術であるべき」とは川柳人の言葉。長柳会に入って五年、今楽しくて仕方ありません。句はできなくていかに自分が空っぽの人間なのかと思いつ知らされているのですが、六大家の句、先輩諸氏の句を読んでも人間を見るとは、生きることは、こういうことかと圧倒され感動してばかりです。

「この世ではいつも旅人」これもいつも胸にあります。旅が好きで五〇歳から時々リュックを担いで一人旅をしてきました。異国での独り、子供と遊ぶ、人を見る、言葉と交わす、別れを惜しむ、風を感じる。あの感覚を熟成させ、いつかいつか 私の一句を詠みたいと思っています。

この世での旅も終盤にさしかかりましたが、川柳と共に歩けることを幸せに思っています。

私の好きな一句

水溜り飛びそこねてもひとりかな

路 郎

朝日なにな柳壇 今年の十秀

— 30年12月20日 朝日新聞発表 — (太字は本社同人)

川柳塔社相談役 西出 楓楽選

最優秀句

忘れ物出てきて今日の幸ひとつ

森田 旅人

秀句

十二月八日を僕は忘れない

樋口 眞

少しでも手書きの文字にあたま

一条 智美

何のこれしき母の時代に比べれば

宇都満知子

教え魔が僕のフォームをわやにする

藤井満洲夫

とんぼりの雨に竹む句碑愛でる

阪本 秀子

介護保険他人の役に立つて欲し

平賀 国和

便利さで本屋消えゆく寂寥さ

楠畑万知子

惜しみにリップサービス夫婦こそ

植松 順子

老人力かなりついたらと笑い合う

鳥居 宏

番傘川柳本社主幹 田中 新一選

最優秀句

いつまでも生きるかのよう生きている

鳥居 宏

秀句

前向きな言葉が運にとけてゆく

阪本 秀子

ぬるい茶をゆつくり飲んで腹くる

藤原 祐子

大人ってなぜありのまま言えないの

山崎 達彦

無意識に声が出ているどっこいしょ

辻 肇

聞き上手人を裸にしてしまふ

上山 堅坊

人生に無駄という字はないそんな

葛野 勝規

人間を面白がって生きている

佐藤 隆治

最大の敵を鏡の中に見る

原 隼

老春のうねり女を溶かしてる

中井 佳子



雪に想う

同じ国でありながら北海道や東北地方と沖繩の気候はまったく違います。その違いが顕著なのはやはり冬場でしよう。

南国の人が雪景色に憧れに似た想いを抱いている一方、積雪が多い地方では除雪作業に追われ、屋根から転落して死亡したというニュースも珍しくはありません。

爽やかな朝新雪のよい香り

掌に粉雪受けてバスを待つ

五センチで降った消えたと騒がしい

街中をきんつばにして雪が止む

バケツの中に降る雪が丸く積む

年齢の自覚促す雪が降る

転んだら最後ですよと雪が降る

爽やかな雪の香りを楽しめるのもせいぜい積雪五センチまでのところ。その程度で止んでくれたら、街のところどころに黒い所も見えて何やら「きんつば」のようで面白い。

バケツの中に積もった雪が「丸い」と発見できるのも心に余裕があるということでしょう。ただ、スッテンコロリンと転んで笑っておれるのも若いときだけ。高齢になってくると骨折して入院。それが元で「寝たきり」という事態になることも多々あり。くれぐれもご用心ご用心！

山陰がそんなに好きか今日も雪

ひとり幅の雪かき今日も三度する

ただひたすらに我と戦い雪を掻く

浅田 隆樹

三澤 放舟

中山 春代

上垣キヨミ

山松みち子

堂上 泰女

竹村紀の治

爽やかな雪の香りを楽しめるのもせいぜい積雪五センチまでのところ。その程度で止んでくれたら、街のところどころに黒い所も見えて何やら「きんつば」のようで面白い。

バケツの中に積もった雪が「丸い」と発見できるのも心に余裕があるということでしょう。ただ、スッテンコロリンと転んで笑っておれるのも若いときだけ。高齢になってくると骨折して入院。それが元で「寝たきり」という事態になることも多々あり。くれぐれもご用心ご用心！

山陰がそんなに好きか今日も雪

ひとり幅の雪かき今日も三度する

ただひたすらに我と戦い雪を掻く

「あゝしんど」雪掻きの手で湯気が立つ
老妻はコタツの守りで雪掻かず

降る雪の勢いに負け引きこもり

雪しきりただ耐えること教えられ

雪道の足跡を暴露する

北国ほどではありませんが、山陰もときどき大雪が降ることがあります。玄関から道路までの雪かきだったら「ひとり幅」で充分。慣れない雪掻きに「あゝしんど」と手を休めることもしばしば。そのような力仕事はご主人に「お任せ！」と「コタツの守り」に専念するのも自衛策でしょう。

何ごとも前向きに捉えるのが賢い生き方。雪からは「忍耐

力を付けてもらっている」と考えれば愚痴も失せる、か？

地吹雪へところが痩せる過疎の森

地吹雪を逆手にとった村おこし

地吹雪ツアー葦は笑って見てるだけ

五感をも闇に眠らす雪のんの

雪おろし白い恐竜五頭産む

大雪で食べてしまった非常食

笑顔にはなかなかぬ雪だるま

地吹雪や豪雪というマイナスイメージを逆手にとった「地吹雪体験ツアー」を思いつくとは逞しい限り。訪日の外国人にも人気があつて、参加者は年々増え続けているとのこと。もちろん、それは「雪が珍しい」という人が楽しむだけのこととで地元の人にとっては「五感をも闇に眠らす」ほど。屋根から降ろした雪で恐竜が五頭も出来上がるとは、雪タルマ

だつてなかなか笑顔にはなれません。

門村 幸子

池澤 大鏡

石井 華蓮

福井 淑子

谷口回春子

松山 芳生

福士 慕情

稻見 則彦

高橋 洋子

佐藤 岳俊

堀 正和

寺井 青



(投句214名)
寒い寒いと言いなが。。。
ら過ぎて行く毎日です
が、暑いのもイヤ、寒
いのもイヤと思う自分
に閉口しています。

この冬は山茶花の花が例年に比べ、よ
り鮮やかに咲いていると思うのは私だけ
なのでしょいか。
蠟梅が咲き、紅梅白梅が咲き、桃の花
桜の花へと移る季節を、今年はずつたり
と眺めたいものです。
では、ナビです。

おばあさんになつてもキラキラネーム
(評) こんな名前の子、おばあさんになつ
たら大変と思いがち。でも、その時は回
りもみんなそうでも大丈夫。
私を狂わせました誘蛾灯
(評) 人それぞれ、自分にとっての(誘

大山市 金子美千代
神戸市 山口 光久

蛾灯)はさまでます。どうしても黙つ
て通りすぎることは出来ません。

生きている少しわかった気がするの
(評) 少しわかった頃に思うのは、何故
もう少し若い頃にわかなかつたのだろ
うということ。でも、遅くないよね。

知恵袋とうとう穴が開きました
(評) 穴が開いてしまいましたか、とう
とう。しかし、ご安心あれ、目に見えな
いものはすぐ復活しますので。

アルバムを開けて記憶に灯を点す
(評) 忘れていたことも、一つ記憶が戻
れば纏れている糸を解くようにスルス
といくもの。頭の体操にも良さそう。

爺さんの灰に魔法を掛けました
(評) 爺さん(への)灰だから、様々な味
わいがあります。灰を掛けられた花は咲
いたのかしら、それとも。。。。

まつすぐに立っているのを頼られる
(評) なるほど、と思わせてくれる一句
ですね。(まつすぐに立って)いられる人
少ないですもの。

キザ過ぎる言葉に自滅してしまっ
(評) 自分で言っておきながら照れてし

河内長野市 山岡富美子
大阪市 藤田 武人
大阪市 北山まみどり
黒石市 北山まみどり
和歌山市 古久保和子

まったのですね。エエカッコ出来ない正
直さが好ましいです。

遣り遂げるまでは真つ直ぐ走るだけ
(評) 何かを遣り遂げるまで、脳目もふ
らず突つ走る。そんな一途さには心惹か
れてしまいます。

泣く女宥める男雪しきり
(評) 以前これと同じ風景をみたことが
ありましたが現実というより何だかドラ
マのワンシーンかと思えました。

霊長類だけがしている不摂生
傘一本ふたりの罪は消えました
とうとうと灯をとますムンク展

鳩尾のいちばん底にある根雪
考えて考えぬいた結果です

妖精の杖の先から星くずが
極寒に阿弥陀如来も風邪を召す
三日後に腑に落ちましたあの皮肉
清濁を呑み込む広い父の海

八尾市 宮崎シマ子
三田市 谷口 修平
鳥取市 倉益 一瑤
西脇市 七反田順子
弘前市 高瀬 霜石
尼崎市 近兼 敦子
宝塚市 岸田 万彩
岡山市 永見 心咲
尾道市 大本 和子
羽曳野市 中川ひろ介

大阪市 田中ゆみ子
街灯になってしまった待ちぼうけ

池田市 太田 省三
雪の夜も宅配便が来てくれる

大阪市 古今堂蕉子
直立不動監視カメラは見えていない

米子市 八木 千代
邂逅の横顔照らすガスライト

河内長野市 辻村 ヒロ
シャンソンでも歌ってみたい袷立てて

札幌市 三浦 強一
街路灯六花の舞を輝かす

松山市 宮尾みのり
風花へやさしい私取り戻す

沖縄県 森山 文切
老人の集いに熱すぎる若さ

佐賀県 真島久美子
哀しみの底へ案内いたします

和歌山市 武本 碧
悩みなど遠心力で振り切ろう

三田市 堀 正和
誰だって明るい話好きなんだ

土佐清水市 辻内 次根
見送ってから三年の冬が来る

大阪市 江島谷勝弘
私たちのデートスポットいいでしょう

吹田市 山本希久子
幻想は幻想を生む春の雪

大阪市 岩崎 玲子
同居してアンテナひとつ増えました

橿原市 居谷真理子
今日からは一人で歩く靴の音

奈良市 中堀 優
心の奥覗けばほつと光り出す

鳥取市 山下 凱柳
花吹雪浴びて私は舞い上がる

米子市 生田 和之
艶っぽい歌を唄って夜帰る

奈良市 山本 昌代
笑みが舞うみんな寄り添う街あかり

弘前市 稲見 則彦
来る来ないやっぱり来ない冬小樽

豊中市 上出 修
トランプで占いますか近未来

大阪市 宇都満知子
風疹の予防注射をしましたか

羽曳野市 吉村久仁雄
ライザップ頑張り過ぎてやせ細る

豊中市 藤井 則彦
マリア様に変身をして欲しい妻

三田市 久保田千代
余生淡々影と仲良くして遊ぶ

三原市 鴨田 昭紀
旨そうな擬似餌に雑魚が寄ってくる

堺市 内藤 憲彦
ほどほどにやりくりをして雪の坂

上尾市 中村 伸子
慕われていると思っていた不覚

大阪市 小野 雅美
ポケットに両手を入れて歩くだけ

横浜市 菊地 政勝
焼芋屋過ぎ去り音のない世界

岡山県 小野美那子
半分こするには灯り暗過ぎる

千葉市 海老池 洋
割れるまで僕も輝くしゃぼん玉

鳥取市 前田 楓花
ライバルに灯りをともしやすい女

倉吉市 牧野 芳光
いたわりの言葉心にポツと点く

青森市 守田 啓子
九条にしんしんと降り積もる雪

四條畷市 吉岡 修
温暖化も心配いらんこの寒さ

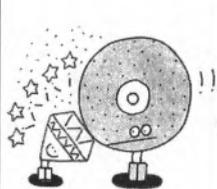
堺市 遠山 唯教
好きだからまだ待つことは馴れている

神戸市 富永 恭子
雪深深暖かいねと君が言う

富田林市 山野 寿之
出迎えば父豪雪の里の駅

高槻市 富田 美義
改元が我が生涯の潮時か

4月号発表 (2月15日締切)



(平本 勝彦 画)
柳菱に2句

本社 一月句会

◇二月七日(月)午後一時
アウイーナ大 阪

七草で正月疲れを癒す七日、新年句会は百二十四名(内投句者四名)の参加で開催。初出席は神戸市の近藤勝正さん。句会に先立ち、月間賞永久保持者の木本朱夏さん、初歩教室年間賞の原徳利さん、丹波美恵さん、近藤勝正さんが表彰され、本社句会皆出席の37名が主幹直筆の色紙のお祝いを受けた。

今月のお話は小島蘭幸主幹。題は「句碑の山」。今年も尾道千光寺に初詣され、路郎ご夫妻の句碑にも詣でられたお話から、広島県湯来しあわせ観音に、広島県川柳协会会员だった方の手作りの句碑が百基以上あること、水平線を見ている迷いさえている。蘭幸岡山県笠岡古城山川柳公園に、多くの川柳塔同人の句碑があること、

若葉キラキラここはまちがいなくこの世
完司

などを紹介され、お話を終えられた。(眞澄)

月間賞は山野寿之さん(富田林市)

(司会)眞理子・隆彦(脇取)千代・勝弘

(受付)和夫・舞夢(懸垂幕書墨耕治)

(清記)憲彦・勝弘

席題「楽」 安土 理恵 選

七草粥食べて胃袋楽にする
九歳が楽々囲碁のプロとなる
楽になる呪文なんとかなるだろう
考えている間に答え出るスマホ
心機一転新元号が楽しみだ
楽楽と平均寿命越えました
いくらかは杖に預けて楽になる
楽勝になつてほしいなタイガース
私の楽譜楽しい曲ばかり
年寄りはあるなポックリ願つてる
いくさせぬ楽な日本の防衛費
妻の掌の上だが左団扇です
楽しみは孫の笑顔と酒二合
わたしは楽器あな好み音で鳴く
楽ししたな仕上げのキメが粗すぎる
本心をいえば一人が楽でよい
背負うものみんな捨てたら楽な靴
楽しい事見付けて老いを遠ざける
失楽園いちども行ったことがない
お楽にと自分は正座崩さない
ふんわりと眠りを誘う二楽章
玉の輿も楽々乗れたわけでない
値を知つて蘊蓄の増す楽茶碗
楽しみはバズルがみんな解けたとき
戦後十年楽々生きた訳でない

木藤こみつ
吉村久仁雄
新家 完司
能勢 利子
米田 恭昌
堀 正和
居谷眞理子
江島谷勝弘
山岡富美子
太田としお
津守 柳伸
田中ゆみ子
伊達 郁夫
油谷 克己
安福 和夫
村上 直樹
山本希久子
石田ひろ子
久保田千代
中村 恵
能勢 良子
米田 恭昌
島田 誠一
平松かすみ
太田扶美代

日の丸と苦楽を共にした昭和
清貧を樂しむ境地粘り抜く
山口弘委智
山野 寿之

介護から解き放されて翔んでいる
ドア押せば世界のグルメある日本
虚勢を捨てなさい楽になりなさい
歳だから楽にしたらと諭される
電子レンジがチン気楽なおばあさん
手抜きしても妻の立場はゆるぎない
楽譜などないが母への鎮魂歌
稀勢の里楽日にみたい賜杯授与
楽をしたツケ体型はラ・フランス
楽々と老いの坂道越え浄土
佳

幸せに生きる楽ではないけれど
生きること仕事にすればまた楽し
竹トンボ気楽に翔んで行ったきり
楽な方楽な方へと風が呼ぶ
諦めを悟りにかえて楽に生き
人

居谷眞理子
前 たもつ
木本 朱夏
片岡 加代
柿花 和夫

楽しくてたまらぬように花は咲く
地
西出 楓楽

「災」が転じて今年「楽」になるように
天
新家 完司

一度しかない人生を楽しまん
軸
大内 朝子

楽ばかり食べ減量に泣いている

兼題「和やか」

柿花 和夫 選

団欒にスマホもなくて笑い声
 米朝の和やかムード白昼夢
 和やかに7度お出まし天皇家
 和やかな気分させる昼の月
 おめでとう心が和むいい言葉
 和やかに笑い上戸が輪の中に
 祝箸変らず記すありがたさ
 それはそれは貴方もカラケーなんですか
 こんにははだけで和ますお人柄
 くい呑みを手にしただけで和む席
 和やかな句会始ちゃん舐めながら
 和やかな祝勝会にある嫉妬
 和やかに言うてはるけど芯がある
 角とれたお国訛りに場が和む
 添え書きの一句ほのぼの年賀状
 和やかな国は地球のどの辺り
 日向ほこ猫もいっしょに読む賀状
 百歳まで生きると通夜も和やかに
 遺産相続和やかなるととても無理
 赤ちゃんがひとり増えたぞお正月
 僕が来るまでは和んでいた茶の間
 和やかに探し朝刊読んでいる
 和やかに散会をして飲み足らず
 和やかに送って欲しい家族葬
 なごやかな雁首並ぶ露天風呂

伏見 雅明
 清水 英旺
 清水久美子
 指宿千枝子
 中川ひろ介
 鴨谷瑠美子
 山根 妙子
 島田 握夢
 上田 和宏
 安土 理恵
 平松かすみ
 長高 俊雄
 大内 朝子
 緒方美津子
 島田 誠一
 平松かすみ
 澤井 敏治
 藤井 則彦
 太田としお
 細川 花門
 太田扶美代
 川端 六点
 萩原 狸月
 中岡千代美
 松岡 篤

年末年始炬燵囲んで四世代
 菓子を買うアマタをしてるティータイム
 和やかに話し合ってる元夫婦
 同郷と知り和やかな酒となり
 母さんの笑顔ほっこり水いらす
 ノーサイドエール交歓して握手
 ありがとう七草粥に胃が和む
 和やかな余生で進む物忘れ
 和やかにロビー外交核輸出
 和やかなお顔に宿す辛い過去
 集会所老人たちの笑い声
 和やかなムードに仮面付けかえる

磯島福貴子
 山田 耕治
 鈴木いさお
 升成 好
 松原 寿子
 村田 博
 前田 紀雄
 山岡富美子
 澤井 敏治
 中島 一彌
 居谷真理子
 藤村 亜成

炬燵の中で和ませておく足の裏
 家族一人増え和やかな祝箸
 夫婦喧嘩やめさせたのは子の寝顔
 桁外れの音痴がひとり居て和む
 和やかなムードを潰すのが私
 人

木藤こみつ
 長浜 美籠
 松岡 篤
 太田扶美代
 小野 雅美
 中村 恵

和やかになるまでそばに居てあげる
 地 グループホーム時々漏れる笑い声
 天 お茶入りましたと妻が呼ぶ三時
 軸 戎っさんまでは和やかナニワの灯

丹後屋 肇
 鈴木 栄子

兼題「ステップ」

初代 正彦 選

恋のステップ思い通りに進まない
 ステップの辺りで恋が破裂する
 フルムーンステップに立ちハイポーズ
 よいしょとステップアップしてるとこ
 スロースロー偶にキックも八十路
 B面でステップアップ狙ってる
 クイックターンめまいで後が踊れない
 まだ若いステップアップ血が滾る
 エレガントワルツが似合う妻の舞
 終活のワンスステップに遺影撮る
 足取り重い上がりますの上消費税
 まず捨てるこれが終活第一歩
 古希の坂次のステップ踏み出せぬ
 ステップはブルース陶酔の境地
 麦踏み歩調もピタリ老夫婦
 先ずビール次はお湯割り締めは酒
 思い切る次の一歩が踏み出せず
 いざ万博ポップステップする浪花
 知らぬまに歩幅に歳が出てしまい
 二段ずつそば駆け上がる若い足
 ステップアップ目指して古稀のABC
 軽やかにステップ踏んでヘイマンポ
 開き直ってステップ軽く踏む余生
 身の丈に合ったステップ歩幅決め
 ステップが弾むスタートはこれから

福田 好文
 清水久美子
 山田 耕治
 安土 理恵
 村上 直樹
 永田 紀恵
 大久保真澄
 飛永ふりこ
 福田 正彦
 藤原 大子
 太田としお
 片山かずお
 佐々木満作
 米澤 徹子
 中島 一彌
 村田 博
 長高 俊雄
 上田 和宏
 緒方美津子
 山根 妙子
 木本 朱夏
 鈴木いさお
 山本希久子
 山口弘委智
 立蔵 信子

ステップを踏むと愉快になるいのち
デイの日はステップ軽くオシヤレして
猪突猛進ステップなんて似合わない
手を取ってフォークダンスの喜寿傘寿

軽やかに揃うステップ初詣で
まだ米寿ホップステップ白寿まで
まなざしは遥かに一步また一步
吹っ切れて足どり軽く雲に乗る

ステップが逆臨月の披露宴
平成から次へステップまだ達者
人生百年傘寿卒寿は通過点
酔うたなら手摺りを持つと転ぶから

佳
ステップアツ魔法に近づくとおばあさん
一步目の感動孫もリハビリも
ステップも軽やか終着に向かう
玉砂利を心静かに両陛下下

人
一足飛び鋭い眼する輩ちゃん
踏み出せば周りが君を引き立てる
天
若い芽のステップ世界駆け上がる石田 隆彦

軸
新風に老いのステップ踏み惑う

兼題 「仕事」 古今堂蕉子 選

お仕事に行つて来ますと初句会
田畑を売って大学出しニート
春を売る以外何でもした仕事
汚物処理とともやりがいある仕事
過労死を招いた社訓罪深い
フィールドを持ってぬ非正規に曇る空
プライドの欠片で転ぶ職探し
大卒に教え大卒より安い
仕事大好き仕事がないのです
妻よりも似合い始めたエプロンが
大仕事になった信号渡るのも
僕は朝からゴミ出しに風呂掃除
食べるのが仕事と言われ回復期
作業着でペンキ屋さんとすぐ判り
仕事より先に覚えた酒煙草
何よりも本好き司書になりました
給料日あんばんみやげにした歴史
仕事のはなし一切なしの呑み仲間
嬉しいね八十路過ぎにもある仕事
仕事始め円安株価ダブル安
タクト振る妻母嫁を使い分け
しっかりと仕事します泣く赤児
落ちてなおいのちつないでいく木の葉
象徴の役目果たしたい笑顔
年年年始稼ぎ時です露店です

山本 昌代
内田志津子
松原 寿子
北野 哲男
北野 柳伸
津守 哲男
北野 哲男
居谷真理子
渡辺 富子
村上 直樹
宮崎シマ子
坂上 淳司
江島谷勝弘

お仕事に行つて来ますと初句会
田畑を売って大学出しニート
春を売る以外何でもした仕事
汚物処理とともやりがいある仕事
過労死を招いた社訓罪深い
フィールドを持ってぬ非正規に曇る空
プライドの欠片で転ぶ職探し
大卒に教え大卒より安い
仕事大好き仕事がないのです
妻よりも似合い始めたエプロンが
大仕事になった信号渡るのも
僕は朝からゴミ出しに風呂掃除
食べるのが仕事と言われ回復期
作業着でペンキ屋さんとすぐ判り
仕事より先に覚えた酒煙草
何よりも本好き司書になりました
給料日あんばんみやげにした歴史
仕事のはなし一切なしの呑み仲間
嬉しいね八十路過ぎにもある仕事
仕事始め円安株価ダブル安
タクト振る妻母嫁を使い分け
しっかりと仕事します泣く赤児
落ちてなおいのちつないでいく木の葉
象徴の役目果たしたい笑顔
年年年始稼ぎ時です露店です

鈴木いさお
福田 好文
清水久美子
津守 柳伸
平賀 国和
奥澤洋次郎
島田 誠一
島田 握夢
小島 蘭幸
敏森 廣光
小島 蘭幸

堀 正和
矢倉 五月
平松かすみ
太田扶美代
片岡 加代
北野 哲男
藤村 亜成
川端 一步
中川ひろ介
上田ひとみ
石田ひろ子
渡辺 富子
大内 朝子
宇都満知子

野良仕事趣味と言いつ切るおばあちゃん
名刺だす同級生に距離を置く
変人と言われた人のいい仕事
この仕事を選んでもくれたのは私
生きているこれが仕事と年金者
生きること死ぬ事人生の大仕事
天職と決めたレールだよく磨く
下町のロケットを飲む大宇宙
麻雀もゴルフも仕事だと夫
働き方改革まずは議員から
定年後抜てきされて孫の守り
宮大工目指し選んだ弟子の道

石田 隆彦
山岡富美子
米田 恭昌
居谷真理子
木嶋 盛隆
山本希久子
升成 好
山野 寿之
村上 玄也
内藤 憲彦
松岡 篤
坂上 淳司

佳
シーズンオフは金魚屋してるサンタさん
勤勉の風土にA Iの狼煙
仕事始め見なくなったな初荷旗
仕事だと思つと辛くなる仕事
仕事柄風邪をひけない警察犬
笑つたら首になります葬式屋
地
阪神よファンが喜ぶ仕事して
天
七十の無職十でもプロの棋士
軸
定年のない主婦業という苦さ

木藤こみつ
島田 誠一
宇都満知子
片山かずお
中島 一彌

太田としお
降幡 弘美
内藤 憲彦

軸
定年のない主婦業という苦さ

天
七十の無職十でもプロの棋士

地
阪神よファンが喜ぶ仕事して

人
笑つたら首になります葬式屋

人
仕事柄風邪をひけない警察犬

仕事だと思つと辛くなる仕事
仕事始め見なくなったな初荷旗
勤勉の風土にA Iの狼煙
シーズンオフは金魚屋してるサンタさん

兼題 「渡る」 山本希久子 選

締切りが続く綱渡りが続く
 三途の川渡る元気を残しとく
 元氣よく余生を渡る趣味一つ
 煽やかに炎の橋を渡り切る
 失恋した噂はばつと知れ渡る
 渡り鳥家族揃っているかしら
 借金も財産にして世を渡る
 凍原に鶴のひと声冴え渡る
 朱雀大路渡るむらさき色の風
 昭和史を語る安治川の渡し船
 おばさんからおばあさんへは一歩き
 渡り切る前に点滅虹の橋
 いずれ月いずれ火星へ渡り鳥
 淀川を渡ればすでに旅気分
 未知の橋渡れば出会う小宇宙
 男です火の橋渡ることもある
 四つん這いしても渡した血のバトン
 激流を渡る男の二枚舌
 初場所の春渡らせる触れ太鼓
 向こうの岸にハグする人が待っている
 世渡りのとても上手なうちの猫
 島はるか猪が一頭海渡る
 世渡りの上手い男の背が寒い
 知っていますかアンタが渡る川の幅
 生きるとは何万キロの渡り鳥

小島 蘭幸
 斎藤 隆浩
 上山 堅坊
 小野 雅美
 村上 玄也
 柴本ばつは
 中川ひろ介
 中川ひろ介
 片岡 加代
 山崎 武彦
 大久保眞澄
 内田志津子
 村上 直樹
 長高 俊雄
 前 たもつ
 米田 恭昌
 島田 誠一
 山野 寿之
 内藤 憲彦
 矢倉 五月
 村上 玄也
 平賀 国和
 渡辺 富子
 山本 昌代
 三宅 保州

平成を惜しむ寒波の御神渡り
 首の座りなど言いつつ赤チャンを渡し
 ルビコンを渡る男の背が眩し
 後継に橋渡しする軽い肩
 気骨ある若者みんな海渡る
 断捨離を終えて心も晴れ渡り
 盲導犬信じて渡る交叉点
 パスポート要らぬ自由な渡り鳥
 三途の川ビタパのビで渡りきる
 橋渡る昭和平成新元号
 飛び立てば振り返らない渡り鳥
 八十が昇って降りる歩道橋

佳

十連休渡り切るには金が要る
 川柳を盾に閻魔と渡り合う
 あやとりの橋で昔が行き暮れる
 つり橋の途中女を取り戻す
 仮の世を渡る夢など食べながら

人

病院の渡り廊下にある戦
 昭和平成渡り歩いてきた素足
 天

渡り終えたところはきつと花畑
 軸

村上新年
 島田 直樹
 西出 楓葉
 島田 誠一
 村田 博
 藤井 則彦
 油谷 克己
 太田としお
 木藤こみつ
 山岡富美子
 藤井 宏造
 居谷真理子
 澤井 敏治
 米田 恭昌
 中村 恵
 川端 六六
 鈴木いさお
 木本 朱夏
 片岡 加代
 太田扶美代

兼題 「輝く」 新家 完司 選

川柳塔名のバトン一〇〇号
 特別なこと出来ないが皆勤賞
 五七五で輝きだした濡れ落葉
 見ましたか今年のダイヤモンド富士
 金箔が入り輝く初春の酒
 新元号輝く未来連れてきて
 進む産声眩し新生児
 生徒手帳が輝いていた春だった
 輝いた人が集まるOB会
 輝いた頃の名刺を残している
 好きですと一行だけのラブレター
 萩の街歴史と光る夏みかん
 丸刈の湯気の輝く寒稽古
 水上に輝き滑る蝶よ火よ
 にこにこプロ棋士になる少女の眼
 輝いてる月の裏まで宇宙軍
 光ってはいませんが実はメッキです
 ラブミーテンドーあの頃は光ってた
 生き生きと古稀残照の中に立つ
 ハズキルーベちよつぱり余生光らせる
 金魚鉢輝いてるは命の芽
 髭面の汗が輝く被災の地
 我が妻は光り輝くものが好き
 幸せを見せびらかしてくすり指
 カルチャーへ行つて輝き出した妻

前田 紀雄
 坂 裕之
 能勢 利子
 片岡 加代
 油谷 克己
 山下 純子
 柴本ばつは
 木本 朱夏
 福田 好文
 中島 一彌
 田中ゆみ子
 森 廣子
 澤井 敏治
 水野 黒鬼
 森田 旅人
 内藤 憲彦
 村上 玄也
 中岡千代美
 木本 朱夏
 渡辺 富子
 森田 旅人
 坂上 淳司
 敏森 廣光
 中岡千代美
 三宅 保州

ダイヤより私の瞳きれいでしょ
歩き方からして彼が出来たと判る
輝いていますね介護すんだのね
おばちゃん達の訛り輝くローカル線
目指すものあって発光体になる
元華族のオーラ詐欺に遭いました
落ち込めば酒輝けばもつと酒
地場野菜誇り輝く道の駅
八十路でもネイルウイックそして恋
ばあちゃんも派手なルーシユにつけまつけ
おじいさんでも散髪をしたところ
赤ちゃんは金 老人はいぶし銀
輝いていた横綱になるまでは

佳

輝き方少うし違う二位二位
輝いた証明書ですニキビ痕
ほらごらんこの世は輝いているよ
便利な世総入れ歯でも輝ける
変人もちゃんと輝く平和な世

人

キラキラキラキラわたくしの昭和
少子化に光り輝く妊婦さん

地

上田ひとみ
島田 握夢
上野多恵子
坂上 淳司
山岡富美子
島田 握夢
吉村久仁雄
米田 恭昌
山下 純子
今井万紗子
山田 耕治
大久保眞澄
鈴木いさお

太田扶美代
村田 博
居谷真理子
松岡 篤
上山 堅坊

小島 蘭幸
藤井 宏造

天

太陽が窓いっぱい退院日

軸

山野 寿之

僕だって酒場に行けばピッカピカ

句会 燦 燦

十二月句会を読む 弘 津 秋の子

ほつとする川柳添えてあるコラム
ハツとする川柳に出会うと心が引き締まる。フシギな川柳に出会うと首がひん曲がる。ほつとする川柳はよく眠れる。

パリケード破ってパリは燃えている 木本 朱夏

「パリは燃えているか」受話器からヒットラーの声が響き渡る。ドイツのパリ占領時代の映画のラストシーンである。その時代と今のパリの市民デモの不穏な日々が重なる一句。今夜は眠れそうにない。

離婚して卒婚なんて言うらしい 荻野 浩子

河野景子さんが卒婚という言葉を使つてシングルに戻られた。違和感を覚えるのは姑世代であるからだろうか。微妙な心理を「なんて言うらしい」と惚けて味な一句である。

新元号へすでに猪向いている 松原 寿子

祖父母は明治、両親は大正、親子は昭和、孫は平成生まれ。猪は、そんな感慨もなく五月からの新元号へ向きを変えている。

祭り笛みんな若手にしてしまふ 山岡富美子

村祭りの担ぎ手も白髪交じりの人がふえてきた。勿論町内では若手である。「皆の衆、気張りなはれ！」というご先祖様の声が聞こえてくるようだ。

元氣です死ねないのではないかしら 片山かずお

大正生まれの友からの呼び出しのベルが鳴る。「達者です。老人になりきれませせん」達筆の葉書が届く。死は年齢に関係なくやってくるものらしいと悟るこの頃である。

不滅だと叫ぶセイタカアワダチソウ 新家 完司

好きな事(川柳)があり好きな友(柳友)がいる奴は幸せ者である。草っ原を完司少年が走り抜けて行く。



樋口由紀子 選

無い事に出来ぬと原爆資料館
 ポイントは十倍無駄も買われる
 地図上に載ってなかった山がある
 お辞儀してなかったことにしています
 雲ひとつない青空の無一文
 ここにあった眼鏡も夢も無い
 恋愛運がないと泣いてる招き猫
 悩みなど無いけど寒い12月
 ポケットの中に見当たらない港
 575から見たことのない世界地図
 木枯らしの無料体験実施中
 無茶苦茶をして豪邸に住んでいる
 無いものを数えていると蓋があく
 だるまにはいっこうに目が入らない
 張り合いが無くて倒れている看板
 ライバルの手に無糖の缶コーヒー
 友達がなくて綿毛になっている
 注文を言えるほどには髪がない
 父さんはもう短針の懐中時計
 家系には選手も歌手も出てません
 無感動 無精 無気力 無収入
 便箋が無いので砂に書いてきた
 探し物七回探し無いとする
 サーマンのムニエルになる蝦蟇
 仏壇に頼んでみても変化なし
 そんな子に産んだ覚えは無いと言う
 強行採決 起立の人に顔が無い
 何も無い空を指差す爆撃機
 無理数になれなかったからドーナツ
 ひげの無いサンタが本物のサンタ
 ゼロを掛けみんな無かったことにする
 再放送 もうない街と亡き人と
 佳5 何も無いけれど綺麗な冷蔵庫
 佳4 無い無いと言ってるうちに月が出る
 佳3 何も無い休みたす丸を描く
 佳2 エブロンが無くて惣菜買ってくる
 佳1 聡明な額を隠す髪がない
 人 曇天で元気が出ないマーブルチョコ
 地 キリンにはたぶん返事がきていない
 天 コロケはないし靴は濡れているし

高瀬 霜石 選

無い無い無いづくしだけでも生きられる キントロー
 ポイントは十倍無駄も買われる 松ちゃん
 心にも無いことを言うベンである 西口いわゑ
 今日だけは無口で通すはずだった 直井 哲生
 お辞儀してなかったことにしています 立花 穂香
 雲ひとつない青空の無一文 坂本 星雨
 もやしにもワタシにもないスター性 菊池 文徳
 出口のないトラックを走ってる 菊池 文徳
 ないないと言ってる人にあるお金 森川 雅史
 むけっせきだけがとりえのわたしですう 杏 子
 見せられぬアンパンマンの朝帰り 森山 盛桜
 よく耐えた今日も無冠の足の裏 賢 石
 抜け目無い人でなんだかつまらない ホット射て
 可能性無いではないと評論家 おかのみつる
 否定するだけじゃ何にも生まれない 素 人
 だるまにはいっこうに目が入らない 細田 陽三
 スマホなど持たぬゆったりした暮らし 橋倉久美子
 風のないところで翼広げてる 森野 ハナ
 若いころ持っていました腹時計 中村 肇
 肩書が取れて名刺は保険証 上平 祥
 寒空にどこへ消えたか預金利子 副井 裕
 もう一つほしかつたいちご大福 小池 徹
 無い知恵を絞って今日も生きている 葱 坊 主
 便箋が無いので砂に書いてきた 板垣 孝志
 炎上のログみんが無責任 佐々木弘子
 3000億還元をして上げる税 フーマー
 皆かぼちゃ恐れることはなにも無い岸井 ふ さ え
 つかもうとしても前髪ありません 三善ヒロシ
 無い知恵を絞り出すのもボケ防止 新家 完司
 もう何も無いと広げた手が笑う ちゃくし
 マイナスはいかんとにかくゼロにする 青砥たかこ
 また無くなった高齢者用のサービス 城崎 れい
 佳5 風船にときめく頃は過ぎました 水木 星羅
 佳4 コロケはないし靴は濡れているし 一 葉
 佳3 国民に寄り添うことは無い総理 塚 山 繁
 佳2 ゼロを掛けみんな無かったことにする 水 た ま り
 佳1 寅さんがさっきまでいた無人駅 柴田比呂志
 人 故郷のない人ばかり好きになる 朝妻久美子
 地 牙が無いことは誰にも言っていない 尾崎 良仁
 天 星空が綺麗だ明日も職探し 海賊 芳山

投句方法 【川柳塔】を検索→【川柳塔 WEB句会】をクリック

senryutou.net

(サイト管理 森山文切)

たしなみ

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願
いたします。
編集部

川柳塔みちのく(青森) 稲見 則彦報

居てくれるあなたそのまま宝物
腕白がいの一歩に泣く通夜
寂しくて美空ひばりの歌に泣く
婚礼の祝詞三番目の御仁
プロポーズ蛇足無用と抱き寄せる
物忘れよりも寂しい遠い耳
両親の蛇足の作は僕である
川柳で出会った人が宝物
寂しくてイヤがる猫を抱き寄せる
付加価値か蛇足か妻が紅を塗る
凍れる夜寂しさも煮るじゃっば汁
散る時はひと声かけて下さいね
ダメ押しが無ければとでもいい男
お宝は鑑定せずに愛でるべし
神棚に発表までは当り籤

風来坊 慕情 重虎 則彦 洋子 龍馬 規子 美鈴 隆樹 初枝 吹喜 柳子 孝子 一呑

あの世でも邪魔にされるであろう僕
小さな子最後の餞をばあちゃんに
美人には不要と書いた美人の湯
わたくしの宝は一つこの命
過去形が宝物へと変わり行く
じっと見る愛犬の目にほだされて
わたくしの蓋は少うしずれている
殻を脱ぎ朱を着て傘寿街に出る
晩酌は少しと医者に言っておく
割り箸のそろそろ割れたい定年期
恋という文字も遠のく頭頂部
計略を総て知ってる土踏ます
ユーモアがてんこ盛りだねキリリ眉

はびきの市民川柳会(大阪) 中川ひろ介報

匙投げて一つの未来崩れゆく
面目躍如ニホンの若いアスリート
我が家では父の毒味に銀の匙
医学部の入試にむごい匙加減
干支は猪まつすぐ好きの真人間
匙投げた医者もびっくりする元氣
面目がいじめ対策後手にする
タイガースもう投げたる匙ありまへん
人生に匙を投げたら負けですよ
面目なし国の約束ふみにじり

雄太 みつこ 壽峰 ちづる 欣之 いさお 大子 まつお 清 正義

匙一杯の水にも屈す避難民
面目を保っていますかこの国は
亀は亀の面目あつて甲羅干す
トランプはあかんとみんな匙を投げ
紅一点面目潰す水田町
妻よゆるせ面目ないが又左遷
いつかまた世話になりますお匙さん
会長に匙投げる日産の檄
ちよつと顔出して面目市長さん
匙の先あれこれ乗せて離乳食
母姪嫁みんないのしし気が強い
子のしつけ匙を投げずに母の愛
面目は捨てて再起の靴を履く
初詣飲んで浮かれる年男

和歌山三幸川柳会 西川 千鶴報

難民に申しわけない食べ残し
啄木に会える気がする上野駅
シャワー全開悪夢流して立ち直る
鬱の日はちよつと気晴らしイチゴパフェ
おいしいと言わぬが憎めない夫
寂しくてうまい話に蹴躓く
丸洗いた悲しみが乾かない
ちよつとだけお邪魔しますと上がりこむ
若輩を洗う六B尖らせて

保州 和子 当代 ひろ子 義雄 起世子 俣子 よしこ 幹子

方言に情景深くなる民話
歳月が洗い流してくれた罪
ピーヒョロロおもしろい話追いかける
出る幕がなくて節穴のぞいてる
こだわりを洗い流して輪にとける
半分こして美味しさが倍になる
方言がぼろり素性が割れました
無理矢理に餌を押し込まれるガチョウ
ちよつとした心の隙に負けいくさ
煩惱をひらひらさせてから軽い
松茸を手にしてみたがまた戻す
あほかいな言われてさほど気にもせず
美食家もやっぱり母の味が好き
方言をつれて帰って来た息子
ちよつと油断積木倒しのごと連鎖
臆病でおいしい話乗れません
済んだこと洗い流して青い空
おいしくてとつても為になる話
方言はおらが国さじや標準語
磯洗う波が失意に喝入れる
ざぶざぶと心洗ってくれた母
影までも洗いたくなる昨日今日
いい話聞いて洗った目のうろこ
七輪でサンマを焼いて唾が出る
花が咲く種をちよつとは残しとく
ちよつとしたその一言が枷になる

純子 富香 碧子 絹子 菜摘 智三 次根 日出男 准一 知香 俊介 一雄 宏枝 美枝子 まき 美羽 昭枝 八重子 昇 敏照 あき子 かず子 義泰 康則 弘子 千鶴

竹原川柳会(広島) 古田 太虚報

嫁ぐ娘へこつそり持たす母の愛
ひとり聴く深夜便から名を呼ばれ
こつそりが笑顔に変わる隠し事
こつそりと見たいあの世のパラダイス
シュレッターこつそり過去を刻む音
こつそりは不倫公表は純愛
我慢せずグーチョキパーの世界観
よく生きた我慢辛抱つかい棒に
一度言ったら引かぬ男の瘦せ我慢
よう我慢して下さったお姑さん
我慢する度に仮面が色あせる
祭り囃子と亡母とちらし寿司
最高だ選手と遊ぶ感謝祭
村祭りやつと障子を張り終える
注連縄を作る当番秋陽差す
過疎となり祭り太鼓が響かない
八十歳祭り囃子は今も好き
住吉さんが御縁二人の物語り
体脂肪成熟させて七十五
足裏もお手入れクリームおすそわけ
徳は重く神に感謝の汗光る
サントさん信じいい子のフリをする
カニさんはちよきちよきピースしてあるく
寛 敬子 千代美 節生 夢香 栄香 宣之 一徳 昭紀 幸子 鬼焼 蘭幸 比呂子 慶子 笑子 京子 輝恵 汎美 淑子 厚子 歩美 半徳 史子 三歳ちか

米田 恭昌 選

喜怒哀楽隠し切れない狭い家
赤ちゃんの笑顔で和むエレベーター
心の窓時には開けて風通す
山を縫う線路季節の顔をする
何もかも包む男の広い胸
平成の二字有終の美へ正座
折り曲げたページに深い意味がある
抱いてきた夢は柵に敷いて寝る
喜怒哀楽みな包み込む太腹
三歩ほど下がって影を蹴っている
久仁雄 篤 福貴子 一平 寿之 欣之 郁夫 時雄 無限 すみ子

佳句地十選

(1月号から)

森 茜 選

米びつの底を覗いてから決める
あふれ出す皇后様の胸の内
格子戸にしの笛もれる町に住む
本心を聞けばほとんど宇宙人
釣れまじしたさあ背開きだ天日干し
本心がわからないからまだ夫婦
世渡りの鉄人流さず流されず
時の流れああシンブルで凜として
平凡の非凡に気付く日向ぼこ
軒先をまるやかにする柿すだれ
和子 峰朗 輝恵 真佐子 敬二 亜成 淑子 寿之 麦青

奥深く喜寿で悟れぬ般若経
奥の手があるので勝負焦らない
両陛下御役目果たし茜雲
余裕綽綽卒寿の父の万歩計

びったりとついてトツの隙ねらう
美しく迫る涙に絆される
風花がソフトに包む遍路傘
十二支の戌から亥へと迫る暮

昔ソフト今ソプラノで起こす妻
パソコンソフト鉄条網が張つてある
晩節を生きるソフトが見つからず
今にしてうかうか生きた日を惜しむ

財布にはまだ万札がある余裕
相手より先にお辞儀をする余裕
ちよつといひ話を朝に読んでおく
迫られてあわやの間際夢が醒め

過去咲かす未来に蓄持てるよう
レジかごに余裕のなさが透けている
朝夕の冷えが関節いじめよる
年毎に飾にかける年賀状

小春日和に菩薩のような母の笑み
安眠を呉れる布団は天日干し
奥の手は入院という隠れ蓑
ふところの余裕をひよいと社会鍋

真つ新の命を抱いているソフト
帰るには中途半端と飲み仲間

寛昭
満作
千恵子
志華子
修

空仰ぎ皇帝タリア見る余裕
胃袋はいつも余裕の空きがある
あと10分3曲くらい歌えそう
日産のコストカット1首切られ

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西 茶子報

「鬼太郎」コナン」空港名です鳥取県
乾杯の雰囲気読む座の空気
宝くじ当たつても僕黙つて
耳元の甘い言葉によろよろと

よろよろと歩きながらも生きてやる
危めるよりパーゲンで生かす年寄りを
パーゲンで買った商品ゴミとなる
乾杯を繰り返しつつ生きている

豪邸もパーゲンになる過疎の村
五輪後に万博も来る乾杯だ
カズラ橋よろよろ美女がしがみつく
前かがみよろよろすなと妻の指示

次々と不正疑惑のパーゲンだ
毒きのこ当たらぬ腹地獄腹
連番かバラにするかで夫婦揉め
ジャンボくじいちかばちかと夢を買う

よろよろとしてはならぬと四股を踏む
乾杯に慣れたグラスの欠伸聞く
プライドを捨てパーゲンへ走り込む

堅坊
朝子
野鶴
義昭
博

杵香
榮子
勝弘
正
弘子
実満
好幸
文道
草文
茶子
孔美子
義明
小鹿
すみれ
裕

重忠
照彦
盛桜
蟹郎
恒

かおる
みさ子
英子
京

宝くじに残さず使う運と金
川柳大阪 山崎 珠生報
じつくりと朝まで飲む夜は長い
じつくりと待とう涙は乾くから
迫られても迫りもしないで日が暮れる
じつくりと考えたけどこの程度
じつくりと寝が欲しい相撲界
秘訣はねじつくりコトコト煮込むこと
窓全開今日も笑顔で風通す
雑草が踏まれて出来る通り道
素通りをさせてはくれぬ赤提灯
もの静かな人だが筋は通しはる
平和賞決意の固い女性へと
揺れにゆれやつと決意の志
そこまでの決意があれば任せよう
考えてモノ言わぬから敵が増え
変わらない決意に言葉改める
貧しても友は売らぬという決意
認知症さすると笑顔お姑さん
胎動へやさしくママは子をさする
さするうち可愛い寝顔くれる孫
母さする痛いの飛ばすおまじない
寝る前に毎日感謝足さする
円満でさすりさすられラブラブよ
日本酒が地球のはてで愛される

満
いさお
雅美
志津子
ゆみ子
紀雄
珠生
万紗子
満知子
俊雄
まつお
堅坊
朝子
克己
勝弘
美籠
一步
芳香
賢子
福貴子
かよこ
美世子
和
司

川柳茶ばしら(愛知)

関本かつ子

マネキンに半額の服着せ替える

雅美

風に舞う枯れ葉が札に化けて欲し

まみ子

手を振ったあの時母の涙見た

三樹夫

化け方の下手な議員の脂汗

週行

泣いている場合ではない笑っちゃお

美千代

先生の顔見ただけで直りそう

かつ子

川柳同友会みらい(鳥取)吉田

陽子

笑わせて笑わせて撮る七五三

みどり

小春日和誰も見でない二人乗り

紫音

自分へのご褒美何て恥ずかしい

洋子

ワサビ抜き屈辱味になっている

葵

ああそうか思い込み消す痛快さ

安子

鍋しても話題弾まぬ老夫婦

一眸

自分だけ正しく生きているつもり

健二郎

拳から奮い立たせてもらおう日々

菜美

もう歳と言わずにおこう今日からは

章子

老いた脳寄せては返す記憶力

美恵子

言葉だけなら何とでも言えるけど

真帆

情報に振り回されて迷子です

亜矢

亡母さんの教えは稲の穂のように

八重

少しだけ弱音吐いてもいいですか

れい子

久々の電話セールスマンでした

海希

破れ障子に夢一つ貼っておく

華蓮

草紅葉きれい写しに誰も来ぬ

陽子

何度かの怪我で人間らしくなる

ダン吉

スポンジになって愚痴など聞いてやる

心咲

乱れ髪誰も振り向いてはくれぬ

游子

病院へ枯れ葉一枚抱いて行く

公弘

わかあゆ川柳会(鳥根) 松本はるみ

頭からドヤされている小商人

昌

頭から指示がなかなか口に出ず

安子

少しでも人の情けのあたたかさ

はるみ

さりげないジョークへ少しある本音

かつ子

人は人地味にコツコツマイペース

恵美子

コツコツと転倒予防鍛えてる

ハル子

川柳ささやま(兵庫) 北澤 稠民

一年の感謝を伝える花手桶

かほる

円満で笑う暮らしも髪が減る

哲男

知らないがみんな一人になってゆく

稠民

小休止起死回生の策を練る

真由

生きるわよ酒と君が居るかぎり

さゆ子

満足を感じる暮しい家族

幸子

冷凍の食品チンして暮らしてる

善輔

留守しても私いつもの田にいます

剛

健康でお金もほしい欲ばりだ

重男

猛暑の頃が思い出され衣替え

喜弘

人生は歌って笑って得る健康

良子

庭持たず四季の移ろい切り花で
花も風も人生行路よくぞ生き

照代
美智子

川柳塔わかやま吟社 小谷 小雪

キリストもシャカも崇める年の暮れ

日出男

曲折も十二月へと走り込む

あきこ

十二月来る年想い四股を踏む

ほのか

右見ても左を見ても十二月

大輪

師走でものんびり炬燵年の功

よしこ

角度変えて見れば反旗翻る

寿子

あなたの見える角度にいつも席をとる

紀久子

朝六時出社と決めている時短

准一

縮んでも再生の度強くなる

まさみ

吊るし柿縮んで更に甘くなり

秀子

進むため尺とり虫も縮みます

ちづこ

わかってるやろうなと桐喝をされる

知香

あなたにもいつか当たりがくるように

小雪

白い糸何時か染めたい赤い色

京子

ちぎれ雲ひとりぼっちにいつか慣れ

紀子

今がある母に何時かを果たされず

富美子

いつからか鍵のかかった子供部屋

保州

何時からか息子に負んぶされている

徑子

岩美川柳会(鳥取) 山下 節子

草笛を鳴らすと亡母が肩に乗る

一瑤

ごめんねと言えば距離など直ぐ縮む

一粹

ベルが鳴るもうあと五分眠らせて
アオウミガメ乗るコバンザメ重箱に
重箱に娘の愛がてんこ盛り
分別が越させてくれぬ距離恨む
信じた道距離はどうあれ突つ走る
距離を置き暮して見えた幸もある
満天の星空掴む距離に住む
運動会重箱囲み大声援
好きだから大好きだから距離を置く
補聴器ははずし妻との距離を少し置く
重箱の底に小判などはない
いじわるな神重箱に詰めてやる
着信音鳴ってドキドキ深夜二時
おせちだけ重箱使う年の暮れ
重箱の角に涙と汗の染み
鯛が来て呼び鈴鳴らす釣り上げる
一仕事正午の曲が鳴り出した

南大阪川柳会

松岡

天翔 一平 重忠 美恵子 たぬ 菖子 幸安 敏子 雅女 振作 彰夫 千代 凱柳 弘六 茶子 蟹郎 節子

左利き臍の位置まで曲がつる
珍獣か息子寝起きの頭の毛
珍客を満足させたナポレオン
立ち呑み屋に並ぶ頼祭森伊蔵
そんじょそこらにないと胆石見せられる
珍しく大声出したブレゼント
珍しく電車の中で敬語聞く
珍客が来る日の母の薄化粧
日の丸を揚げる家で足止める
里帰りそつと握らす茶封筒
あの重みポーナス袋なつかしい
月末に封筒届く飲み屋から
ラブレターもらったことがあります
遺言状封切るときはみな黙り
親展と来た封筒にドキリする
封筒にまだかくしゃくと父の筆
彼にマイク持たせばきつと放さない
好い加減なボクに律義な影法師
エンドレス自由みかたの好きな趣味
過去未来雲の流れのごとく暮れ
きりが無い落葉無心に掃く帚
一滴が大地うるおし循環す
レコードの溝が潰れてエンドレス
むせびなくような胡弓の調べ風の盆
泣くがいい咽ぶがいいと母の墓

楓 楽 シマ子 弘子 いさお 東風 柳伸 篤 篤 あさ子 たもつ 柳右子 修 昌紀 勝弘 一歩 ばっは 志華子 恭昌 真佐子 タカ子 ルイ子 ひさ乃 亜成 弘委智 博 国和 郁夫

ぼくの胸貸すからむせび泣けばよい 克己
京都塔の会 山田 葉子報
被災地にオレンジ色の救援隊
オレンジの朝の光に出るガッツ
オレンジはサラダの端に色を添え
オレンジは元氣出る色あたたかい
スタートで足踏みをする悪い癖
鍋磨く無口の妻が恐ろしい
ただ耐えるこれしか言えぬ情けなさ
手術痕三十種痛かった？
子の言動家庭背景そのままに
長命がそれぞれブラン持ち歩く
班長になって統率力がつき
邪を打つ番長の少年期
足腰がめつきり弱くなる悲哀
長い目で見てくれたのは苦勞人
長ければいいというものでない帯
幸せが保証されない長寿国
半分ほどは要らん話の長電話
長文が纏れて絡むブルースト
案の定長女が夫に似てしまった
酷暑からめつきり弱くなりました
冗談もめつきり減った老いの口
皿の上オレンジだけのダイエット
オレンジ色の空に包まれ母偲ぶ

文代 元一 哲子 保子 五月 昭 弥生 光久 欣之 朝子 北舟 美津子 英旺 弘之 多津子 泰夫 求芽 弘子 雅美

オレンジ色の夕陽に今日をしめくくる
 オレンジをじっと見つめて独り言
 オレンジ色好きで洋服華やかに
 オレンジの灯が洩れ敵は勉強中
 心地よい椅子に長居をしてしま
 どのへんまで長生きすればいいのやら
 オレンジは豊かに実り人は過疎
 紆余曲折めつきり瘦せた向う脛
 洋志

ほたる川柳同好会(大阪)水野 黒兎報

ひび割れもカビも知らないバック餅
 のぞみでは安倍川餅は買えません
 介護の手餅は餅屋で手際いい
 頬ばって笑顔いっぱい餅食らう
 餅を焼くそうかそうかと聞きながら
 デイサービス帰りたくない独り者
 帰り着き湯船の中で父になる
 眼下に淀あ日本に帰り着く
 逢わぬけどちらほら届くのは噂
 一年のゴミと向き合う年の暮
 レトルトを詰めるお重も洗ったし
 日毎来る喪中ハガキに手を合わせ
 散髪もすんで正月準備良し
 片付けはこの辺で措くにしん蕎麦
 えんえんと続くコスモス花街道
 純子
 信男
 奈津子
 守啓
 美佐子
 順子
 一弥
 黒兎
 久子
 桂子
 春代
 則彦
 正子
 柳童

ブラザ川柳(大阪) 穂口 正子報

句友の名きらり輝く巻頭句
 朝焼けの戦士列なす停留所
 厨子の中ほのかに光る阿弥陀様
 猛練習目差す五輪に光る汗
 美智子様繭を紡いで絹伝え
 三度目は覚悟召されと凄む妻
 肺癌を覚悟で煙草吸う阿呆
 母になる覚悟の前に赤子でき
 お二人で被災地巡るラストラン
 手術台腹を括った鯉一尾
 町の中監視カメラの目が光る
 ちょっとだけ輝いていたからピアス
 手に入れてこんなものかと気が抜けた
 清乃
 悦夫
 弘光
 五月
 淳司
 一彌
 克三
 久美子
 政夫
 和代
 正子

川柳あまがさき(兵庫) 大浦 初音報

ケーキから何か臭って来る夫
 正直かアホか自から出すしっぱ
 産声にへその緒を切ってVサイン
 酒豪でも酒はたつぷり年の暮れ
 出酒らしにまだいけるよと湯を入れる
 一割の利息保証の電話切る
 まだ来ぬとバス来る彼方睨み付け
 忘れものまだ間に合うと走る母
 三種類ほど飼っている腹の虫
 公子
 たみえ
 柳明
 新録
 健二
 英坊
 菊江

まだかいな鮎やサシミの半値札 (八)修平
 少年にもどる不思議なねこじやらし 雪菜
 面白くひと味つけて裏話 純
 手酌酒おんな独りも味なもの 紀華
 指切りの夜をおぼえている小指 紀恵
 トントントン母の音する台所 こみつ
 ときめきも悩みも消えてよく寝た日 枯康
 あれ誰やあれに出とったあれちやうの 竹千賀子
 たつぷりの笑顔で五輪おもてなし 靖鬼
 たつぷりと愛を頂くパンダの眼 修平
 女とは哀しきものよ乳房切る (俗)花門
 小気味良い口調が人を惹き付ける 美籠
 味見した菌型が残るおでん鍋 ヨシエ
 彷徨うて人の味知る風を知る 正和
 晩酌をちよつと減らして義捐金 耕治
 ご馳走様おいしかったでござん満 かずお
 うっかりが増えて加齢を自覚する 万彩
 マスク痕ついたほつぺを揉みほぐす 哲夫
 長生きの列に混じって豆を買う ひとみ
 うれしくて流す涙におぼれたい 良種
 天空へ赤児たつぷり四肢伸ばす 宏造
 献杯にちよつと涙の味がする

きやらぼく川柳会(鳥取)後藤 宏之報

もみじもえ庭石に白き古都の寺 ゆたか
 花よりもだんご欲しくて参加する 美穂

お主出来るなどトランプ独り言
寝入り端間違ひ電話痛い音
働いていないが何時も腹が減る
団体に混じり聞いている一人旅

宏之
久直
紀の治
章

学ぶ日の総仕上げには手が震え
紅葉に負けぬ紅つけバスツアー
小さな手コインの手品種が見え

治代
菜々
美智子
美草

もみじの葉霜とキスして赤くなり
掃除した後から降つて来る白髪
満月に影と二人の帰り路

恵子
汪

紅葉して錦踏ませて頂いて
紅葉散り大山あとは雪を待つ
紅葉に人幸せな色染まる

千代
雨奇
多美子

悩みごと聞き取り敢えずお茶点てる
丹精の白菜冬の名役者
石段あがるたびに悲鳴をあげる足

令位子
美佐子
日枝子

六甲川柳会(兵庫)

奥澤洋次郎報

言いきつた男の眉は美しい
車間距離あなたと家族守る距離
少年の拳が叩くアンピシヤス

ひとみ
妙子

ほれほれとスマホ操る指の舞
守るもの何も無いのも淋しいな
錦秋を8Kで観るワンダフル

武彦
恭三
邦子

平成に思いを馳せて書く賀状
二日目のおでん大根ひとり悦

道子
美恵子
弘

星見上げ亡父と交信してる老母
もう会えぬ喪中はがきが今朝届く
アドバルンだけがのんびり年の暮
キツチンに凜と立つ妻ほれ直す

利子
洋次郎
和子
博文

ほれほれと見入っています手際よさ
九条を守りつづけた平和主義
善行にほれほれするよ人間味

光久
弘華
芳江

暮じまい先祖さんへすんません
大根の切り売りで知る野菜高
自国にて民守れない国悲惨

じろう
和郎
正彦

言い訳を自分にしてる十二月
血の薄い喪中葉書がたんと来る
謎解きが出来ないままの抽象画

美穂
博
敏夫

守る人出来て気概が満ちてくる
電車来る見えてあげよ白い杖
川柳塔さかい(大阪)

浩司
廣光

内藤 憲彦報

頃合いを見て暇する気働き
あの頃とつい口走る戦中派
頃合いはいいのに貴方鈍い人

誠一
妙子

飢餓の頃知っているからたじろがぬ
年頃になると父親避けだす娘
ひっそりと熟れ頃過ぎた子守柿

佳子
富美子
玄也

せかせかするな折角の運逃げて行く(歳)
落ち着いて下さい百までは遠い
せかせかの日々に追い討ち年賀状

満知子
清
ゆみ子
蕉子

急くな焦るな地獄の門が近くなる
気ぜわしい師走議事堂では昼寝
家の中せかせか妻は落ち着かぬ
雑巾をしぼり鐘聞く大晦日

みつこ
美津子
さくら
唯教

日記帳掃除をしなきゃ過去ばれる
泥の数落して今日の暮下ろす
蜘蛛の巣にハタキ取られるすす払い

志津子
進

障子張り替え網戸洗えた昨年迄
頭の掃除悔やんでみたり笑つたり
終活という大掃除さりげなく

憲彦
和夫

愚痴るまい決めて始める墓掃除
雨でんな掃除でもしてオンにする
窓ガラス悲しみ消える迄磨く

雅美
輝子

大阪の空気せかせかして温い
プレゼントお礼も言わず開けている
後ろからやいのやいのと係長

ひろ子
舞夢

急かされて影とぼとぼとついてくる
そう急くな今日は指定席なんや
せかせかを見抜かれている鼻の汗

雅明
五月
好

早占点駆け寄り見れば他人さん
袴着け可愛いしぐさ足袋跳ねる
腹立つが可愛い妻だ耐え忍ぶ

澄空
八千代
としお

ハイテクが介護の役に立ち始め
華やかな過去捨てきれぬ高い鼻
這い上がる覚悟を決めて耐えている

憲
倅子
敏治

恥の数重ねて今日も黄昏れる

時雄

あかつき川柳会(大阪) 山本 昌代報

今世紀ガン治るとオプジーボ
消費税おまけを付けた目くらまし
万博の予算を喰う五輪かな
災いは終りにしたい平成で
どつかれてどついて去りぬ相撲会
うそですな十分論議多数決
人生の端に立つても笑いたい
端の者に気づかう上司にある人
感銘を受けたページの端を折る
うなずいてはるが口端にある不
人間の端くれ正直に生きる
端でいい元気に歩き続けたい
南海トラフぎりぎりにある我が住居
愚痴るまいしかし言葉の端に出る
人の輪と丸い地球に端はない
異文化を物にするには先ず英語
年賀だけ交流の友喪の知らせ
交流の裏で増強軍事力
木と風の交流聞きに森に入る
肌の色ちがうけれども無二の友
ユニセフと交流風の向き変わる
対話外交縫れた糸が解けはじめ
文化交流御佛さまも美術館
老老のチット寄り添う散歩道

たもつ 博美 太 清 喜代志 郁子 冬のト シマ子 扶美代 栄子 朝子 堅坊 瑠美子 敏子 一志 福貴子 紀子 秀夫 みつ江 紅絵 和子 一步 ばっは 万作

詠えたお節に添える母の味
仏飯へ好きでしたネとタバコ添え
たこやきやの脱税タコも泣いている
手を添えて見取るほかない星が降る
大金にほんの気持ちと言ひ添える
ほほえんだ遺影に過去をだぶらせる
若過ぎる遺影に照れている仏
セピア色あの日のが疼きだす
軍服で写真の彬笑わな
立ち向かう危険戦場カメラマン
百歳が微笑む幸せの写真

富柳会(大阪) 関 よしみ報

坊さんも早足になる年の瀬は
窓辺から静かな会話手話と手話
六甲おろし勝てば敵とも握手する
友情という名の底に甘い毒
ルンルンと幸せの扉をたたく
朝の冷え山に錦を着せに来る
お互いに労いあつて両陛下
天窓に星降り注ぐログハウス
追伸の一言やがて光り出す
したたかなキック一挙に冬に入る
劳いの言葉は飾り立て不要
にんげんの本能を捨て知恵を得る
団欒の窓が笑っている灯り

ひろ子 穂夫 浩子 鈍甲 和雄 高鷲 いさお 惠美子 ダン吉 壽峰 克己 新之助 文重 伸雄 田鶴子 由夏 澄子 清 壽峰 常雄 あかり かこ 武人 惠

口説かれて八十路キックに暇が要り
回復の窓を飛び立つ千羽鶴
寒い日は木のふとところで四温待つ
月光の果てまで腕を組むロマン
私がわたしを労う時眠る
西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報
夕焼けへ私が唄う赤とんぼ
待つているひとが居るからまた走る
廻り道昨日とちがう空があり
のはほんとききてるように見られてる
ばたばたと中味乏しい法通る
早すぎる友がばたばた逝く真冬
ばたばたと七十五年生きちゃった
ご近所とほど良くなじむご挨拶
檜風呂お湯に香りがなじんでる
住む程になじむと赤い糸が言う
朝一句なじんだベンが走り出す
一見でなじみの客になる訛り
会者定離別れをいつも覚悟する
覚悟など神のまにまに生きてる
よその子に注意するのに要る覚悟
生きるため努力と覚悟ためされる
覚悟決めきり札一枚出して消え
シロウオが覚悟を決めた踊り食い
九十八歳看取る覚悟でスクワット

晴美 寿之 よしみ 欣之 森子 千津子 ひとみ 敦子 宏造 洋次郎 武彦 勝弘 哲子 新録 迪 健彦 盛夫 千代 いわゑ 千賀子 弘委智 野鶴 宣子 利子

キャラパンの覚悟を拒む鉄条網

覚悟きめ独身貴族捨てに行く

キャッシュレス小銭の価値が失せていく

ポケットの小銭数えて昼ご飯

お年玉小銭は駄目と孫先手

小銭だけ払って後は夫まかせ

ジャラジャラで一杯これが又うまい

非常時用テレホンカード十円玉

貧乏など怖くなかった若かった

ばたばたとしてもみたいなジャンボの夢

すらすらとなじんだ筆の軽やかさ

お賽銭小銭を借りて澄まし顔

なじんでる様でなじめぬ嫁姑

八尾市民川柳会(大阪) 中園

懐に金のまんじゅうたつぷりと

真剣な眼差し本気かも知れぬ

平成は異常気象の恐さ知る

トランプの本気は誰も分らない

太陽に命たつぷり干してある

吸って吐いて生きてる自分確かめる

取れるだけ貪り去って行くゴーン

掛流しバルブを捜す始末人

木枯しに手編みマフラー二人巻き

七色の顔見せ虹が立ち上がる

忘れゆくわだつみの声過去の声

弘子

正彦

恭子

堅坊

浩司

りこ

美津子

和宏

紀華

邦男

伯備

忠夫

嘉代子

清報

うせつ

壽峰

信子

紀雄

恵

常男

みどり

卓郎

涼子

かこ

高鷲

幸せの見本お節に詰まつてる

人間の愚かは果てしなき戦

ぐつすりとなむれた山はもう越えた

鈍が本気になった鈍屑

川柳塔まつえ吟社(島根)相見 柳步報

年の瀬がケチケチさせにやってくる

ケチしても論吉と縁がありません

金運もクジ運もなく亀である

なぞられてクスクス笑うあみだくじ

宝くじ役に立つのは外れくじ

宝くじ遠い世界のこらししい

アマダクジみんな平和に行きましょう

神頼みフェークニュースと知りつつも

この顔は神がつくった不作品

神様になる為よい子しています

神様とハグしたいけど少し無理

神様がピンチのときにおりてくる

頼らぬと社を背にし発つ武蔵

ラッキーがなければ神を信じない

長靴で走り掴んだのは枯れ葉

走れないゆつくり世間見て歩く

気のすむまで走ろう許せるように

どうせ行く走らなくてもいい所

とりあえずMを持ち込む試着室

妙

寿之

あかり

欣之

柳步報

草庵

輝山

芳山

美智子

みちを

邦代

知恵子

寿代

桂子

德利

ゆき

哲子

朋子

瑞人

柳歩

とも子

豊仙

孝子

雪代

弘充

長柳会(大阪)

辻村 ヒ口報

光る月部屋いつばいに抱きしめる

行くべきか迷い断ち切る稲光

光りもの付けて目立とう土蜜

記憶力光のように去って行く

大掃除道具の方が多くなり

どうせなら夫捨てたいゴミ出し日

大掃除したい人間数多あり

ごみと一緒に捨てられそうだ年の暮

大掃除古新聞と小休止

あらばしり浴びてこころの大掃除

増税で覚悟決めたの高齢者

老々介護覚悟ないまま生きている

覚悟してなんちゃことない老介護

飛び出して死を覚悟する蝉しぐれ

これまでと覚悟を決めて未練顔

いつの日か落葉のように散る覚悟

世話かけずポックリ逝くという覚悟

幕引きの覚悟未だ未だ恋心

まっすぐな子のまなざしにある覚悟

嫁ぐ日に決めた覚悟で生きている

病院の門をくぐるに身震いす

女房と不倫のように手をつなぐ

真夜中に物陰二人忍び合い

誰だった会釈されたが気にかかる

洋二

三和子

純風

ゆき

秀子

光弘

淳司

敬二

直樹

たけし

和代

旅人

隆彦

孝

幸子

由夏

ふみ

英美

孝代

則之

正博

靖博

登美子

似なくてもよい癖までも子が継いで
羽織袴へ燦然とノーベル賞
ベストセラーも古本市で東になる

倉吉川柳会(鳥取)

竹信 照彦報

川柳藤井寺(大阪)

太田扶美代報

野暮用をぎつしりと書く予定表
見込みない子どもはいないみな宝
茂夫 照彦
指の先まで心を込めて折った鶴
扶美代
岸和田川柳会(大阪) 石田ひろ子報

勝ちたいと負けた悔しさバネにする

負けて勝つ父の遺言守ってるよ

負け戦知って赤紙勝てなんだ

負けたふりあとは私の思うまま

漆にも負けたことない面の皮

妻が負け平和保てば万々歳

なあなあでダメなら脅すトランプ流

飯頭のなあなあにせぬ所作動作

政治家になあなあなどと言わせない

なあなあとすがる彼女が愛おしい

なあなあととなりの猫がやって来る

筋力がついた希望がわいてきた

温泉に浸かって海と山を食う

地中海希望半分のせた船

明日はあるある老いに言い聞かす

希望することが歩けることなんて

松茸じゃなかった群生笑い茸

ぎつしりと借りが残った十二月

ぎつしりの知恵計り知れないノーベル賞

持たせたい土産ぎつしり親心

福子 正美 和子 風露 紀美恵 日出子 由紀子 智恵子 康子 完司 萩江 醉芙蓉 重忠 鬼一 けいこ 麦青 次男 雄大 瑞子 野蒜 石花菜 節子 祐子

どなたにも好かれる得な丸い鼻
文庫本片手にほろり酒を酌む
ゆつたり気分味わいたくて一人旅
誰とでも仲良く出来るかすみ草
何もかもゆつたり気分丁度よい
愛もあり小金もあつて誰も嫌
すつぴんで頭下けても分かれへん
独りきりで誰でもひとり渡る川
誰にもいぬ私の轍二つ三つ
指触れてから始まった第二章
のんびりと今日も過ぎゆく老い一人
さざんかの宿で指輪が抜けません
ゆつくりと話を聞いてくれたお茶
先に逝くのは僕だと妻と指切りし
妻の愚痴ゆつくり聞いている番茶
夫婦してうさぎと亀の入れかわり
久し振りゆつたりして今日日は雨
指先の震えが止まる猪口二杯
誰も居ない階下の音に身構える
ふるりは誰もが戻る始発駅
病む母に誰と問われる淋しさよ

一歩 紀雄 かずお 一歩 弥生 光男 瑞美子 みつこ フジ子 一文 まつお シルク 久仁雄 六点 しげ子 喜代子 いさお ちづる キーキ 育代

歌よりも芝居上手の歌手がいる
チョンマゲのままでラーメン旅役者
村芝居若衆全員由良之助
癖のある役者だけれど渋い芸
癖のある人だが波長合っている
過ぎる日の脳裏に残る黒い雨
びつくりボン過ぎた女房と言われても
こだわりが過ぎていつしか変人に
飲み過ぎはあかんでと死期近い母
何食べても旨いと祖父の医者知らず
うまい汁吸って生きてるキリギリス
食欲があつてうまいと言える幸
祖母の蕎麦家族であげる五つ星
ごまかしがうまくいきすぎ胸痛む
音痴でも孫を眠らす歌唱力
釣った鮎仲間と焼いて飲む麦酒
母さんの御節美味しいと里帰り
上手い奴上には上がどの道も
セロリ食む音と香りに食すすむ
過保護だと育てて来ない自立心
回想をしながら語る母介護
人当りソフトで背骨まっ直ぐで

義泰 笑司 喜代志 ダン吉 敏治 鮎子 玲子 隆昭 珠子 秀夫 恭子 律雄 洋二 白水 和美 益子 康信 カズ子 ふさゑ

怒るのもソフトな口調なお恐い
ソフト過ぎる日本バリは燃えている
柔らかい言葉の裏にある怒り
恙無く過ぎた夫婦の無位無官

規子子 英夫 大輔 ひろ子
川柳ねやがわ(大阪) 籠島 恵子報

高飛車に出て引つ込みのつかぬ口
雨上がりの虹に明日の幸予感する
十字架の重さが背中まるくなる
皺出来て今更バックしてみても
問延びした秋を追いやる紅ツバキ
南無阿弥陀仏人生を引退します
想い出の岬は遠く二重虹

博泉 薫 鈍甲 かすみ 信子 弘一 西
病棟の深夜侘しい孤独感
引退を決めてすつきり日本晴
日本の武士は桜と共に散り
闘病記小さな手帳小さな字
涙涸れあしたは少し見えてくる
景気のいい話をさがす十二月

豊中もくせい川柳会(大阪)初代 正彦報

娘婿心臓手術無事終る
手の届く枝に吊るした夢ひとつ
命生む入院ママの底力
退院へ思いをはせる窓の外
虹を見て嬉しがつてるおばあさん
雨上がり元氣出せよと虹の橋
引退はしても顔出す口も出す
何もかも処分してから消えてんか
反省と称して集う飲み仲間
秋爽に心は虹を散歩する

朝子 郁夫 ルイ子 賢子 さち子 武彦 修 秀雄 祥昭 弘委智 あさ子 仁
遮断機の前で足踏み万歩計
八方からのお箸に焦る鍋奉行
あつさりと離婚したわと三回目
雪虫が小春日和に湧いて出る
妥協譲歩かなぐり捨てて一本氣
句読点打つ間もなしに日が沈む
先人の勇氣に感謝ナマコ食う
好きですと一世一代晴れ舞台
声かけてひや汗かいた人違い
ダイエツトあつさり漬けは食べ過ぎる
年の瀬の一人の湯船立たず
焼き栗が爆せて今年のウツ飛ばす(永)玲子
お別れは椿の花が散るように
いいヒント勇氣をくれたコラム欄
初社社勇氣を絞る隅の椅子
家系らしあつさり母も娘も離婚
こだわりは捨てようもめることはない

壽峰 高鷲 銀杏 麗 和織 恵子 歌留多 公子 英旺 求芽 健二 英三 健三 多美子 武彦 武彦 さらり 野鶴 美籠 宏子 久子
赤信号が早くと迫る道の幅
できません言えず悔しさのど通る
案内の矢印天を向いている
やけそでバンジージャンプやりましょう
それでいい嬉しい父の太鼓判
長生きをするほど友がいなくなり
ありがどう夫婦もこれが潤滑油
きっかけが無くてごめんねが言えず
焦らなくてもいつかは行ける弥陀の許
撤退の勇氣は志向する未来
ノーと言う勇氣が欲しい冬のベン
明日咲くつもりの花が案じてる
時々自分の底に種を撒く
怠慢を許してくれぬあと五分

翠洋会(大阪) 大久保眞澄報

方向音痴旗降る人に付いて行く
もう自転車季節じゃないと風が言う
後の方が彼女の見える僕の席
ローカル線人の温みに包まれる
回転木馬母とはしゃいだ日が巡る
試着室マネキン程に似合わない
お似合いの夫婦もたった三ヶ月
仲人にお似合いですと押し切られ
器用貧乏何も残せぬまま傘寿

黒兎 雅美 見清 耕治 葉子 則彦 千鶴子 美智代 寿之 ヨシエ 美佐子 かこ 恵 弘子 すみ子 げんせい 恭昌 理恵 舞夢 蕉子 善之 満作

来年も生きる心算か予定表

熱爛がとくとく論す悔い一つ

淋しさと背中合わせて雨を聞く

くちびるをニツと練習する笑顔

グラビアの料理に猫が喉鳴らす

グラビアの美女に惚れ込みまだ独り

コンピニにも春の海聞くお正月

十二月私も走る美容院

持久戦になれば若手には負けぬ

送ってくれるから遠い方の道

大山滝句座(鳥取) 新家

完司報

合う人と会う合わぬ人とは会わぬ

蟹取県うどん県には負けられぬ

もしの日のドナーカードと遺言書

クレヨンの白がわがまま通す冬

すうどんをすすする戦う今日の為

サバ缶も料理しだいで無茶うまい

天国へ行って帰ればヤッターマン

そんなことするからこんなことになる

偉そうに座ついても茶は出ない

もしもなど考えながらドラえもん

もしもなあ俺が死んだら五億円

恐ろしやもしも日本に禁酒法

無茶しても貫き通す恋の道

志華子

ふりこ

富子

大子

桃花

楓楽

敬子

千枝子

希久子

眞澄

言いませんもしもでも何も始まらぬ

病み上がり一升瓶の口開ける

明日ないと思えば今日を無駄にせず

にぎり飯すぐに出来るが川柳は

亡き夫が無茶が過ぎると夢に出る

無茶ですよ北方領土の会談は

四疊半チキンラーメン分けおうて

移民にも引つ越し蕎麦を振る舞おう

遠い孫サンタを真似て電話する

叶うなら木の葉を札に変えてやる

献体にもしもの時のサインする

無茶なんて無縁の人と暮らしてる

宝くじもしやもしやに五千枚

仏教だが聖夜の時だけクリスマスチャン

飲兵衛の家には来ないサンタさん

川柳さんだ(兵庫)

村田

博報

ここへ来て人の指図はもう受けぬ

もう誰の指図も受けぬ酔つ払い

愛犬も誰が主人か知っている

気がつけばあなたの色になつていた

好きなもの聞いて許さぬ処方箋

病人も今夜は飲もうクリスマス

酔うているうちに好きたいあの世まで

うわばみと同じ会費じゃ付き合えん

格安でちよつとお出かけハワイまで

昭子

雄大

風露

けいこ

由紀子

富隆

野蒜

道唱

正男

重忠

久子

鈴野

博明

希楽良

完司

ゆかり

修平

祐康

ひとみ

哲男

ひろ介

加代子

久美子

厚子

あこがれのハワイにあつたスラム街

ハワイまで行ってランチに寿司うどん

その内その内と遠くなるハワイ

ブルーハワイ飲んで聴いてるプレスリー

ウクレレを弾くと婆ちゃんフラダンス

恩讐の彼方に霞む真珠湾

フラダンスハワイの風を連れて来る

真夜中に騒いで終わる猫の恋

駅前のだみ声二人市長選

引退の騒がせニュース相撲部屋

夜泣きする権利を行使した赤子

見て聞いて騒いでいたい好奇心

七億も当たれば内緒には出来ん

原色が騒ぎ立ててるピカソの絵

お世辞にも美人じゃないが僕は好き

湯上りの賛美が欲しい美人の湯

試着室の鏡お世辞も言いなさい

日に三度お世辞も足して二人膳

お歳暮を贈って開ける里の声

ミサイルで無くて良かったガスボンベ

春近し修理はまだか青い屋根

越前の水仙が呼ぶ蟹が呼ぶ

キャッシュレスだけ優遇される軽減税

ルミナリエ何年振りか腕を組む

あの地震を知らぬ娘とルミナリエ

勝弘

野薫

千代美

花門

哲夫

ヨシエ

千賀子

真桜子

つな子

万彩

一子

正和

宏造

優子

宣子

耕治

恭子

道

健二

徹

周三

雅尚

和世

武彦

好文

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 あまがさき	12日(火) 14時締切 消す・音・しつこい・自由吟	尼崎市女性センター・トレビエ 2階 阪急武庫之荘駅南へ5分 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
岸和田 川柳会	16日(土) 14時締切 筆・灯る・ちぐはぐ・ユニーク	岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄「岸和田」駅東へ5分 〒596-0076 岸和田市野田町2-13-19 中岡香代
川柳塔 みちのく	16日(土) 17時締切 少・吹雪・真・未来	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」TEL0172-36-6614 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 TEL0172-36-8605
川柳 ねやがわ	17日(日) 13時締切 淋しい・沢山・告発・席題 自由吟	寝屋川市 産業会館 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 藤井寺	17日(日) 14時締切 味わい・へとへと・席題共選	藤井寺市生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5-8-20-303 鈴木いさお
豊中 もくせい 川柳会	18日(月) 13時50分締切 人形・拾う・赤い・自由吟	豊中市立中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
川柳 さんだ	19日(火) 13時締切 白熱・実行・バランス・粘る 自由吟	キッピーモール (JR三田駅前) 〒669-1545 三田市狭間が丘5-10-19 谷 祐康
川柳 たちばな	20日(水) 13時45分締切 席題・まさか・遊ぶ・自由吟	立花公民館(尼崎市塚口町3-39-7) 阪急塚口駅北へ10分 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
川柳塔 すみよし	23日(土) 14時15分締切 良心・決める・めっちゃくちゃ	住吉区民センター2階 集会室4 〒580-0026 松原市天美我堂3-130-2-404 森松まつお
和歌山 三幸川柳会	23日(土) 13時15分締切 鬼・黒・白	和歌山商工会議所 4階 第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
はびきの 市民会 川柳会	24日(日) 14時締切 攻・階段・シニア	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車 北東へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川柳 ふうもん 吟社	24日(日) 13時から 自由吟・基地・あせる・空 席題	開発ビル 2F 砂場事務所 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南大阪 川柳会	25日(月) 18時30分締切 ちゃっかり・溺れる・軽い アップアップ	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 メトロ谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都 塔の会	25日(月) 14時締切 スケッチ・相・うんざり	ハートピア京都 京都市中京区烏丸九太町 地下鉄「丸太町」駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勤修寺堂田70-16 榎本宏子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

2月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
城北 川柳会	2日(土) 14時締切 いそいそ・甲乙・気後れ 自由吟	旭区老人福祉センター 3F メトロ谷町線「千林大宮」駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
川柳 とんだばやし 富柳会	2日(土) 14時締切 中・まぐれ・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉吉 川柳会	2日(土) 14時締切 刺さる・見る・あの頃・席題	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳 塔え社 まつ 吟	2日(土) 13時30分締切 閃く・春・嫉妬・複雑	松江雑賀公民館 〒690-1223 松江市長保岡町笠浦222-1 相見柳歩
川柳 塔な ら	6日(水) 14時締切 トラブル・ほろり・歩く	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄「奈良」駅④番出口 徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787 安土理恵
あかつき 川柳会	8日(金) 14時締切 水平・名高い・豆・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2F) メトロ「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川柳大阪	9日(土) 14時締切 試験・継ぐ・スタート	メトロ・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
六甲 川柳会	9日(土) 14時締切 我がまま・返事・海外 自由吟	六甲道勤労市民センター 5F E室 JR「六甲道」駅南隣 メイン六甲内 〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4-11-11 上田和宏
川柳 塔打 吹	9日(土) 13時30分締切 噂・混む・几帳面・席題	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民 川柳会	10日(日) 14時締切 勝手・さまざま・熱い・雑詠	渋川・安中集会所 JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
西宮北口 川柳会	11日(月) 14時締切 二人・伸びる・はっと・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
川柳 塔わかやま 吟社	11日(月) 14時10分締切 予感・空白・繋ぐ・点	和歌山商工会議所 4階 和歌山市西汀丁36 兼 題 〒649-6253 岩出市紀泉台366 藤原ほのか 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 柴原道夫
ほたる 川柳 同好会	12日(火) 13時30分締切 例・過ぎる・しっかり	豊中市立蛸池公民館 阪急・モノレール蛸池 蛸池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
川柳 塔さかい	12日(火) 14時締切 ドキドキ・責任・折句・ちとせ	東洋ビルディング 4F 堺東駅北西改札口から2分 〒599-8103 堺市東区菩提町5-171 矢倉五月

柳界展望

たそのもので

にある死角

▽訂正とお詫び△

境港市

藤原 久直

★「第37回鳥取県没句供

天位 山野 寿之

○10月号、P 100中段11行

紹介者

竹村紀の治

養川柳大会」川柳ふうも

愛妻が正座で待って

目、終ってしまったばあつ

橋本市

後藤 宏之

ん吟社主催は、12月16日

る深夜

利子↓良

木本

北 恵子

鳥取市新日本海新聞社

★平成30年度西宮川柳会

子。P 103下段12行目、成

紹介者

木本 朱夏

ホールで173名の参加で開

最優秀賞 久保田千代

長株と言われ続けた日も

大阪市

宮本千恵子

催。同人成績。

▽動 向△

遠い 利子↓良子。

紹介者

藤井 宏造

優勝 前田 楓花

○南大阪川柳会平成30年

行目、山と谷折って折つ

三田市

中山 寅男

準優勝 倉益 一瑤

年度間賞

で千羽鶴↓山と谷折って

紹介者

上田ひとみ

第三位 石橋 芳山

川端 一步

折りの千羽鶴。

村田 博

第四位 両川 無限

長高 俊雄

○1月号、P 78、6行目、

大阪市

末永 力

第十位 新家 完司

▽出版△

竹内紀の治↓竹村。P 103

紹介者

木本 朱夏

天位 石橋 芳山

○小河柳女句集「昨日よ

上段25行目、破れゾーン

鳥取市

佐々木静恵

大木に隠れちゃっかり

り一ミリ深い井戸を掘

ズ履くと足取り軽くなる

常任理事会

森山 盛桜

生きてきた

る。新葉館「川柳作家

良子↓利子。

常任理事会

①第25回川柳塔創立95周年記念まつりの骨子確認

通販の誘い樹海へ迷い

ベストコレクション」B

6判P 95。定価1200

年記念まつりの骨子確認

②川柳塔誌電子化合本復

込む

円+税。

鳥取市

太田 睦子

活状態について③第7回

天位 前田 楓花

○城北川柳会（大阪市）

鳥取市

紹介者

加藤 慎一

四コマの続きは星にな

「合同句集『わんど』第

鳥取市

紹介者

森山 盛桜

つてから

十集」を発行。A5判P

伊丹市

岡村 風琴

次回常任理事会

ひとつ家ふたり暮らし

138。

紹介者

江島谷勝弘

日(木)AM 10時

第43回 全日本川柳2019年浜松大会

日時 2019年6月16日(日) 午前9時開場
会場 アクトシティ浜松中ホール
〒433017790 浜松市中区板屋町111-11

交通機関 JR「浜松駅」から東へ徒歩3分
〒053(451) 1111

主催 一般社団法人 全日本川柳協会・全日本川柳浜松大会実行委員会
後援 文化庁・静岡県・静岡県教育委員会・浜松市・浜松市教育委員会・静岡県文化協会・静岡新聞社・中日新聞東海本社

課題 第一部 4月15日消切(当日消印有効)
事前投句 一般(高校生も含む) 部門

「富」 佐藤 清泉選 「光」 久保田千代選
「案」 小林信二郎選 「働」 小笠原 望選
事前投句 ジュニア(小学生) 部門

「風」 濱山 哲也選 「走」 鴨田 昭紀選
「握」 手 確水 祥昭選

専用紙のない方は、2×16cmの句箋一枚に一句を記入、各題二句無記名封筒の裏面に住所・氏名明記。
投句料 1,000円(定額小為替・現金書留)を同封して左記宛に郵送
または郵便振替口座へ送金のごとく当日消印有効。

投句先 〒53010041 大阪市北区天神橋2丁目北1-11
一般社団法人 全日本川柳協会 宛
〒06(635)2210 郵便振替口座 0907019125433

講演「新発見!北斎と川柳」講師・十六代目 櫻木庵 尾藤 川柳樓
宿題 第二部(当日投句・11時締切)

「さすか」 渡辺 梢選 「ぶ」 村上 水筆選
「走」 西 恵美子選 各題二句、当日配布の句箋に記入。
第二次選者 本田 智彦 天根 夢草 江畑 哲男
参加費他 四、〇〇〇円

表彰 (1)文部科学大臣賞 (2)参議院議長賞 (3)川柳大賞
(4)大会賞 (5)ジュニア部門賞状とメダル

全日本川柳浜松大会実行委員長 今田 久帆

〇表彰式典 〇前夜祭(ご案内)
川柳文学賞・功労者・大会連続参加者・平成柳多留入賞者
大会連続参加者の表彰は自己申告のため日川協事務局まで申請してください。

〇前夜祭Ⅱ表彰式典後、同一会場
会場 ホテルクラウンパレス浜松
〒43018511 浜松市中区板屋町110-117
TEL 053(452) 5111

参加費 八、〇〇〇円(会食・アトラクション)
大会・前夜祭のお問い合わせ先
〒43318105 浜松市北区三方原町1724-121 田中 恵子方
TEL 053(436) 9123

大会・前夜祭の参加費の送金先 4月15日締切
郵便振替口座番号 00840191154813
全日本川柳浜松大会実行委員会 宛

〇宿泊のご案内
ホテルクラウンパレス浜松(浜松市中区板屋町110-17)
ダイワロイネットホテル浜松(浜松市中区旭町9-1)
シングル 12,000円
ダブル 10,500円

ホテルルートイン浜松駅東(浜松市中区中央3-10-28)
シングル 8,300円
ダブル 8,300円

※満室の場合は、同程度のホテルをご案内することがあります。あらかじめご了承ください。
※取消料に関しては、宿泊のご案内にてご確認ください。
※取消料に關しては、宿泊のご案内にてご確認ください。

株式会社JTB 浜松支店(担当)山田・林・和田
〒43010934 浜松市中区千歳町70-1ファンヒルディング1階
TEL 053(454)6981 FAX 053(452)0941

※宿泊のお申し込みは専用の申込用紙にご記入の上、郵送またはFAXにてお申し込みください。

〇宿泊の申し込み、問い合わせ先

全日本川柳浜松大会実行委員長 今田 久帆

編集後記

★老司祭黒にも無垢の衣あり 薫風

★月波与生さん(川柳宮城野社)の「われら紅い花川柳会」は第8回高田寄生木賞受賞作。野沢省悟さん(触光主宰)のご厚意で転載させて戴いた。川柳界の抱えている問題点を笑いの中に指摘している。弘前川柳社の濱山哲也さんに松山芳生さんの追悼文をお願いした。軽妙な筆さばきの中に父とも慕う芳生さんを喪った悲しみが溢れている。ともに50代、川柳界期待の俊秀である。

もごはんはおいしく食べる。に始まり、その⑦小さなことは気にしない。(世の中のものとは小なことです)まで。それぞれ子猫の表情が愛らしい。★世の中のものとは小さなことと猫に訓えられたが、人間だもの、悩む。その悩みに答えてくれるのが白水社刊「人生案内」。副題が「出久根達郎が答える366の悩み」。目次を開く。自分自身の悩み。両親の悩み。嫁姑(婿・舅)の悩み。兄弟・姉妹の悩み。親戚づきあいの悩み。友人の悩み。お金の悩み。職場の悩み。恋愛の悩み。近所や地域の悩み。病氣・死の悩み。介護の悩み。きりが無い。

★ねこに学ぶ楽しい毎日(すこし方)サンリオオは僅かに16ページの。本。本というより猫の写真に短いコメントが添えられたカード集といった体裁。その①どんな時に「珍しい名前前で仕事に支障」(義母が私の写真に針刺す)「年金生活、今後の香典心配」「うんざり義妹の実家から中元」「お祝いをくれない友人」「闘病中の元恋人に会いたい」……。人間の数だけ悩みはある。悩みに寄り添い出久根氏は親身に答えておられる。

★相談の内容を見る。「十八歳長男、携帯に月20万円」「外の女性にばかり優しい夫」「夫が食事中に入れ歯をなめる」

「珍しい名前前で仕事に支障」(義母が私の写真に針刺す)「年金生活、今後の香典心配」「うんざり義妹の実家から中元」「お祝いをくれない友人」「闘病中の元恋人に会いたい」……。人間の数だけ悩みはある。悩みに寄り添い出久根氏は親身に答えておられる。

★さて私は、秋の創刊95周年記念特集に頭を悩ませていた。

「以前、「番傘」誌上で、笹倉良一氏が「協取りは大

ひとつこと

「ひとこと」

誌友にさせていただいて、締切のある生活に戦戦恐恐としています。題のない水煙抄への投句は川柳のおもしろさを感じるとともに、自分へのきびしい挑戦だと思ひ心して作句をしなればと思っています。

塔誌に、この「ひとつこと」欄を拡大したようなページがあると、皆様からの自由な刺激がいただけ

るのではないかと思いました。お会いできない方のご意見や感想また川柳に対するお考えなどを自由に投稿する欄があると励みになると思うのですが、如何なものでしょうか。

今は、ネット時代で即座にやりとりをするのでしたが、ゆっくりと活字になったものを読み、考える誌面があると嬉しいと思ひました。

(大石 洋子)

(勝弘)

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限りません。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
- (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時までにご利用いたします。

作品募集

4月号発表 (2月15日締切)

川柳塔 (8句) 小島蘭幸選
 水煙抄 (8句) 西出楽選
 愛染帖 (2句) 新家司選
 檸檬抄「びかびか」 (2句) 山端一歩共選
 インスレクション・ナビ (2句) 大西泰世選
 一路集「先輩」 (2句) 江見清選
 一路集「ごめん」 (2句) 西田美恵子選
 初歩教室「先生」 (3句) 高瀬霜石担当
 初歩教室「先生」は5月号発表

5月号

檸檬抄「草」
 一路集「雫」「レンズ」
 初歩教室「ベット」

川柳塔WEB句会のご案内

課題「電話」 島田 駱舟 共選
 斉尾くにこ
 締切 2月20日 発表 2月25日頃
 投句料 無料
 インターネットで「川柳塔」を検索しWEB句会をクリックしてご投句ください。

定価 八百円 (送料93円)
 半年分 五千円 (送料共)
 一年分 九千八百円 (同)

二〇一九年(平成三十一年)二月一日発行

発行人 小島和幸
 編集人 木本朱夏
 印刷所 美研アート

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一四一七
 花野ビル201号室

発行所 川柳塔社
 電話 〇六六七九一三四九〇番
 振替 〇〇九八〇一四一九八四七九番

本社2月句会

とき 2月7日(休) 13時開場・13時40分締切
 ところ アウィーナ大阪 4階 金剛の間
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441

おはなし「夢見の不思議」
 席題「」
 兼題「スタイル」
 「ほんやり」
 「痒い」
 「盛り」
 「現実」

会費 1000円
 投句料 500円(切手可)
 (各題2句以内)

藤井則彦氏
 鈴木いさお氏
 山野寿之氏
 内田志津子氏
 山岡富美子氏
 藤村亜成氏
 小島蘭幸氏

本社3月句会

7日(木) 午後1時から
 兼題「ほどほど」「息」
 「不覚にも(読み不可)」「育つ」「野性」

川柳・俳句・エッセイ・小説 新聞・広告・ポスター・伝票等

あなたの思いをかたちにします。



美研アート

〒531-0061 大阪市北区長柄西1-1-10
 TEL (06) 4800-3018
 FAX (06) 4800-3028
 E-mail: bikenart@ea.mbn.or.jp

※事務所移転につき住所・電話番号が変わりました。

オニザキのプレミアムロースト

つばなま

杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、
香ばしい薫り。舌と記憶に
しつかりと残る、深いコク。

料理をより美味しくする

ゴマを作りたい、真つすぐな

想いから生まれた逸品。

それが「プレミアムロースト」。

素材本来の良さを余すこと

無く引き出した、オニザキの

自信作をお届けします。



株式会社 オニザキコーポレーションセルズ
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>